アストライア初陣

輝ける星光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アストライア初陣

【Ｎコード】

Ｎ０２０６Ｒ

【作者名】

輝ける星光

【あらすじ】

リレー小説企画、『輝ける星光』第一段。遺跡調査。

侵入、門番と犠牲者（前書き）

執筆者ウラン

侵入、門番と犠牲者

「北大陸アルコノストの北西部で、旧文明期の遺跡が発見されました。
行商の為に移動していた商隊が、吹雪を逃れる目的で逃げ込んだ洞窟の奥に、前時代の施設らしきものを見付けたそうです。
調査したところ、今までその辺りに遺跡が確認されたという記録は存在していませんでした。
これは手付かずの遺跡である可能性が極めて高い。奥には貴重な古代遺物が眠っていると思われます。
ですがその分、中がどうなっているかは分かりません。けして油断は出来ないでしょう。
どんな危険が待ち構えているとも知れません。準備は入念に、怠りなく。
細心の注意を払い、探索を行ってください」
ｂｙ実質副艦長っぽいメイドさん

というわけで、私ラグナを乗せたアストライアはそのアルコノストとかいう所に出航中である。
……船あつかいでいいよね？　艦っていうくらいだし。
まぁ、そんなどういでもいいことは置いておくとしよう。それとももっと議論したい？　へー、勝手にすればいいんでね？

私は既に準備を終えて、広場的なところに佇んでいる。
服装はいつもの白衣に白いズボン、白い靴という白々セッツ。

武器はハンドガン、つまりは拳銃二丁。二刀棍（ジークフリート）は持っていかない。
その他、凸状の盾（コンベックスシールド）と手鏡サイズのマジックミラー。
最後の武器じゃねーって？
いやさ、あーゆートコには３０００℃とかの高熱レーザーなんて理不尽なものを容赦なく放ってくるような奴がわんさかいたりするからね。
所詮は光、反射でバーンって感じよ。まぁ、流石に熱までは防げないけどね。一応耐熱加工はさせて……してあるし。
「ラグ、早いね」
そう気安く話し掛けてきた少女は確か霧川とかいう名だったはず。
「そっちも……きりきり」
そう言うと、霧川は何か奇怪な者でも見るような目つきでこう言った。
「どちら様でいだっ！　目がっ！　目が焼けるようにイダいっ！！」
気安く勝手なあだ名を付けたことを許すどころか、あまつさえあだ名を付けてあげたラグナちゃんマジ仏ー。
うん、だから、仏様に無礼を働いた霧川が罰を受けるのは当然であり、むしろ目潰し程度で済ませてあげた私って超やさしいねっ！
「……おい、霧川が目を押さえてもがいているのだが」
「……幻覚」
「いくらなんでも無理があるかと」
子供艦長ことノイウェルに、冒頭のセリフを担当したメイドバトラーリリアが接触を持ちかけてきた。
「……真実は、小説より奇なり」
「いつの名言なのだ、それは」
３０００年くらい前の。
「そろそろ遊びはお止めください」
「到着したぞ！」
周りを見ると、狙撃銃を担いだアウロにレリオ、ガンレットを合わせて気合入ってるっぽいセルシア、描写しがたい感じにでこぼこ

しているスキンク、それから少し怖そうな表情でカトママぶってるエレーナの姿が。
皆それぞれの様子だが、その瞳に浮かんだ好奇心は寸分たりとも違わない。
「皆の者！　遂に、我らの冒険の始まりだ！」
ノイウェルは、そう高らかに宣言した。

「そうだ、アウロに値下げしてもらったタプカの実でリーナに健康にいいお菓子を作ってもらったぞ！　なに、心配はいらぬ。全員分用意してある。リリナ、配っておいてくれ」
おー、遂に私も先輩の手作りお菓子を食べれる日が！
何やら回復した霧川の表情が、上げて落とすかのごとく暗いっていうか、何か悟りを開いたお坊さんみたいになってるけど、まいっか。

で、その洞窟の入り口。
「普通の洞窟にしか見えんがなぁ」
とは子供艦長の談だ。
「まぁ、取り合えず進んでみようよ」
そう霧川が言い、奥に進む。
「うむ、そうだな」
船長が後に続き、当然のようにメイドが付いて行った。
その他にセルシアも先に行く。
まぁ、船長以外は前衛だし、妥当な並びかな。残りの前衛であるスキンクだって後衛達の護衛についてる……のかなぁ？
つーか、もっと後ろ下がっとけよ艦長。

と、前衛メンバーの最後尾にいたセルシアが小道に入った所で、ガッシャーン、とハイテクっぽいシャッターが下りてきた。
「――――っ！」
慌てて、アウロにレリオ、エレーナ、スキンク後衛グループ、つまり私以外がシャッター近づいて行く。
しかし、今度はシャターの手前、もとい前進した四人がいる場所が沈没した。
エレーナの悲鳴が響き、遠ざかって行く。少しして完全に消えた。
……あれ？　私一人ぼっち？
と自分の置かれた状況を冷静に判断していると、何か機械音のようなものが聞こえてきた。
「……まだ、何かあるの？」
私の呟きなど関係ないとばかりに、天井から白い物体が落ちてくる。
それは一言で言うと、機械だった。
球体の頭に楕円系のモニター画面が映し出され、虫のような四本脚を持ち、白く塗装されたメタリックボディが金属光沢を放っている。
太古昔にあったらしいスフィンクス、というものに似ていて、それが立ち上がったらこんな感じになるんだなー、と思った。
……成程、これは罠だ。
先方の侵入者を閉じ込め、慌てた他の者を惹きつけてばらけさせる。
残りはこのロボットで、といった手口。
「……ふーん」
私は躊躇いなく引き金を引いた。
とっさに取りだし、いつでも発砲出来るようにしておいた一丁の拳銃（ハンドガン）。
アストライアにいつからか居座っていたヒッキー製の、自称鉄をも貫く弾丸。

だがそれは、白い機械に届ききる前に弾かれた。
――電磁シールド？
アレは確か持続時間が少ない。でも、いくらなんでもそれの展開が終わるまで拳銃を打ち続けるわけにもいかないし……。
機械へと、一直線に間合いを詰めていく。
接近系の武器は持ってきていないけど、電磁シールドを長時間展開されるには直接攻撃するしかない。
しかし、近づくにつれて何故か熱くなってきた。
気温上昇？　一体どうして？
いよいよ、温度が人体には耐え難いまでに上昇した。さっと下がるが、白衣の端が焦げていることに気付く。
これはうん、あれだね。あの機械すっごく熱い。
つーか、発熱ってあり？　服が燃えるってどんな温度だよ。これじゃあ近づけないじゃん。
長距離から銃を撃っても防がれるし、近づいたら燃えるし。
まぁ、動かないのがせめてもの救い――
『認証ノ不一致ガ確認サレマシタ。目標補足、破壊シマス』
うわっ！　何か近づいてくるんですけど！！
私は逃げる。あんなのに近寄られたら死ぬって、本当に！
動きを遅くするために、機械の足元に威嚇射撃を放つ。しかし、今度は電磁シールドを張らなかった。
何故？　何故張らない？　自分に銃口が向けられているかどうかわかるのだろうか？
もう一度引き金を引く。今度は機械の頭へと狙いを定めた。
すると、電磁シールドが銃弾を弾き飛ばす。
にしても、随分と型の古い電磁シールドだな。えぇっと、あれは確か――
突然、ビュゥン！　という音がして、右足に激痛が走る。
……きたよレーザー光線。うん、あの外見、いつかはやると思ってたよ。

ってかヤバッ！　なおも前進してくる白い機械、私今ピンチっぽくない！？

一か八か、私は白衣のポケットからマジックミラーを取り出し、放り投げた。

それをもう一丁の拳銃を引き抜き、鏡に向かって撃つ。

一筋の光線が鏡に反射し、白い機械の足を一本貫いた。

『足部破損ヲ確認。原因不明』

銃口を向けることが電磁シールド発生の条件という私の予想は、大方当たっていたらしい。

すると、肌が気温の低下を感じ取った。どうやら、想定外の事にラグが生じているようだ。

その機を逃さず、私は一気に間を詰め、壊れていない足を一本持ち上げて近くの穴に機体を投げ飛ばした。

あはは！　これ以上まともに戦っていられるかっつーの！

実銃と光学銃。違う種類の拳銃を持って来たのは正解だったらしい。

正直、最後の反射を利用した銃撃は賭けだった。ある程度の角度調節くらいならなんとかなるが、正確に当てるのはいくら私でも不可能だ。

何回か外れることを覚悟していたが、どうやらそれは気鬱に終わったらしい。というか、幸運だった。

――まぁ、別に外れた所で大した問題はないのだけれども。

既に完治している自身の足を見て、私はそう思った。

しっかしあの機械、何なのだろう。

というか、ぶっちゃけ魔法師（マジシャン）か超能力者（サイキッカー）いれば楽勝だったんじゃね？

あきらかに魔法と超能力（サイキック）の存在を考慮していない設計。
おかしい。まるで、そんなもの知らないといわんばかりの――。
……あ、そういえば、あの機械投げ込んだ穴ってさっきの落とし穴じゃん。確か、あのグループって見事に銃使いばっかだった気が……。
まぁうん、なんとかなるでしょ。つーかしてくれ。
私はそうだなぁ、シャッター閉まっちゃったから先には進めないし、あえて落とし穴に落ちるのも危険だしなぁ。いや、高さ的に。決してさっき放り込んだ物体が原因じゃなくて。
一応救護班を名乗ってるわけだし、外に出て怪我人の治療準備でもした方がいいかなぁ。うん、そうだ、そうしよう。
というわけで、皆が出てくるまでサボ……待機しておっきまーす！
あ、そうだ。先輩が作ったお菓子があったんだっけ。それでも食べてようか……。

ノイウェル・リリナ・禾槻・セルシア
洞窟前部
進行中

アウロ・レリオ・エレーナ・スキンク
洞窟地下
消息不明

ラグナ
洞窟入り口
意識不明

脱落者１名
残り８名

進行、空飛ぶ刃とザトウムシ（前書き）

執筆者　Ｍｒ．あいう

進行、空飛ぶ刃とザトウムシ

いやぁ、私の勘も鈍ったものねぇ。
なんて自嘲しながら私は重力に従ってほぼ九十度の傾斜をすべり落ちていた。
頭上からシャッターらしきものが落ちてきて、行軍をばっさり一刀両断して。
焦ったような顔でこちらを振り返った幼い艦長さんの珍しい表情に冷静さを吹き飛ばされるなんて、いつの間に私の感情は柔らかくなってしまったのやら。
「キャアアアア！！　落ちてる！　落ちてる！」
隣ではエレーナさんがわが身の不幸を実況中継している。ふところをゴソゴソと探りながら極めて冷静そうなスキンクさんはともかく、急展開に困惑と焦燥の表情のレリオさんと非戦闘系のエレーナさんは助けたほうがよさそう、が、この老体で果たして大丈夫なのだろうかという不安もよぎる。
「やれやれ、不覚ながら、早速文明の利器に頼ってしまいそうね」
誰にともなく呟きながら、左手の指輪に手を掛けた。確か、このつまみを押して……

「あぁ？　つまみを押せ！　するとバリアで無敵状態だ。分かったら寝かせろクソババァ」
散らばる書類や嫌な臭いを撒いている灰皿が乗った机で突っ伏して寝ていたアストライアの研究者さんを揺り起こして、艦長さんに「アウロは年を取っているからな、危なくないように探索にはこれをもっていくといいぞ」と渡された機械仕掛けの指輪、艦長さんは高電磁シールドだということ以外あまり知らなかった。ので、詳しい使い方を聞いてみると、心底不機嫌に不愉快そうにそう吐き捨てて再び睡眠に入ろうとする彼。

少々カチンときたので、今度は少々強めに揺り起こす。
「いえ、一体どういう仕様なのかを聞きに来たんだけど。不明瞭で仕方がないからもう一度詳しく説明してくださる？」
「……てめぇはあれか？　俺の安眠を妨害するたぁ神にでもなったつもりか？」
私の十分近い努力に折れて、覚醒し切らない頭で煙草に火を付ける研究者さん、名前はハウエンツァ。
彼の手から煙が出るかでないかの内に、その手から煙草をひったくって灰皿に押し付けた。
「クソババァ何しやがる！」
寝起きでいつもの悪態も切れが悪いご様子。笑顔を崩さず淑女的に対応してみた。
「いえ、アストライアの艦長が全席禁煙の職場を推奨してましたので」
「馬鹿かてめぇは。あのクソガキ＞俺様の方程式をしらねぇのか？　分かったら失せろモウロクばばぁ」
「いやぁ、もちろん知ってますよ？　だから艦長が説明出来なかったこの指輪の使い方を聞きにきたんじゃあないですかハウエンツァさん」
この手の偏屈はある程度話を合わせて持ち上げてみこしに担げば何とかなる。
プライドある相手は、そのプライドを傷つけられるより敗北を選ぶ、アウロ婆さんの知恵袋ね。
「はぁ！？　この天才過ぎる俺以外にそれを扱えるわけねぇだろ、最速で説明するから脳髄フル稼働で聞きやがれ。まず有効範囲だが……」
……半径1．5メートル、なら。有効範囲に3人くらいは入るでしょうね。
落下しながら手を伸ばして手近のエレーナさんをまず引き寄せる。

そしてレリオさんには背中から狙撃銃を伸ばして掴ませる。もちろん銃口はこちら側。
三人が集まり団子のような状態になったところで指輪のつまみを押す。
空気が凝縮したような効果音と共に可視の電磁シールドが寸分違わず半径一メートルに展開された。
幸い、手足が少し出てたので粉砕骨折しました！　のような事態も発生せず着地。
「おいおいアウロ婆さん。そんな便利なもん持ってんなら早く言ってくれよ」
不服そうな表情（推定、防毒面着用の為声色から判断）で見下げるスキンクさん。何処から取り出したのかかぎ付きロープでぶら下がっている。
「うぅ、助かりました。ありがとうございます」
パタパタと服の汚れを払いながらお礼を言うエレーナさん。
「ありがと、アウロ婆さん。……しかし、な。助かったかどうかはまだわかんないぜ」
そういって、レリオさんは落ちてきた穴とは逆に視線を向ける。つられて一同もその視線の先に眼をやった。そこにあったのは……
「……これは、戦艦、ですかね」
皆の視線の先には、ほこりをかぶった巨大な戦艦が鎮座していた。アストライアのように特殊な形状こそしていないが、１００メートルはあるかと言う巨体には、今なお威圧感が宿っている。だが、その戦艦を覆うようにして作業用の骨組みが残っており、あちらこちらに部品が散らばっている。
そちらに向かって歩きながら楽しそうな声色でエレーナさんの言葉に説明を加えるスキンクさん。
「だろうな。多分アストライアより少し前の型の戦艦。こりゃ博物館クラスの大物だぜ。しっかし、枠組みだけで未完成だな。一体作業者達は何処に言ったんだよ」

何気なく放ったであろう作業者がいないという彼の言葉は、しかし口調とは裏腹に重たい意味を持っていた。
「おそらく……」「魔物の襲来、って所かな」
おや、先を越された。レリオさんが奥歯を噛み締めて何もない空間をにらみつけている。
「いくら旧文明期の遺跡だっていっても、ここが何らかの理由で放置されたとしても使える部品くらいは回収するはず、敵襲だったらなおさら。これら兵器に一切興味を示さず、且つ敵を分断する罠までかいくぐってこの基地を殲滅させられんのは、餌目的でやってきた捕食者の線が濃厚。つー解釈であってるかな、アウロさん」
そう言って、気だるげに笑顔だけを向けるレリオさん。その眼に宿る暗い炎。
「ええ、そうね。付け加えるとしたら、ここが旧文明の遺跡にもかかわらず、照明が生きているって言うのは、周囲の魔素を吸収して発光する魔法石があるから。そんな高価なものを照明に使えるっていうのは金持ちの証拠。ここが魔物に殲滅させられたのなら、奥に進めばもっと高価な物があるのかしらって期待くらいねぇ」
「そりゃあもっともな意見だ婆さん。俄然やる気が出てきたぜぇ！」
嬉々とした笑顔を浮かべながら（推定以下略）先へ進もうとするスキンクさん、その首を掴んでエレーナさんが引き止める。
「ダメですよ。まずは皆さんと合流しないと！　私の能力でなんとか……」
突然、背後でけたたましい金属音と、長年地下に沈殿していた空気を引き裂くような電子音。
私が思わず振り向くと、先ほど私達が降りて（落ちて？）きた穴の下に駆動音を響かせる金属塊が転がっていた。中央部分にモニター画面には砂嵐、四方バラバラに突き出た四本の足だったものはぎしぎしと動き宙をかく。落下音がなくなり、奇妙な電子音がようやく、意味のある単語の羅列だと気づいたとき、
『頭部ハソｓｓｓ『前脚ｋｙ部破損ハソガガガガガ『目標カク二ｎ

『認証ニニ『原因不明制御不能『制御不能』『危険性ヲ破壊破壊ハカイィィィィ』ｒｒレベルレッド』『ッコードジェノサイド・換装開始ィィ.ｉｉ……』

その金属塊はすでに目的を持って自らを組み替え始めていた。

使えるパーツを、ただ眼前の敵の殲滅に用いるために。

……まぁ、なんというかえらく刺々しいフォルムになりつつあった。

モニター画面のあった球体を覆うように全ての部品が金属棘へと変化、と同時におびただしい数のそれが八本に収束、結合する。結果そのうちの六本が地面を付き、体を持ち上げ、残りの二本がこちらに向けられ威嚇するかのように上下する。スクラップのような姿のそれはザトウムシの如く姿へと瞬く間に変形した。

「……おい、今、大虐殺（ジェノサイド）っつったよな」

「……聞きました。てことはあれ」

「……ああ、絶対に逃げたほうがいいと思う」

「喋ってる暇もどうやらないねぇ。とりあえず走ろうか」

老骨に鞭打ってでも走らなきゃいけない局面が来るなんて、もっと未来の設計図を描いて日々を過ごすべきだったと後悔しながら、反対方向へ全力疾走。

背後のザトウムシを振り向くと、信じられないような速さでこちらに迫ってきている。

「扉、扉が向こうにあります！」

息も絶え絶えになったエレーナさんが必死に指差した先には金属製の扉があった。

あれが果たして後ろのザトウムシ相手に何秒持ちこたえるのかはさておき、私はその扉に駆け寄る。

と、いうか一番速く扉にたどり着いたのが６０過ぎたばあさんだと言う現実は、私が元気すぎるのか、それとも彼らが貧弱なのか。

まぁ、軍隊に７歳で入った私と常識を比べても仕方ないわね。

扉を開き、後続の彼らが全員入ったのを確かめて左の肩口に鋭い

衝撃が走った。
壁を見ると焼け焦げた跡、背後からのレーザーでの一撃だと理解する。
あの手の機械が遠距離武器を備えているなんて想像付いてもよさそうなものなのにと自分に喝を入れつつ滑り込ませるようにして扉の中に入り、閉める。
頭を一発で撃ち抜かれなかった点から照準装置は無いか、ぶっ壊れている。
壁が焼け焦げていた点からこの金属の扉はあの武装では壊しきれない。
それにしても、右肩の翼に当たらなかったのは幸いだった。
「アウロさん！　肩から血が！」
左肩から流れる血を見たエレーナさんが蒼白な顔で叫ぶ。
「ああ、まあねぇ。それより、先を急ごうか。あいつがここを破るのも時間の問題だと思うよ」
安心させようとそう言って、ポケットからナノリペアを取りだした。
服用すると蛋白質で構成されたナノマシンの結晶体が溶け出し、体内環境を整え、傷口も内側から高速でリカバリーしてくれる優れもの。これもあのハウエンツァとかいう性格の悪い彼の発明なのだから、その点では頭が下がる。しかし、口に入れようとするとその手をエレーナさんが止めた。
「あの、これを使ってください。同じナノリペアですけど、私が持っててもいいから」
いや、と言いかけて、止める。集団行動で最もつらいのは役に立てないことだ。責任感の強いエレーナさんならなおさら、先ほど私に助けられた事を忘れられないのだろう。
「ありがとうねぇ、助かるよ」
そういうと、エレーナさんが少しだけ、ほっとした表情を見せる。
さて、いつまでもだらだらしていられない。

「とりあえず、前衛の人たちと合流しないと。私達だけじゃあ戦力不足だからねぇ」
「確かに、狙撃手二人に非戦闘向きの超能力しかない竜人に怪しげな防毒面の男じゃああの金属蜘蛛の相手にゃあ不足だな。とりあえず対策は走りながら考えるか」
「自分で怪しげな防毒面の男って言うか……」
レリオさんの呟きを置いて、私達は廊下を走り出した。
金属と金属がぶつかり合う嫌な音を背後に感じながら。

廊下を抜けると、キャンプファイヤーでもやれそうな広い場所に出た。五階くらい上を見上げれるここが、どうやら玄関口だったようで、美人の案内嬢が似合いそうな受付と大画面モニター、そして五人掛けのベンチが十ほど設置されていた。
「さて、と。まずはここがどこか。それと前衛の人たちは何処にいるかを突き止めなくちゃいけないんですけど。闇雲に上に上に行くのは良策とは言い難いですし」
そのうちの一つに腰掛けて、レリオさんが問題を提示する。
しかし、スキンクさんは好奇心の赴くままにウロウロとしているだけで、私にもとても妙案をひねり出す体力は残っていない。
そんな中、エレーナさんがおずおずと手を上げた。
「前衛の方々と合流するんですよね。だったらそこの受付のコンピューターから私の能力で何とか地図を引っ張り出せると思うんですけど」
竜人族は一人一人固有の超能力を持っており、その一人であるエレーナさんも例外ではない。
彼女の持つ超能力は透視、触れた物の使い方や触れた人の心を読むことが出来る。
情報はすべて過去、または現在進行形のもので未来はあまり読めないが、しかし機械の中から情報を引き出すなどその使用方法は多岐にわたる。私もたまに複雑な調理器具の使い方を教えてもらって

いる。
「本当かよエレーナ、なんか輝いて見えるな」
「えぇ、ありがたいですねぇ」
「ふふふ、ありがとうございます」
ふわふわとした会話で意図的に緊張をほぐしにかかった。
早速取り掛かったエレーナさんだったが、しかし残念ながらこんな場所で平穏など1分ももつはずも無く。
最初にその気配に気づいたのはレリオさんだった。眼光鋭く上空に眼を向ける。レリオさんの危険に対する察知力には同じ狙撃手の私でも眼を見張るものがある。
そんな様子に気づいた私とスキンクさんが一拍遅れて頭上を見上げた。
「来る……アウロ婆さん。その左肩で何処までやれます？」
背中に背負った対物ライフルを構えながら心配そうに尋ねるレリオさん。やれやれ、いつから私は若い人に労わられる立場になったのかしらねぇ。
「ほ、ほ、ほ。ずいぶんな口を聞くじゃない。年季が違うわよレリオさん」
そう言って狙撃銃を構えて見せると、苦笑を頂戴した。
「エレーナさん。とりあえず、あなたが地図を見つけるまでは粘るつもりだから。作業に集中していて頂戴ね？」
柔らかに、穏やかに、そう念を押す。
ふと横を見るとスキンクさんは煙のように消えていた。まぁ、あの人に関しては心配無用かしらねぇ。
「それじゃあ、位置について」
「よーい……」
ドン、と。開始の合図は銃声で。
上空の魔物に私とレリオさんの銃弾が吸い込まれ、落ちてくる。
外見は青銅色のコウモリ、体長は羽を広げて一メートル半といった所でしょう。だが羽の部分は鋭利な刃物へと進化を遂げている。

飛翔し、思考するブーメラン。と行ったところかしらねぇ。ダクダクと床に広がる黒血が、魔物である事を証明していた。
毒性こそ無いが、同属を呼び寄せる悪夢のような血液。それが床に広がったのを引き金に、上空から次々と青銅色の刃が滑空し接近する。
次々と迫り来る上空の敵に狙撃体勢は取れない、が。
「走って逃げながらの迎撃は得意分野なんです……よ！！」
滑空し首元を狙う刃を横転し交わしながら、狙撃銃と腰のコンバットナイフを持ち替えて再度接近してくるコウモリの頭を切り裂く。
逃亡生活中に身につけた狙撃手にあるまじきスキルだったが、遠距離でばかり戦っていられなかった過去はそんな事情はお構いなしだった。
ちらとレリオを一瞥すると、近距離に近づけさせまいと炸裂弾を駆使して上空のコウモリを物量で叩き落していた。が、しかし。
ズン、と地響きが響く。振り向くと同時に引き金を引いたが、驚いた事に銃弾は硬化した翼にはじかれる。
そこにいたのはコウモリとは言い難いまでに巨大化した生物。本来空を飛ぶための翼は四速歩行のための独自の変化をとげており、天井に張り付くための後ろ足は跳躍の姿勢を取る。
そのコウモリが、驚異的な瞬発力で、跳ぶ。
一瞬で間合いを詰められては狙撃銃の長い銃身はむしろ邪魔。奇声を上げて横薙ぎの一閃。間一髪のところで交わし、狙撃銃の代わりに拳銃を取り出し、超至近距離で狙い撃つ。
が、その確実に当たったと思われた銃弾は魔物の瞬発力に追いつかない。一瞬で五メートルは後方に跳びずさる。そのわずかな交戦、その隙間を縫って攻撃しかねていた上空のコウモリ達が一斉に無力なエレーナさんに襲い掛かる。その刃の数は五つ。
「レリオさん！　エレーナさんを！」
その声でトランス状態となっているエレーナさんの方向にレリオさんが振り向いた、振り向きざまの狙撃で一匹は仕留められた、残

り四匹。
狙撃は間に合わないと判断、懐のコンバットナイフ二振りを投擲、二匹を柱に縫いつける。
しかし、無理な体勢でナイフを投げたために狙撃が間に合わない。レリオさんの狙撃もあと一発が限界だろう。が、そんな心配を吹き飛ばすようにレリオさんの第二射、一発の弾丸はエレーナさんの首元付近まで近寄っていたコウモリを二匹まとめて吹き飛ばした。
だが、レリオさんは余りにエレーナさんに集中力を使いすぎた。
「……痛っ！　ミスった！」
上空のコウモリが完全に意識の外からレリオさんの背中を切り裂く、防弾ジャケットが朱に染まる。
援護しようと狙撃銃を構える、が。地上の巨大コウモリが私目掛けて跳躍、回避が間に合わず右足の腿肉を削がれた。婆さんのわずかな肉までもって行ってどうするつもりかぜひ尋ねたい。
バランスを崩したところにさらに上空からコウモリの急襲、首だけはガードしようと手を掲げる。
が、その時聞き覚えのある電子音が鳴り響いた。
『非常ジジジｚｚｚ『敵性生物カク『敵性『敵『敵『敵『ｔｔｔｔ『殲滅』『ｓｓ『攻撃対象タスウ『マルチレーザーレーザー『ジェエェノサイドォォォォォ』
先ほどのザトウムシ型ロボットが出現し、レーザーを乱射する。
ただ、先ほどと決定的に違う点は、この場にいるのが認証されていない人間だけでなく、人間の敵の代表格である魔物がうようよと存在する点だった。
レーザーに捕らえられるのは空中のコウモリ達、次々落とされていく仲間をみて、魔物たちも攻撃の優先順位を変更した。滑空しザトウムシに斬撃を加える、が金属のボディはたやすくは切断されない。
「地図見つけました！　こっちです、早く逃げましょう」
トランス状態から脱したエレーナさんがぶんぶんと手を振り、一

つの扉を指差す。
右足を引きずりながら歩いていると、レリオさんが肩を貸してくれた。
「大丈夫かアウロ婆さん。年なんだから無理すんなよ」
「……ったく、人生の先輩に向かって生意気だよ」
そういいながらも、おとなしく体重を預けさしてもらった。
「いやぁ！　絶景だぜ全く！　蜘蛛型兵器ＶＳコウモリ軍団の異種格闘戦。見ようとして見れるもんじゃねえよなァ～！」
「スキンク……いつの間にそんな所に。今まで何処にいたよ」
「ん、ハウエンツァの奴が作った光学迷彩スーツの性能を堪能して隠れてたんだよ、ほら」
そう言って、拍手（かしわで）をうつと同時に姿を消してみせるスキンクさん。
「なーんか光の屈折率を操作してるらしくてな。このプレートを操作するだけで、簡単に透明人間だ」
手の中のプレート型の小型装置をもてあそびながら飄々とした態度でヘラヘラと笑う（推以下略）スキンクに対して青筋を立てるレリオさん。心ナシか私の腰の手がきつくなる。
「俺達が必死で戦闘してるのに安全地帯でのんびりしてたわけか……」
「ひゃはははは、世の中逃げるが勝ちってねェ～！」
そんな風に嘯く彼の軍服についている焦げ跡と、心無し引きずる左足は、おそらく私の左肩と同じレーザーによるものだろう。あんなうまいタイミングでロボットが現れるはずが無い。
おそらく魔物の襲来に気づいた時点で、ロボットと魔物を対決させる構図を思いついたのだろう。
そして、危険を冒してロボットをここまで誘導して来た。
こんな事を本人に言えば高笑うだけだろうが、なんだかんだ軽口を叩くが彼もまた、アストライアの一員なのだろう。
「自分で言わない功績を、他人が言うのも野暮な話だねぇ……」
「ん、なんか言ったかアウロばあさん？」

「いや、スキンクさんにため息をついてただけさね」
そしておそらく、彼自身もそんな風に思われるのは心外だろう。
彼はあくまで、自分のためにしか動かない人間だと自負しているらしいから。
「皆さん、急いでください！　あっちの戦いが終わったら、どっちが勝つにしろ次は私達の番ですよ！？」
「「「確かに」」」
三人の声が同調し、苦笑を生む。扉の中に入り、一時の平穏が四人を包み込む。

ノイウェル・リリナ・禾槻・セルシア
洞窟前部
進行中

アウロ・レリオ・エレーナ・スキンク
洞窟地下
休憩中

ラグナ
洞窟入り口
意識不明

脱落者1名
残り8名

休憩、嵐の前の静けさ（前書き）

執筆者：百合宮桜

休憩、嵐の前の静けさ

上手く魔物（？）のようなものから逃げた私たちは現在、レリオさんの起こした火で暖をとっています。
「エレーナさん、はぐれた人達の行方とかもわかるのかい？」
アウロさんがにこにこ笑いながら聞いてきました。
「はい、もうわかっていますよ。リーナさんがくれた保存食を食べながら作戦会議をしましょう？」
「「「アレ、食べるの？」」」
スキンクさんとレリオさんが引きつった顔で私を注視しています。そんなこと言ったってしょうがないじゃないですか！　アレ以外に食べ物ないんですから！
「私は食べるよ。リーナさんがせっかく心を込めて作ってくれたんだ。食べないなんて失礼じゃないかい？」　アウロさんは優しく諭すようにそう仰いました。流石、自称お婆さん。懐の深さが違いますね。
「いや、でもさ……」
「そうだぜ、婆さん！　いくら俺が防毒マスク被ってたって体内の毒までは防げねぇよ！」
そりゃそうでしょうね。
「まあ私もそのまま食べろとは言いませんよ」
「熱湯消毒でもするの？」
「違いますよ、スキンクさん。これをどうぞ」
そう言って手渡したのはいつぞやも使った竜人族の秘薬。
「ソースか？」
「そうですよ。前にも使ったのですが、味がマシになり、気絶しないのです」
「まあ、気絶しないで済むのは有り難いけど……」
味は……やっぱりダメなのか。レリオさんは少し遠い目をして仰

いました。全く味がなんだって言うんですか！　あ～これだから戦争を経験してない世代は困りますよ、贅沢で。最も心の中で思うだけで口には出しませんが。
「ひゃひゃひゃ、本当に大丈夫なのかい？」
ニヤニヤ笑いながらスキンクさんがソースを見つめます。
「大丈夫ですよ」
それで漸くスキンクさんも信用したのでしょう。ソースを受け取って、ご自分の保存食にかけられました。皆さんもそれに倣います。
「ありがとねぇ、エレーナさん」
最後にアウロさんがかけて、私の元へソースが戻ってきました。私も適当な量をかけて、皆で食べました。その時です……
バッターンとレリオさんが後ろに倒れました。泡を吹き、目は焦点があっていません。彼はどうもソースをかけていなかったらしいのです。Mっ気があるのでしょうか？
まあそんなことはどうでもいいのです。この人手不足の時に倒れられると流石に困るので私はナノリペアを取り出しました。レリオさんに飲ませようとしたのです。
「待ちな」
後ろから声がしました。スキンクさんです。
「何でしょうか？」
「あの嬢ちゃんの料理で倒れた奴にはナノリペアは効かねえよ。ナノリペアは壊れた細胞の修復と活性化をはかるもんだからな」
「そうでしたね。私は随分と慌てていたようです。でも治せないとなるとどうするのでしょう？」
「見捨てて先に進むしかないだろうねぇ」
ずずっとアウロさんが縁側でお茶を飲んでいるような雰囲気で話します。
「でも……」
「起こしても役に立ちそうにねぇしなぁ」
お二人がそう言ってるなら仕方ないですね。最短ルートで行く位

しかレリオさんへの罪滅ぼしにはならないでしょうし。
「さっき手に入れた地図の情報をモバイルパソコンに起こしますね」
そう言って、私はトランス状態に入りました。
一分も経たないでコピーが完了しました。我ながら見事に纏まっています。
「皆さん、こちらへ。画面に映っているのが洞窟内の地図です。ラグナさんは洞窟の入り口にいます。何故かはわかりませんが、ずっとそこにいるんです。艦長のチームは洞窟前部ですね。この辺です。まだ魔物にも会わず、平和に進んでいるようです。私達がいるのが洞窟地下です。もう少し奥に入るとワープがあります。洞窟内の分岐点へ向かうワープです。艦長のチームもこのまま何事もなく、進めばそこへ到着するはずですから……そこで皆さんを待ちませんか？」
「俺は異論はねぇよ。もとよりここのことは何もわかんねぇしな」
「私もかまわないよ」
お二人の同意が得られたのでいざ出発です。
念の為、レリオさんへの伝言を残します。

少し奥に箱のようなモノがありました。三人入っても大丈夫そうな大きな箱。能力で調べたら、案の定ワープの機械でした。皆で箱に入ると中にボタンがあったので、それを押しました。ヴヴンという機械にありがちな奇妙な音を立てたと思うともう洞窟の分岐点に到着したようです。場所が明らかに違います。ノイウェル艦長たちはまだ来てないようですね。これからの作戦を立てながら待ってましょう。

洞窟前部
ノイウェル、リリナ、禾槻、セルシア

分岐点
スキンク、エレーナ、アウロ

洞窟地下
レリオ（意識不明）

洞窟入り口
ラグナ（意識不明）

分岐、仲間との合流（前書き）

作者　ＣＯＲＯＮＡ

分岐、仲間との合流

「……う……あ？」

はて？私はなんでこんなところで寝ていたのだろうか？アストライアのメンバーと遺跡の探検にきたはずなんだが。

……遺跡に入ってからの記憶がない。ちなみに子供艦長もいなければメイド長もいない。それどころかキリキリもアウロ婆さんも酒乱ことレリオやエレーナもいない。スキンクは……あいつはまぁ、大丈夫か。

つまり、なにが言いたいかというと

「私、ひとりぼっち？」

シンプルにいうとそういうことだね。辺りを見渡すと地面には弾痕が開いてたり焼け焦げた跡があったり、砕け散った鏡が……これ私の鏡じゃね？ポケットを探ってみたが、やはりない。ま、いいか。

とりあえずここで戦闘があったことは間違いないようだ。死体もなければ血痕もないのでとりあえずは皆は無事なのかな？で、戦闘中に理由はわからないが気絶した私はここに置いていかれたと。

ぬぅ、薄情な奴らめ。アストライアに帰ったらいたず……もとい、説教せねばなるまい。

さーて、これからどうしよう。みんな居ないことだし、ここでさぼっておけばいいよね？うんそうしよう。

お、ちょうどいい瓦礫はっけーん。そこで昼寝でもし「カチッ」

……カチ？

おそるおそる足元を見るとそこには地面に偽装させた何かのスイッチ。次の瞬間には深くて暗い穴。

「あああああぁぁぁぁぁーーー」

私は抵抗するまもなくなく落ちていく。

「はぁ……みんな大丈夫ですかねぇ」
「なに、心配は無用だ。きっと無事であろう」
私ことセルシアのため息の混じった呟きに、ノイウェルが答える。
私たちは仲間たちと罠によって分断されたあと、道なりに歩を進めていた。途中、何度か防衛用のロボットに襲われたが、これといった怪我もなく、順調に進んでいる。
「そうですよ、皆さん優秀な人たちですし、大丈夫に決まってます」
「もっとも、これしきの事故で死ぬようではこれから先冒険することなどかないませんが」
禾槻とリリナの言葉に私は苦笑いを浮かべる。確かにアストライアのメンバーは癖のある人が多いが、皆優秀なのだ。一人では乗り切れなくても、力を合わせて生き残っているだろうとセルシアも思う。
「あ、誰か居るみたいですよ？」
禾槻が示す方向に視線を向けると、そこにいるのはエレーナ、アウロ、スキンクの三人。彼らにも目立った外傷は見えない。
「おお！無事だったか！」
彼らの姿を見つけては走って駆け寄っていくノイウェル。心配は無用など言っていたが、やはり本心では心配していたのだろう。彼女たちもこちらの姿を見つけては安堵の表情を浮かべている。
「……レリオやラグナは一緒ではないのか？」
確かに、ここにレリオとラグナの姿は見えない。彼らはまだ別のところにいるのだろうか。
「あー……ラグナ嬢のことは知らないが、レリオの旦那はなぁ」
スキンクがちょっと気まずそうに話し始める。どうやらレリオはリーナ特製のお菓子を、どういうわけか何の対策もなく食べたらし

い。案の定気絶したレリオはとりあえず安全なところに置いてきたとのこと。
あの男は学習しないのだろうか、と思わず苦笑いを浮かべる。ほかの人たちも同じように苦笑を浮かべている。
「ということは、あとはラグナさんか……」
私が呟くと、皆黙ってしまう。誰も彼女の消息を知らないのだろう。辺りが一瞬静寂に包まれる。
その静寂の中、私の強化された聴力が微かな声を拾う。
「この声は……ラグナさん！？」
声の質から人物を、大きさや反響から位置を確認すると私は慌てて立ち上がり上を見上げる。それにつられて皆も何事かと上を見る。
強化された視力が落ちてくるラグナの姿を捉えると同時に落下地点へと移動する。
そして次の瞬間、私の腕にかなりの力が降りかかる。思わず落としそうになるが、何とか堪えきった。
危なかった……あの速度で落ちてきた時には目の前でスプラッタな死体ができあがるところだった。
「……うん、配置をもう少し考慮すべき」
私に抱えられているラグナは口調こそ軽いがよく見れば冷や汗をかいている。普段はあまりこういった姿は見せない彼女のことだ。今回は本気で危なかったようだ。
「い、いったいどこから現れるんですかあなたは！？」
「……落とし穴、古典的な罠。少数を対象にすれば容易な分離などの効果をもたらすが、床に注意を払い続ければ回避が可能。故に、まず複数回の利便は望めない。しかし成程、レーザーの雨を浴びせるなどの処置を取れば、初見でなくともそれなりの――」
「なるほど……つまり、落とし穴に落ちたのであろう？」
「……」
「落ちたんであろう？」
「……」

エレーナの問いにラグナは淡々と答えるが、ノイウェルがラグナを見つめながら問うとラグナは視線をそらして黙ってしまった。しかし、確かにエレーナの言葉はもっともである。下手すれば死んでいたのだ。他の人たちも確かに、と頷いている。

「……では、そろそろよろしいでしょうか？」

ラグナが落ちてきたあと、皆少し休憩したところでリリナが話を切り出した。

「さきほどエレーナ様からの情報で、この先が最深部であることが確認できました」

その言葉に皆の表情が引き締まる。

「先ほどまでの探索でここが手付かずの遺跡であることは明らかであり、しかしこれといった古代遺物や情報は見つかりませんでした。ということは、この先の部屋に何かがある確率は非常に高いと思われます」

「なるほどね……確かにその通りだ」

リリナの言葉にアウロが納得したように頷く。

「ここにくるまでに様々な障害がありました……。防衛用のロボットやトラップしかり、外部から潜り込んだ魔物も存在しました。この先に貴重な遺物が眠っている可能性がある以上、強力な護衛が配備されていてもおかしくありません。そこで、それにそなえて皆様の装備、所持品を確認したいと思うのです」

「たしかに。皆の所持品や戦力を知る事はとても大事なことだな」

腕を組んで納得するノイウェルをみたメンバーたちは各自の所持品と装備を並べていく。

どうやらあまり消耗はないらしい。ナノリペアが二個と各種弾薬が幾分か減っているが、戦力に支障はないだろう。ナノリペアも弾薬もまだまだ余裕がある。問題はレリオがいないことぐらいだろうか。

道具を確認したリリナは腕にある腕輪型のモバイルパソコンにつけられた時計に目を通す。
「はぁ、しかたありませんね。レリオ様は置いていくと……」
リリナがため息をついて話し始めると同時、エレーナたちが通ってきたらしいワープ装置が起動し始める。
装置が放つ光から出てきたのは、体中に傷を負ったレリオだった。その姿をみた何人かは表情が引きつる。
「ってー……俺を置いていってもらっちゃこまるぜ」
レリオの口調は軽い。どうやら見た目に反して傷はそう深くはないようだ。
「な、なにをいってるんですか!?早く治療しないと!」
「お、サンキュー」
慌てるエレーナからナノリペアを受け取ったレリオは苦笑いを浮かべながらそれを飲み込む。流れ出る血は止まり、傷も次第に塞がっていく。
「……で、なにがあったのですか」
「ん?いやー気絶したくだりはもう聞いただろ?目を覚ましてすぐここを探してたんだけどよぉ、途中で魔物どもに見つかってな。多勢に無勢、命からがら逃げてきたってわけよ」
笑いながらリリアの質問に答えるレリオ。すでに傷は完全に塞がっている。
「うむ、よく生き残った!これで全員そろったぞ!」
「そうですね、各位準備はよろしいですか?」
リリナはそう言って周囲を見渡す。

意気揚々と腕を組むノイウェル。
ノイウェルの傍に粛然と佇むリリナ。
銃を手にもって立ち上がる禾槻。
両手のガントレットを打ち鳴らすセルシア。
馴れない銃を持って緊張の表情を浮かべるエレーナ。

いつもどおりのマイペースなラグナ。
マスクのしたで怪しげな笑みを浮かべる（ていると思われる）スキンク。
武器の確認をしながら立ち上がるアウロ。
座り込んではいるがライフルを上へと掲げるレリオ。

用意は整った。
あとは最深部へと踏み込むのみだ。

ノイウェル・リリナ・禾槻・セルシア・エレーナ・ラグナ・スキンク・アウロ・レリオ
分岐点　最深部前

決戦、破壊の君主と冒険者（前）（前書き）

執筆者：ういいち

決戦、破壊の君主と冒険者（前）

古代の研究施設を奥へと進む冒険者一行。彼等が長い通路を抜けた時、唐突に広大な空間へと辿り着いた。

それまであった閉塞感が失われ、代わりに屋内とは思えない解放感が押し寄せてくる。仰ぎ見れば天井は高く遠い。奥行きも両壁との距離も、通ってきた通路と一線を画す。かなり大規模なホールだった。

構成している物質は、現在一般的に使われているものとは異なるようだ。鉄に似た光沢を持つが、それよりも鈍く冷たい印象がある。３０００年の長き時間が経過しているとは思えない、新品同様の姿。太古の技術力がどれほど凄まじかったかを教えてくる。

駆け込んできた９人は、だだっ広い領域を中程まで進み、思わず脚を止めた。驚嘆と共に周囲を見回す。

「此処はいったい、何のための場所なんだ？」

到底届きそうにない彼方の頭上を見て、レリオは不思議そうに首を傾げた。それへ後続のアウロが私見を述べる。

「これだけ大きいと倉庫か、でなきゃ実験場なのかもねぇ」

「それにしちゃ、随分とまぁ小奇麗なこった。責任者はよほどの綺麗好きとみえる」

防毒面から軽口を叩くスキンク。

「……霧川と気が合うかも」

それを引継ぎ応じるラグナは、前に立つ禾槻を見た。

「会えるものなら、僕も是非お話がしたいけどね」

話を振られた側は肩をすくめ、苦笑しながら頬を掻く。その様子を近くで見ながら、エレーナは優しく微笑んでいた。

「でもどんな方なんでしょうね。ちょっと興味があります」

「私も同感です。これだけの技術水準を誇っているなど、驚きを禁じえません」

エレーナに賛意を示し、セルシアは溜息を吐く。驚きと尊敬が混在する表情は、此処にいる一同に共通するものだ。一部、マスクの所為で顔が分からない者も居るが。
「ふぅむ。やはり古代の文明は奥が深いな。これだから冒険は止められぬのだ」
嬉しいそうに床板を触りながら、ノイウェルははしゃいだ声を上げる。この遺跡に踏み入ってからというもの、彼の心は躍りっぱなしである。
「皆様、御気を付け下さい。何か来ます」
リリナの放った怜悧な声が、全員の意識を瞬間的に引き締めた。常に低く冷たく安定した精神状態を保つ艦長付きメイドの声が、この時は平時にない緊張を宿している。それが伝わり、各自は武器を手に戦闘隊形を形作った。
セルシアとリリナが最前衛に立ち、その後ろに禾槻、更に下がってレリオとアウロが位置し、ノイウェル、スキンク、ラグナ、エレーナの四人が後衛部隊だ。
各員が自分の得物による間合いを考慮し、敵襲に備えて布陣を敷いた時。突然、全員の見遣る前方空間へ巨大な物体が落下してきた。
硬い床板に叩き付けるが如く着地し、発生した衝撃で空間全体を揺動させる。床も壁も全てが震え、其処に立つ冒険者一行を同じく襲った。危うく倒れそうになるのを寸でで堪えた面々が、今一度正面空間を見る。九つの視線が等しく集う場所には、山城と見紛うほどの巨体が黒々と聳えていた。
それは金色の剛毛で覆われた巨躯の野獣。全長にして５ｍへ達そうかという、禍々しい獣の王だ。
厚い毛皮の下では膨れ上がった筋肉が犇き、鋼に似た光沢と物々しさを放射する。四肢は樹齢を重ねた大木と見紛うほど逞しく、前後肢の先からは鋭利な爪が伸びていた。野太い首の周囲に黄金の鬣（たてがみ）が揺れ、長く太い尾がしなやかなに鋼板を叩く。
ギラつく牙を覗かせた口部は深く裂け、並びの良い牙列が鈍く光

った。両眼は燃え盛る炎と同じ真紅。高みから冒険者一行を見下ろしている。
巨大な魔獣の頭部は虎とも獅子ともつかない。だが牙を剥いて唸る面貌には狂猛さと荒々しさが滲み出て、現存する生物を平伏させる風格を感じさせた。歴戦の猛者たる威風と、無敗の戦士たる矜持を併せ持つ、恐ろしくも雄々しい王獣の顔である。
「猛犬のお出ましだ」
自身を数倍する巨獣を見上げ、スキンクは軽やかに口笛を吹いた。あまりの迫力に、脅えるよりまず先に感嘆してしまう。
他の面子にしても同様である。かつてない巨体と威容に呆然と見入るノイウェルを始め、生唾を飲む禾槻と、開けた口を閉め忘れているレリオ。エレーナは口に手を当てて絶句し、口端を吊り興味深げな目で見遣るのはアウロ。リリナは緊張に若干髪を逆立てつつ、セルシアは我知らず拳を握り、ただラグナだけが普段の佇まいを維持していた。
各々が突然の乱入者によって思考を削いだのは、一秒にも満たない僅かな間だった。半瞬後には意識を組み替え、行動を起こすべく肉体へ電気信号的指示を飛ばす。無意識下の活動指針に反射の域で体が動いた時、一同へ年季と鋭さを伴った声が飛んだ。
「横へ跳びな！」
アウロの発した厳声には逆らい難い強制力があり、考えるよりも先に全員が従っていた。リリナ、禾槻、ノイウェル、レリオは左へ、セルシア、アウロ、スキンク、エレーナ、ラグナは右へ。9人が同時に左右へと弾ける様に跳ね広がった。
次の瞬間、金色の獅子王が巨顎を上下へ押し開き、口腔に眩い光が集い輝く。その光源に作用された世界が真昼以上に明るく染まった直後、怪物の口部から黄金の光線が勢い良く放たれた。
人一人を飲み込んで尚余りあるだろう巨大な光の帯が、洪水さながらに迸り、一直線に駆け抜けていく。膨大な熱量と光量を有す極大の閃光は、触れた鋼板を瞬時に抉り消滅させ、冒険者達が先刻立

っていた場所を正面から通り抜ける。
凄まじいエネルギーの余波を周囲に撒き散らしたまま、轟き唸る大光線は尋常ならざる速度で直走った。一同が通ってきた通路へ躍り出て、止まる事無く彼方へと突き進む。巨大な光は施設の床や壁を焼き払い霧消させながら、依然として勢いを劣ろわせない。
左右両側から眩いばかりの光芒を見届ける面々は、その暴力的な出力と威力に圧倒されていた。瞼を閉じても透過してくる程の輝きに顔を照らされて、誰もが魔獣の先手に言葉を失っている。各人の想像を遥かに超える大砲撃を最初に撃たれ、今まで相手してきた魔物との格の違いを見せ付けられた。ある意味で、出鼻を挫かれたともいえる。
「おいおい、冗談だろ」
眼前の光景を信じ難いという面持ちで、レリオは誰にともなく呟いた。
「あんなのを受けたら」
「……治療する体の方がなくなる」
半ば唖然とするエレーナの震えた言葉を、ラグナは目を細めて締める。
「恐ろしい魔力を感じるぞ。あれは魔導砲だ！」
「あんな規模の砲は見た事がないよ」
興奮気味に声を荒げるノイウェルに首肯で応え、禾槻は僅かに身震いした。
彼の言葉が轟音に掻き消されて届かない中、セルシアは自分達を導いた老女の機転に賞賛を送る。
「アウロさんのお陰で、助かりましたね」
「大したことじゃないさ。ちょいと風の流れが妙だったから、警戒したまでだよ」
大気中に漂う魔力の動きは閉鎖空間内で大量に行われると、空気そのものを微量ながら撹拌させる。常人には理解し難いささやかなものであるが、片翼の感知力が群を抜いて高いアウロだからこそ看

破出来た。この状況で魔力の変動が意味することは、十中八九敵勢の攻撃手段であろう。それを素早く見抜いての号令であった。
しかし初撃を躱したとて、安心している余裕はない。大威力の一撃を放った後に、巨大獅子も次行動をみせる。
発射された主砲は異形が口部を閉ざすと共に、何事もなく立ち消えた。光線の通り道は硬材が悉く食い破られ、綺麗に接触面のみが失われている。後には微かな魔力の残滓が漂うだけだ。
獅子の砲止に合わせ、それぞれが緊張と警戒を改めて帯びる。後方支援組は次の一手に備えて護りを固め、前衛組は攻撃の為の間合いを計った。
敵が動く。それは全員の反応速度を僅かに上回っていた。獅子は素早く体向を捻り、左側へ退避したメンバーへ赤眼を射込む。それを四人が認識するよりも早く、野獣の頭部は横薙ぎに払われ、先頭に立つ禾槻の体へと直撃した。
見上げる程の巨体からは想像出来ない、俊敏で軽快な動作である。猫科の生物同様にしなやかで、バネの利いた動きは一切の無駄がない。禾槻も咄嗟にガードを試みるが、完全な守りが組まれる前に獅子の横面は全身へ激突し、頭部の振り抜きに任せて吹き飛ばされた。青年の細い体は冗談のように空中を滑り、何mも遠方に放られて床面へ叩きつけられる。
その衝撃は凄まじいものだった。近くに居たノイウェルはインパクトの瞬間、圧迫された肉の下で骨が軋み、砕ける音を確かに聞いた。
「禾槻ッ！」
「霧川さん！」
ノイウェルとエレーナの悲痛な叫びが重なる。
それと時を同じく、右手退避勢の一人アウロは、静かに狙撃銃のスコープを覗いていた。
怪物が禾槻達を向いたことで、期せずして背面側を取る位置付けとなった。自ら無防備な背を向けた異形の迂闊さを胸中で指摘し、

アウロは正確に狙いを定める。所要時間はゼロコンマの世界。押さえたのは右後肢大腿部。怪物の機動力を削ぎ、体勢を崩す目算から引き金を絞る。

息をするのと同じレベルで馴染んだ銃撃の感触が腕へと響き、音もなく銃弾は解き放たれた。虚空を突き抜ける一弾は滑らかに飛翔し、目標を違えず獅子の後肢へと減り込んでいく。強力な硬弾は毛皮を押し開いて外皮を貫き、筋肉の壁を穿って体組織内奥へと侵入する。そのまま立ち塞がる全ての障害を破壊して、侵入口の真反対から外界へと躍り出た。

魔獣の巨躯を支える大きな四肢は、彼女にとって外す事の方が難しい的である。アウロは見事に目的を達成したのだ。

だが、怪物に怯んだ様子はない。銃弾が貫通したというのに雄叫びも上げず、微動だにせず、力の減衰さえ感じさせない。その代わりとでもいうように長く撓(しな)る尾が振るわされ、横合いから豪速で狙撃者へと襲い掛かった。

「こいつは！」

舌打ち混じりに床を蹴り、アウロは咄嗟に回避行動へ移る。けれど間に合わない。敵の方が速度も攻撃範囲も上だった。逃げ切れぬまま尾撃を見舞われ、老女の体は強烈な一打を叩き込まれる。体内で弾けた衝撃と痛覚に意識を焼かれながら、数度回転して床面へと落下した。

その最中、目まぐるしく変わる視界の端にアウロは見た。今出来たばかりの銃傷が、信じ難い速度で塞がっていく光景を。

狙撃手を打ち倒しそれでも尚、巨獣の尾は止まらない。進路を違えず床上を盛大に走り、エレーナとラグナ目掛けて猛進する。迫り来る金の大波に眼を見開くエレーナ。ラグナは彼女の手を引いて逃れようと一歩を踏んだ。

そこへセルシアが駆け込む。彼女は二人の前に走り出て、仁王立ちになると両腕を正面へと突き出した。厚い篭手に護られた二本の腕が、恐ろしい速度で接近してきた尾撃を受け止める。両腕にかつ

てない圧力がぶつかり、勢いのまま彼女の脚は鋼板を滑っていく。靴底と床との摩擦で火花が散り、抵抗しつつも後退は止まらない。
「おおおぉぉぉッ！」
腰を落とし、足を踏ん張り、両腕へ渾身の力を込め、セルシアが吼える。気合の怒号を響かせて全力の抗いを成し、機械の体をフル稼働させ果敢に挑んだ。
その結果、巨尾に進まされる彼女の動きは徐々に少なくなっていく。魔獣の尾に接した掌からは白煙が昇り、少しの間を置いて完全に停止する。常人を凌ぐバスターアーマーの膂力が、王獣の猛撃を凌いだのだ。
「二人共、今のうちに離れてください！」
金毛に覆われた眼前の尾を睨んだまま、セルシアが背後の少女等へと声を張る。退避を求められたラグナとエレーナは素直に頷き、急ぎ尾撃の進路から離れていった。
二人の退去を背中越しの気配で察し、それが感じられなくなったところで、セルシアは大きく息を吐く。安堵の吐息ではなく、集中の呼気。次に右の拳を握り、上体を幾許か捻転させた。腰溜めに宿された力は一瞬だが最大。一拍の間をあけ、力任せの右ストレートが打ち出される。
篭手に固められた拳打は対面の獣尾を直撃し、爆発的な衝撃を爆ぜさせ押し返した。
一方魔獣の頭部側では、リリナが指に挟んだナイフ四本を、腕の振りに合わせて同時投擲する。放たれた特殊鋼製の強化ナイフは弾丸と見紛う速度で敵へ向かい、開かれた赤い眼へあやまたず命中した。四本全てが鋭い切っ先を真紅の眼球へと突き込ませ、粘度の高い水晶体を切り裂いて深々と沈み込む。
並みの生物なら絶叫を上げて悶えるほどの激痛が生じた筈だが、魔獣はまたしても何の反応も返さなかった。まるで痛みを感じていないかのように、平然として怯みを見せない。
そんな相手へ怪訝な顔を作るリリナだったが、すぐにそれは切迫

した危機感によって塗り潰される。巨躯の獅子が刃の刺傷に頓着せぬまま、逞しい左前肢を振り上げたからだ。高らかに掲げられた前脚と先端へ光る凶暴な爪は、彼女の主君ノイウェルを狙っていた。

「ノイウェル様！」

叫ぶが早いかリリナは走り、殆ど飛び掛る勢いで少年を突き飛ばす。同時に獅子の巨腕が振り下ろされ、恐るべき鋭爪が空を掻いた後にメイドの背中を容赦なく抉った。

衣類と背肉は大きくこそぎ取られ、千切れた肉片と赤い血滴が宙へ舞う。脳髄に焼き鏝を当てられたような痛みに耐え切れず、リリナは過剰に歯を噛み合せたまま苦鳴を漏らした。

従者の痛ましい呻き声を、投げ出された拍子に床へ倒れたノイウェルが聞く。彼は慌てて立ち上がり、自身の無傷の代償に傷付いたメイドへと駆け寄った。

「リリナ、余を庇ってこんな……」

ざっくりと裂けた背中を見て、少年艦長は顔色を失くし唇を戦慄かせる。その心許無い表情を見上げて、リリナは苦しげに顔を歪めながら口を開いた。

「ぐっ……ノイウェル、さま……御怪我、は？」

「ない。余は無事だ。そなたのお陰でな」

「さよう、で……それ、ならば……っ……よかった」

消えない激痛へ苛まれながら、それでもリリナは表情筋を僅かに緩める。

苦痛を堪えて浮かべられた微笑を見て、ノイウェルはきつく唇を噛んだ。己の無力さを恥じ入り、従者の献身へ目尻に涙を滲ませる。

そんな二人の在り様などお構いなしに、巨獣は巨顎を再度上下へ開いた。露となった口腔の深奥では強い赤光が躍り、急速に外界へと差し迫ってくる。

「この野郎！」

これへ対し憤慨の一喝を以って、レリオが持参した重火器を構え取った。バレットＭ８２Ａ１の長い銃身を敵の額へと向け、狙点の

固定と同時にトリガーを引く。全身が揺れ、銃口が振れ上がる程の反動を残し、耳を劈く射撃音と共に高威力貫徹弾が射出された。
凶弾はレリオが選んだ規定ルートを高速で抜け、微塵の躊躇も抱かずに魔獣の眉間を一撃で貫く。コンクリート塊や戦車の装甲すらも貫通する最強のアンチマテリアルライフル、それが繰り出した狙撃弾は怪物の頭骨を易々と噛み砕き、内容物を撃砕して、後頭部より壊れた組織片諸共に抜け出てきた。まだまだ勢力を逸しない銃弾は更に上方へと飛んでいき、すぐに見えなくなる。
「これでどうだ」
正確無比な定点狙撃を完了させたレリオが、勝利の確信を伴って得意気に歯を見せた。
が、頭部を攻撃されているにも関わらず怪物は止まらない。開いた口はそのままに、口内で燃え滾る紅蓮の炎をレリオやノイウェル目掛けて吐き出してくる。
「げぇ！？」
灼熱の大波が押し寄せてくる光景を前にして、レリオは甲高い悲鳴を上げた。逃げ場ない。そもそも逃げても確実に追いつかれる。絶体絶命のピンチへ不覚にも死を意識した。
それに敢然と立ちはだかったのはノイウェルだ。少年は倒れたリリナやレリオを庇うように前へ進み出ると、両手を広げ詠唱を開始した。言葉によって魔力を紡ぐ古代からの言語術式を使い、仲間を救う行動へ単身乗り出す。
「『其の力、我が声に応え王陣の護りを敷け。天の五芒に従いて大いなる担い手たらん。銀糸の囲いに碧き輩（ともがら）を添らし、荒ぶる霊光に立ち向かう猛き勇心の護法となれ』」
詠唱が終わった時、光り輝く膜が生まれドーム状に広がった。
光膜はノイウェル達三人を包み込み、荒々しい熱火の行進から防ぎ護る。獅子の大口から暴れ出た灼熱の吐息は、魔力によって組まれた防御陣にぶつかって左右へと裂けていった。燃え盛る炎はそれでも標的を焼き滅ぼすことは諦めず、立て続けに光の障壁へと激突

していく。
紅の業火に周囲を取り囲まれ、眼前へ絶えず叩きつけられる危地の中、ノイウェルの張った結界内からレリオは見た。先刻リリナが食い込ませたナイフが、内側から押し出されるように魔獣の眼部から抜け落ちる。それへ伴い刻まれた傷が急速に閉ざされ、修復された。額に穿たれた弾痕も見る間に塞がり、傷痕はまったく残らない。
「再生してやがる。なんだ、この怪物」
あらゆるダメージを短時間で無効化してしまう獅子王の姿に、レリオは戦慄した。驚きと恐怖に顔を歪めて、悔しげに奥歯を噛む。
「そこぉ！」
裂帛の気迫を込め、右拳を突き出したのはセルシア。
魔獣の下半身側に立つ彼女は尾を退けた後に、アウロが攻撃した右後肢を再度攻めいた。巨大な獅子がノイウェル達に火炎攻撃を仕掛けている最中、意識を向けていないだろう背方から後肢に拳打を見舞う。
充分に力を込めた一撃は魔獣の脛を打ち、痛快な衝突音を響かせて拳の形に外皮を凹ませた。セルシアの放った豪打は内肉を拉げさせ、筋肉の層を圧力で断裂させる。人間ならば複雑粉砕骨折か、そうでなければ襲撃部位が弾け飛ぶほどの威力が込められていた。
しかし巨獣相手では有効打に至らない。重撃を受けた箇所は確かに大きな損傷を受けているようだが、当事者に応えた様子は皆無である。それどころか攻撃された後肢が振り上がり、セルシアの頭上目掛けて踏み下ろされてきた。
「くっ！」
彼女は素早く横へ跳び、巨肢に叩き潰されることだけは回避する。床面を踏み叩いた大足の反動で周辺は揺れ、薄い煙が落下地点より吹き上がった。それが終わった頃にはもう、今与えた拳の窪みは治ってしまい、攻撃が成功したのかどうかさえ分からなくなる。
スナイパーやバスターアーマー、ソルジャーの攻撃を受けてビクともしない怪物は、目前の標的を焼殺することは諦めた。開いてい

た口を閉ざし、放射される炎の波を一息で飲み込んでしまう。入れ替わりに鬣全体へ、発光する線が何本も走っていく。
それは静電気に似た電鳴の瞬き。幾つもの光が複雑に絡み合い、次第に黄金の鬣を青白い輝きで埋め尽くしてしまう。生まれ出でた生体電流は即座に超電圧化を遂げ、鬣の外周を一回りした後、最上部へ集い天高く飛び上がった。
遠い天井目指して昇った雷は数m上方で弾け、何本もの稲光となって降下してくる。激しく照り輝き、大気を焦がす落雷の雨。それが広大な空間中に降り注いだ。
雷撃の存在に気付いた者が視認した時にはもう、青白い稲妻は次々と床へ落ち、直下面に紫電を走らす。その一つがノイウェル達の防御膜へと激突した。最初の一発が光膜の頂点に落ちるが、魔力結界は威力を分散させ見事に耐えてみせる。だが二発目が命中した瞬間、光の全体に亀裂が走った。続け様に三撃が落下すると、結界はとうとう硝子のように割れ砕けてしまう。
「しまった！」
ノイウェルが愕然とするや四つ目の雷が降臨し、光に護られていた三人の集合点へ衝突した。
落雷のエネルギーが一気に弾け、見えざる滅びの波紋を拡散させる。生じた破壊力の暴走に当てられ、レリオとノイウェルは有無を言わさず吹き飛ばされた。倒れていたリリナも余波に煽られ、血の道を描いて床を転がる。
別所では飛来した一撃がセルシアの体を直撃した。天からの猛攻を脳天から浴び、機械の体は一瞬にして痺れ果てる。次にはもう彼女の意識は断ち切られ、白煙を上げる体が膝から崩れ落ちていった。
次々と襲い来る雷撃からエレーナとラグナは必死になって逃げている。二人共が走りながら、目指していたのはリリナの許だ。負傷した彼女を癒そうと床を蹴るが、後ろや横や進路上に相次いで雷が落ちてきては進めない。なんとか雷雨を抜けようとするも、予想不能な軌道に取り囲まれてそれすらもままならぬ。

もはや満足に動ける者が戦闘向きではない自分達だけ。絶望的な状況の中、二人の直上から新たな落雷が迫ってくる。嘶(いなな)く雷光は凶暴な激牙を光らせ、無力な少女達へと今正に襲い掛からんと最接近を遂げた。頭髪を炙る獰猛な気配に気付いて二人が頭上を仰ぎ見た刹那、青白い轟雷は緑と黒の瞳を捉える。回避を許さぬ至近距離から落ちる雷に、二人は自らの焼け焦げる姿を幻視した。

けれど雷撃は突如直角に曲がり、少女等へ激突することなく虚空を走っていく。見ればこれから床へ向かおうとする全ての雷が、急遽角度と進路を変更して同じ方向へ滑っていた。まるで吸い寄せられるように、どの稲光も大気を掻いて突き進む。

「ヘイ、カモンサンダー！」

輝く雷線が一斉に目指すのは、魔獣からやや離れた場所。そこでは軍服姿の防毒面が、激しい手招きで踊っていた。今まで戦闘に参加せず、光学迷彩スーツでちゃっかり姿をくらましていたスキンクである。

彼の傍近くには2m余りの鉄パイプがそそり立つ。獅子の放った強雷電は、そのパイプへと方々から集まっていた。我先にとパイプへ飛びつき、一直線に伝って床へと逃げていく。スキンクが隠し持つ怪しいクスリを塗布した拾い物の鉄パイプは、雷を誘引して貪り尽くす避雷針として目下活動中だった。

「『皆を癒し隊』のお嬢さん方、今こそダッシュでゴーだぜ」

落雷を一手に引き受けるスキンクは、エレーナとラグナを鋭く指差す。

「スキンクさん。あの、ありがとうございます」

「……変人のくせに中々やる」

彼の快声にエレーナは頭を下げ、ラグナは微笑とも失笑ともつかない顔で背を向けた。そのまま二人は倒れているリリナ達へと急ぐ。

再び移動していく治療専門組を見送ると、スキンクは懐に手を入れてゴソゴソと何かを探し始めた。それと同時に巨体の獅子は放った雷撃の行く末に首を巡らし、傷一つない紅眼で防毒面を睨み据え

る。圧倒的な迫力と威風を湛え、揺ぎ無い殺意を昂ぶらせる魔獣。それと距離を取りながらも正対し、スキンクは一つの球体を取り出した。

「それじゃ遊ぼうかね、ブッサイクなワンちゃんよぉ。ピッチャー振り被ってぇ、第一球ぅ、投げたァァッ！」

声高に謳いながら、スキンクは出鱈目（でたらめ）なフォームで手にした球体を投げつける。手榴弾らしき物体は強肩から放たれて豪快に飛び、低く唸る巨獣へと一直線に距離を詰めた。そのまま怪物の鬣へと潜り込み、剛毛に絡め取られて動きを止める。起こるべき爆発はなかった。

「おおっと、不発か。人生ってのは上手くいかないもんだと、古代の偉人も言っていた」

投擲物の結末を確認して、スキンクは大袈裟に肩をすくめる。

「……やっぱり使えない」

トカゲの名を持つ男の期待外れな有様に、ラグナは単調な冷声で見切りをつけた。早々に視線を逸らすと、自分の仕事へ向き直る。

彼女達は無事に、倒れた人員の許まで辿り着いた。同じ後方支援隊に属するエレーナは、カプセル状のナノリペアをリリナに飲ませている最中だ。ラグナは傍近くでのびているノイウェルとレリオに声を掛け、目覚めないので頬を叩いて強引に気付けする。

少年は一発で目を覚ましたが、青年の方はそうでもない。時間的余裕もないので、力加減をせず強烈な往復ビンタを叩き込んだ。頬が赤く腫れ上がり、ラグナの加虐心がそそられたところで、レリオはようやく目を覚ます。

「いてぇ」

「……起きない方が悪い」

理不尽な頬の痛みに手を添えて、患部を擦りながらレリオが呻く。ラグナに彼への謝意はない。寧ろ当然という顔で、平時の様相そのままに言葉短く胸を張る。

そんな一同を尻目に、スキンクは防毒面の下で冷や汗を垂らして

いた。相対する魔獣の口角が押し開かれ、夜闇を思わせる暗い内奥から獰猛な冷気が溢れ出てくる。ドライアイスを用いたような濃い零煙が次々と流れ来て、床面へと厚く堆積していく。

白く冷めた冷霧が固い床を這い回る中、獅子の口腔から鋭い氷塊が放たれた。槍の切っ先同然に研ぎ澄まされた、一抱えほどもある冷気の結晶だ。巨大な氷結槍は充分すぎる殺傷能力を備え、スキンクへと真っ直ぐに飛ぶ。

一つではない。同程度の大きさを持つ氷塊が、一つ、また一つ、次第に数え切れないほど大量に、凄まじい勢いで連続射出され始めた。氷の散弾である。生者の存在を全否定することを前提に構築され、死者の量産を目的に撃ち出される零下の槍雨。それが尋常でない速度を有して獲物を襲う。

「ノォォー！」

くぐもった悲鳴を上げ、スキンクは逃げた。

僅かばかりの間隔を空けて飛来する冷弾を、どれも紙一重で辛うじて避けていく。けれど放たれ続ける猛撃は休む暇など与えず、華麗とも呼べない姿で回避に従事する防毒面を徐々に傷つけていった。

体のすぐ脇を高速で抜ける氷塊は容赦なく対象の肉体を食み、肩が抉れ、脇腹が裂け、脚を負傷し、腕に血華を咲かす。彼の血が床面を汚す後ろで、飛んだ鋭槍は鋼板へと突き刺さり、頑健な床面に深々と減り込んでは冷めた氷柱のオブジェとなった。

一向に止む気配を見せない氷れる散弾の連続斉射に、然程も時間を置かずしてスキンクの体が限界を迎える。放たれた一弾が脹脛を掠めた際、バランスを崩して前のめりに転倒してしまった。彼が倒れた瞬間、頭上を幾本もの氷結塊が通過し、背後空間を穿つ。続け様全周囲に氷塊が投下され、巨大な零槍の森が瞬く間に形作られた。

攻撃を続けながら魔獣は首を振り、体の向きを変えながら半弧を描く。動きに合わせて冷弾は床板を食い破ると、冷たい氷柱が我が物顔で空間を埋めてしまう。全く止まらない散弾の射出は、遂にノイウェルやラグナ達の方面へと向けられた。目覚めばかりの男性陣

は勿論、非戦闘員である女性陣に於いても避ける事が望めない。絶望的な悪意の群舞は凶気の輝きを伴い、小鳥の雛同然に逃げ場ない面々を猛然と襲撃する。
「『輝け天臨の兆し。悪しき顎(あぎと)から我等を護り、救苑(きゅうえん)の防砂に魂の律動を以(も)て。迷いなき降魔の狼煙を上げる其の糧となり、雌伏を有す永久の加護を求む』」
ノイウェルが二度目の詠唱を完成させた時、五人の前方空間に光の壁が出現した。
実体を持たない魔力の集合たる光壁は、飛来する氷塊の群を受け止め砕いて後ろに置いた命を護る。
「ノイウェル君、凄いです」
ノイウェルの使った防衛魔法を見て、エレーナは尊敬の込められた快哉を上げた。対してレリオは難しい顔で重々しく唸っている。
「問題はこの後だぞ。あの化け物、何してもすぐに再生しちまう。これじゃ何時まで経っても勝ち目がない」
「……無敵の生物なんていない。必ずどこかに弱点がある筈」
「そうは言っても、さっぱり見当がつかないんだよ。頭撃っても知らん顔してるような奴だぜ？」
ラグナの冷静な指摘に、レリオは困惑顔で首を捻った。どう対処すればいいのか、判断をつけかねている。
「なんとか触れることが出来れば、私の能力で知れるんですが」
対象に宿る思念や情報を触れることで読み取り、瞬時に理解するサイコメトリ能力。その保持者であるエレーナは近付き難い狂猛の魔獣を光壁越しに見て、強く両手を握り合わせる。
その間にも獅子の冷撃は継続され、夥しい数の氷塊が一同を貫くべく射出されていた。飛び掛る端から壁に衝突しては砕け散り、割れた氷片が落下する最中に次弾が十数本襲い続く。氷と壁がぶつかる度に双方を構成する魔力は削れていき、単発で終わるわけではない防御陣側は、とかく消耗が激しい。
「いかん、このままですぐに突破されてしまう」

悔しさを顔中に滲ませたノイウェルが、苦しげに歯軋りした。
少年が操れる魔力量では、膨大な魔獣の猛攻を何時までも凌ぐ事は出来ない。絶えず衝突してくる氷散弾の数が多過ぎ、壁には早くも皹が走り始めている。仲間を救いきれない自分の幼さや惰弱さが、責任感と申し訳なさを伴い強烈に胸を焼いた。
連続する圧倒的な魔弾斉射に、魔法壁は全容を保てなくなりつつある。亀裂が全体へ走り、表面では綻びが次々と生まれ、破損していく。容赦ない攻め手は緩む気配もなく、いよいよノイウェルの顔が苦渋を募らせてきた。
次の瞬間、打ち付けられた一発の氷槍が自らの崩壊と同時に光の壁を粉砕した。形成魔力が分解され霧散する中、遮蔽物の絶えた獲物へ氷れる散弾が襲い掛かる。これを正面に据えた面々は、己を貫く暴牙の群勢に慄然とした。
逃れられない悪夢が現実として覆い被さる。冷たくも鋭利な無数の切っ先が皮膚を切り裂き、筋肉を突き刺し、血管を断って、髄液を散らせ、内臓を貪り、神経を食い千切って、骨格を砕く。壮絶な痛みと苦しみが頭の芯を一瞬にして融解させて尚、終わらない地獄を感覚としてあらゆる認識域へ直接叩きつけてくる。嗚咽を漏らす暇さえなく、自身を串刺す冷結槍は数ばかりを無為に無碍に増していく。
そんな錯覚が脳裏を過ぎった時だ。一同の眼前を鮮烈な赤が豪快に走り抜けた。
襲撃物とは真逆の色合いが視認世界に躍り出て、少年含む男女は何が起こったのか理解出来ない。ただ一つ確かだったのは、予想した激痛が全身を満たすことはなかったということ。
唐突に割って入った猛火の流れは、五人へ迫った氷の散弾を一気に飲み込む。そのまま全てを焼き尽くし、一切合切まとめて瞬時に蒸発させた。並々ならぬ火力に消された氷槍弾が、後には揃って大量の水蒸気となり霞の幕を作り出す。
「これ以上、僕の仲間を傷付けるのは止めてもらおうか」

魔獣と正対する面々より幾許か離れた場所で、静かでありつつも強硬な怒気を宿す声が上がった。そこには鼻血を垂らしながらも、毅然とした面持ちで立つ禾槻の姿がある。

折れて負傷した腕は、持参したナノリペアで治療済みらしい。流血を吸って赤黒さの増した和袖から、硬く握られた拳が覗いていた。

「霧川さん！」

「……あいつ、絶対このタイミングを計ってただろ」

禾槻の登場に目を輝かせるエレーナの横で、ラグナは憮然と難癖をつける。仲間のピンチに颯爽と現れた青年の格好付けが、どうにも気に食わないらしい。誰にも聞こえない口の中だけで「霧川のくせに」などと毒づいてもいた。

最初に潰しておいた敵が妨害者として参入してきた事は、魔獣にも何がしかの思考を与えたのか。巨躯の怪物は素早く首を振り、黄金の鬣を打ち振るって、禾槻へ向きながらも氷の散弾を吐きつける。再び始まった零度の惨攻は、対象を変えても威力は落とさず、避ける間さえ与えずに降り注いだ。

「久々に全力でいかせてもらうよ」

氷弾の群雨へ晒されても臆さず視線も違えず、禾槻は声高に告げた。宣言に続き蒼い髪が微かに揺れ、両の瞳孔が急速に収縮する。中心に寄って細く狭まる眼球運動へ従い、彼を囲むように赤々と燃える炎が現れ出る。

生まれた火炎は渦を巻き、禾槻を包んで大きくうねった。意思を持つ大蛇ででもあるように激しく蠢き、氷の接近に反応して鎌首を擡(もた)げる。直線距離を踏破してくる散弾が一定ラインを越えた時、炎は勢いよく伸び上がり、前方空間へ飛び込んだ。

紅蓮の大火は青白い冷弾を悉(ことごと)く取り込み、遥か上位の熱量で圧迫し解凍。原型を即座に崩し、存在そのものを霧散させて攻勢能力を完全に奪い取る。飲まれた氷刃は抗うべくもなく消滅し、霧へと変えて空中に散った。

向かい来る猛撃を無力化した思念の炎は尚も猛り狂い、巨大な獅

子へ逆襲の顎を閃かす。その途上で長く連なる炎の全容から幾筋もの火炎球が分離した。新たな小炎は空間中に赤い鮮雨を撒き散らし、床上へ隙間もないほど落ちて爆ぜる。願うもののみを焼き尽くす禾槻の炎は、鋼板へ突き刺さる氷柱群に情け無用の攻撃を掛けた。床一面を覆う超能炎が全てを炙り、屹立する氷の柱を相次いで瓦解させていく。白く輝く冷気の結晶は揺らめく熱火の舌に舐められ、飴細工同然の簡潔さで倒壊した。抵抗なく溶けて消える死の牙は水気質の蒸気と果てて、閉じた世界全域を一様に満たし取る。

視界の利かない白亜の海に、冒険者一向も巨躯の魔獣も揃って沈んだ。その内部では精神の燃焼体である炎と、魔力の凝結たる氷槍が反発し合う。双方の衝突は特異なエネルギー対流域を作り出し、立ち込める濃霧に浸透していく。然る後、蒸気幕を微細に震わせた。相互反応は霧内のごく低弱ではあるがあらゆるものへと伝播していき、各々が持つ固有振動に物体人体問わず共鳴作用を引き起こす。

打ち震わされた体は眠る活力を呼び起こされ、倒れる戦士達に再起の目を開かせた。喪失時間を顧みない即座的復帰が果たされ、覚醒した者は戦意を新たに素早く体勢を立て直す。

「――フッ！」

セルシアはバネ仕掛けさながらに跳ね起きる。短瞬に状況と自身の確認を終え、巨大な気配が燻(くゆ)る濃霧の深遠へと駆け出した。

「どうやら、少し寝ちまってたようだね。歳はとりたくないもんだ」

同じく目覚めたアウロは片翼を広げ、双眸の効力が及ばない水蒸気の統治世界を流れで読む。彼女だから出来る空気の微妙な変動を解く感知能力は、視界の有無に関係なく満ちた大気に内包される全ての位置と状態を、淀み交えず正確に教えた。

一方で雄々しき魔獣は地を踏み拉(しだ)き、厚く棚引く噴霧の海へ巨体ごとに突進する。金色の剛毛と外皮へ纏わりつく水蒸気の微粒子を意にも介さず、盛大な疾駆音を響かせて空間を駆けて行く。正面から超能の力によって発現された荒ぶる猛火が激突し、顔面全体を覆い焼き焦がすも、体毛が煤け肉が爛れ落ちようと怯まない。痛みも

熱さも感じる素振りを垣間見せず、野獣の吐息のみを残して走り続けた。
前肢が最後の一歩を踏んだ時、後肢は足場を勢い良く蹴り叩く。瞬時に行われた筋力と余剰体力の配分で爆発した跳躍力が、左右の後肢を支えとして獅子の巨躯を空中へと飛び上がらせた。金色に輝く毛並みが砂金を塗(まぶ)したように霧内で揺れ輝き、虚空に艶やかな煌きの軌跡を描く。
弧状に引かれた一線は、そのまま怪物の進軍ルート。重力の頚木(くびき)を断ち切ったが如く舞い上がる異形の体躯は、空気と蒸気幕を切り裂いて霧外の境へ頭部を突き出す。真紅にギラつく野獣の眼(まなこ)は獰猛な悪意へ禾槻を映し、裂牙を剥いて高らかに咆哮した。巨大な雄叫びが天地を揺すり、音は壁となって衝撃を波形に散らせる。壮烈な絶震が漂う霧を押し流し、掻き払い、獅子を基点として一斉に奪い晴らした。
盛大な圧力と覇気が一切の水気を消すと、改めて広がり出た空間に巨翳は唸る。取り戻された視界の先では、禾槻目掛けて行われる魔獣の進撃が皆に見えた。しなやかな体動で自重を感じさせない跳躍から、獲物へと襲い掛かる狩猟者の攻撃。研ぎ澄まされた肢爪が右前脚諸共に、青年を切り裂く軌道である。
「まさか……」
炎に熱し焙られた面貌は既に再生を始めており、負わせた手傷は無きに等しい。与えた自力の炎攻が無意味であり、尚且つ差し迫る獅子の惨撃を前として、禾槻は愕然と表情を歪ませた。
逃げおおせる為の距離と時間は既になく、自らへ見舞われるだろう死神の洗礼を待つばかり。視野を収める世界の姿と時の流れは酷く緩やかに感じられ、全てがスローモーションのようにも見えてしまう。圧縮された体感は、青年に自らの終局を否が応でも連想させた。
目を逸らせない現実。その無慈悲な爪牙が、若者の肉体を挽肉にせんと振るわれる。瞬前、禾槻の前に躍り出る人影があった。

それは疾風と見紛う迅速さで青年と巨獣の合間へ入り、振り下ろされた前肢を両腕で受け止める。激音が響き、鋼板を幾らか後退した。しかし弾き飛ばされる事も、叩き潰される事もない。獅子の重脚を両手で防ぎ、床を踏み締めてこれへ耐える。

「セルシアさん」

眼前への乱入者を認め、禾槻は安堵と感謝を綯い交ぜにその名を呼んだ。

「間に合いましたね」

セルシアは振り返らず、救助者の無事に短く応じた。

獅子の体重が乗せられた一撃を押さえ取り、足場にされた鋼板が軋む。伸ばされた両腕には過重な負担が掛かっているが、彼女に怯む様子は皆無。歯を食い縛り、決死の形相で巨大な圧力を押し返そうと奮戦していた。

新たな妨害者の出現に攻撃が止められ、弧状に巨体を流した揚力も失われる。予期せぬ空中位で止められた獅子は重力に任せて下半身を降下させ、隆々たる後肢で床面を踏み叩いた。強い揺動が起こり、空間全体が震える。

「忍法『死んだフリ』解除」

揺れ幅が際限なく広がる中、失せた霧下からスキンクが起き上がった。そこかしこに氷槍に抉られた傷口があるも、致命傷には至らないのか本人は元気なものだ。

「レッツ、フィッシーング」

言うが早いか、スキンクは右腕を振り被り、先刻同様の投球フォームで自らの腕を一息に振り抜く。何も持ってはいない手が最上方から振り下ろされると、動いた袖口から銀に光る細い糸が飛び出した。糸は真っ直ぐ空間内を駆け抜けて、セルシアが抑える怪物の前肢へと高速で巻き付いていく。

前肢下方から入り側面を上がり、上方から回転運動的に落下して再び下方を潜る。そのまま上方と転換、下降と進行を繰り返して、銀糸は瞬く間に絡みついた。スキンクが持ち込んだ秘密道具の一つ、

特殊鋼製のワイヤーである。
「大漁じゃーい！」
意味不明な掛け声を放ち、スキンクはワイヤーを勢い良く引いた。
セルシアに遮られて地を踏まぬ魔獣の脚は、接地面の少なさから安定性がない。そこへ加えられた横合いからの強引な操作で、雄々しい巨体が引き側へと緩やかに傾ぐ。
「燃えろォ！」
禾槻の吼声が続き、渦巻く炎が立ち昇った。火炎流は怪物へと押し寄せ、間髪入れずに側面部へ激突する。
紅蓮の猛火は金の剛毛を焼き払い、獅子の皮膚を熱しながら傾き側へ更に押し遣る。ワイヤーと熱火の二重奏に晒され、権衡の磐石さを欠いた怪物の体躯が揺れた。
「はあああぁァァッ！」
セルシアはこの機を逃さない。魔獣の前肢へ両腕を押し付けたまま、右脚を軸として全身から捻転する。
左右両人の同一方向力へ彼女の体動が劇的に作用し、聳えるまでの巨体が自らの重みに耐えかねたよう床面へ落ちた。荒ぶる絶咆が轟く中で金の原野が空を掻き、意思に反して斜傾へ渡る。後は自制も利かぬまま進行力に支配され、硬い鋼板へと横腹から叩き付けられた。王獣の横転に再度空間全体が震え、立つ者達に再び平等の振動を伝える。
「逃がしはしない！」
魔獣を床へ伏せらせた直後、セルシアは顔面部前方へ跳んだ。
兇悪な獅子の異貌を正面にするや、ガントレットへ覆われた右拳を鼻面へ叩き込む。鋭い拳打は突き出した嗅覚器官へ直進で減り込み、筋組織を圧迫破壊して骨格を砕く。その確かな感触を手に覚えながら、セルシアは即座に左拳を繰り出した。機械の豪腕は容赦なく傷付いた鼻腔部へ突き刺さり、右腕よりも深く肉壁を穿つ。
拳を引き抜き際、今度は右脚を全力で見舞う。下段から上段へと一気に蹴り上げられたハイキックが、抵抗細胞を両断して魔獣の厚

い顔皮を鋭角に削いだ。黒い体液の付着した脚を、今度は直下に振り下ろす。風切る一閃と化した右脚は垂直に降下し、強烈な踵を面の中心へ打ち落とした。
眼にも止まらぬ蹴撃を受けて敵勢の内肉が陥没すると、セルシアは両手を握り合わせて大振りに叩き込む。再三の攻撃で損壊した部位が止めを浴びて無惨に破れ、割れた筋肉と抉れた神経子が露となった。断裂する血管からは黒液が溢れ出し、際限なく流れ出しては床面へと滴り落ちる。
それでもセルシアは止まらなかった。一連の攻撃では不十分と判断したのか、右腕の豪打から始まる連続撃を再開する。新たな攻勢が開始される横では、禾槻の作り出した超能の業火が魔獣の獅子へ絡んでいた。敵の体勢変化を許さぬばかりに燃え上がり、二度と動けなくする意図から体肉を骨の髄まで焼き尽くす。
「今なら」
セルシアと禾槻の物理及び火炎の相撃が、絶え間なく巨獣の自由を奪っている最中である。状況の推移を見守っていたエレーナが、何を思ったかラグナ達に背を向けて戦闘領域へと駆け出した。
「え？　おい、待てって！」
巨大な獅子に向かい始めたエレーナの後姿へ、慌ててレリオが声を投げる。直接的な戦闘能力も、その手段も持たない彼女が自ら敵へ突撃する意味が、すぐには理解出来なかった。敵の強大な力を目の当たりにしているなら尚更で、呼び止める声には焦燥と切迫が滲む。
だが彼女は戻ってこない。
「……なにをするつもり」
「いかん、危険だぞ。エレーナ、止めるのだ！」
ラグナやノイウェルの制止も振り切って、エレーナは強かに鋼板を踏んだ。緊張に強張る真剣な顔付きで、倒れた魔獣へと真っ直ぐに駆け寄る。
「エレーナさん？」

突然現れた後方支援の治療要員を見て、禾槻は目を剥いた。何故、彼女が今こんな前衛線へ突出しているのか。
青年が考を巡らせるより先に、エレーナは目標へと到達する。滑りこむように右の前肢へ接近すると、炎に包まれ燃えるそれへ手を伸ばす。自身の望むもののみを発火させる禾槻の超能力（サイキック）特性を知っている為、赤い揺らめきへの恐怖はない。伸ばされた彼女の腕は怪物の肢へ触れた。その瞬間、触知能力（サイコメトリ）が発動し、接触対象が保有する膨大な情報がエレーナの脳へとダイレクトに流れ込む。
彼女が自らの目的を達成し終えのと前後して、或いはその行動こそが引き金となったのか、倒れもがいていた巨獣が次なる行動へ移行した。自由の利くしなやかな尾で床を叩き、それ一本を支えに横倒れた巨躯を起き上がらせてしまう。
体重を全て預けても撓（たわ）みさえしない強健な尾は、四肢の踏ん張りが一時的に封じられている魔獣を大きく助けた。肢の代わりに巨体を受け止め、掛かる力に耐え抜いて再度の立ち上がりを実現させる。それへ際して前肢を繰り出し、既に再生の始まっている巨脚を打ち振るった。
広く一歩を掻いた肢は、軌道に即して絡まるワイヤーを事も無げに引き従える。これへ繋がるスキンクは魔獣の力に抗いきれず、いとも容易く振り回された。今度は彼が宙を舞い、空中ブランコさながらに空を泳がされてしまう。
「あらーーーー！」
絶叫とも歓声ともつかない奇妙な雄叫びを残して、スキンクは一人、ノイウェル達の頭上を通過した。その途上で自らワイヤーを切断し、凶暴な支配力から脱却する。
彼は上空でクルクルと回転しながら、レリオ達の後方へ墜落した。
咄嗟に一同が振り返る。
「ウルトラCには、半回転捻りバク宙と石灰の散布が足りなかったらしい」
起き上がりながら砂漠仕様の軍服を叩く防毒面。零される台詞は

意味不明だが、ある意味で平常運転である。
振り向いた面子は五体満足なスキンクを確認すると、奇行に付き合う気はないのか早々に視線を正面へ戻した。
「まずいですね」
セルシアは眉間に眉根を寄せて、起きてしまった獅子から跳び退った。次の行動に備えて的確に距離を取る。
それに呼応し、逆に前進した者もあった。ナノリペアによる高速治療で回復したリリナである。

決戦、破壊の君主と冒険者（中）（前書き）

執筆者：ういいち

決戦、破壊の君主と冒険者（中）

「霧川様、エレーナ様、お二人も下がってください」
言いながら左右の手に大振りのナイフを握り、魔獣へと単身突っ込んでいく。サイキック組を後退させるまでの時間稼ぎとして、獅子の注意を引き付ける矢面に立ったのだ。
無駄のない歩法で軽やかに接近すると、リリナは首下へと素早く潜り込む。黄金の鬣が揺れる太い首筋を直上に捉える位置へ達し、そこから貫通魔力が付与されたアーミーナイフを切り上げた。魔力で強化された強靭な刃が魔獣の外皮を傷付け、腕動に合わせて一筋に切り裂く。生まれた裂傷へ別手のコンバットナイフを切り込み、初手に負けぬ速度と正確さで一息に斬撃を加えた。
綺麗に開いた切断面から黒い体液が流れ出てくるが、リリナは構わず両手のナイフを同時に突き出す。二刃を傷口に捻り込むと、力任せに押し遣って更に体奥へ食い込ませた。太い刃の根元まで埋没したところで、彼女は両腕をそれぞれ逆方向へと全力で振り抜く。二つのナイフは切れ味に物を言わせ、強固な巨獣の首肉を猛断。深々と大傷を刻んだ。
「先刻の借り、返させていただきます」
新しく作られたばかりの損傷部を見上げ、リリナはナイフを狙い放った。
二本は正確に目標部分へ到達し、朱肉の剥く傷口へ突き刺さる。それを見届けながら、リリナのスカートが閃いた。左右大腿に巻かれたベルト、此処へ差された小振りなナイフを両手に四本ずつ、計八本を瞬時に引き抜く。繋げての照準と投擲まで要した時間は一秒弱。八つの特殊鋼製ナイフが一斉に裂け口へ吸い込まれ、内肉を喜々として抉り進んだ。
「エレーナさん、掴まって」
「はい」

リリナが攻撃を行っている間に、禾槻は炎の攻め手を中断しエレーナの手を取った。
褐色のそれを副(そ)えると、白皙の五指はしっかりと握り返してくる。重ねた手を強く握り合わせ、二人は仲間の許へと下がっていく。
「援護は任せろ」
言って大型狙撃銃のスコープを覗くのはレリオ。慣れ親しんだ狭窄と集中、ピンポイントでクローズアップされた世界に意識を張る。
彼が捉えたのは真紅の眼球。たとえ急速に再生するとしても、少しの間だけ視覚を奪えればそれでいい。幾多の修羅場を潜り抜けてきた戦士達にとって、僅かな隙は充分な反応の余地なのだ。
レリオの指が自然体でトリガーを引く。轟音が響き、銃口から強力な一弾が解き放たれる。それは一瞬で標的に肉薄すると、不可避の速度で魔獣の左目を貫通した。飛び込んできた弾丸は眼球を粉砕し、原型の知れぬ肉片に変えて飛び散らせる。
「アウロ婆さんの知恵袋。複数の敵を相手にする時は、確実に確固撃破すべし。そうでなければ思わぬところで反撃に遭い、足元を掬われる」
走りながら呟いて、アウロもまた消音機能を持たせたスナイパーライフルを覗いていた。
長年の逃亡生活と賞金稼ぎとの戦いを経て、移動しながらの狙撃すらも磨き上げた老兵の業である。動きつつ攻撃箇所を探り、最良のポイントで引き金を絞る。次には移動の再開と次撃準備、そして敵の捕捉を同時に行う。
贄肉を極限まで削ぎ落とし洗練された熟練の一動は、自身も仲間達への合流を目指しつつ後退者達を援護した。彼女の類稀な狙撃力は多角的に獅子を襲い、注意力の散漫化と牽制に多大な効力を発揮する。それでいて狙った弾は一発として外さず、怪物の頭部を中心に数箇所へ弾痕を生んだ。
次々と繰り出される冒険者達の波状攻撃に、魔獣の喉が獰猛に唸る。痛みを感じている風ではないが、積み重ねられる攻勢の手に怒

気は確実に増しつつあった。遥かに小さく取るに足らぬ様な者達だが、何度打ち据えようと執拗に立ち上がり向かってくる。その執拗さが怪物の闘争本能と破壊衝動を限界まで刺激していた。
突如として魔獣は四肢を張り、上体を反らして天を仰ぐ。遠く高い天蓋を彼方に見て、巨大な顎を開いて咆哮した。地震か山鳴りに等しい大絶音が、古代の施設全体に際限なく轟き渡る。耳を塞がねば耐えられない程の遠吠え。空気層を激震させ、アストライアメンバーの肌が総毛立つ。
暗殺者時代に培った危機感地能力の警告に従い、反射的にリリナも後退した。主君と仲間達が待つ方向へ素早く戻り、表情をそれまで以上に硬くする。
凄まじい絶咆を引き結ぶと、未だ残響の消えぬ中、巨獣は敵対者9人を改めて睨み据える。かつて起こった血みどろの大戦で闘いと争いに明け暮れた滅びの牙獣が、全身の金毛を一気に逆立てた。次いで全身が大きく震え、鬣が眩いばかりの光を放つ。
何事かと息飲む一同を余所に、獅子の背面外皮が剥離。順次、浮遊を始める。暗灰色の外皮は一枚一枚が鱗状をしていた。大きさは木の葉程度。ただ数が多い。何百という外皮の群が、巨獣の周囲へ漂う。それらは各々に明光を宿していき、静かに空間へ滞空した。
が、獅子の一鳴きが空気を食むと同時に、急遽前進を開始する。光ながら直進し、そうかと思えば歪曲し、様々な軌道を無秩序に描いて、鱗皮は冒険者達へと恐るべき速度で襲い掛かった。
「アウロさん、セルシアさん！」
「あいよ」
「はい！」
迫り来る光弾の群体を前に、禾槻が目配せするとアウロとセルシアも頷き返す。
三人共に考えていた事は同じ。ハウエンツァから譲り受けた指輪型防御機構を作動させ、高電磁力のエネルギーシールドを発生させる。

青年と老女と女性が同時に展開した電磁シールドは9人を囲い、飛来した光の激突を寸前で防いだ。輝く外皮はシールドに接触すると爆発し、内在した破壊力を四散させて跡形もなく霧消した。一つだけでなく、次々と激突してくる鱗状の外皮全てが同じ末路を辿る。

起爆剤としての魔力を封入された外皮群は、それら全てが高性能な爆薬と化していた。何かに接触する事で作用し、溜め込んだ破壊魔力を解放する。シールドへの着弾を機に爆滅する様子からして、一撃で人の手足を消滅させるだけの威力は秘められているらしい。

高電磁シールドの蔽いが無ければ、既に全員跡形も無く消え去っていただろう。想像するに恐ろしい結果を予想して、レリオとエレーナは自分の体を抱くようにして身震いする。

「確かこのシールドってよ、１０秒かそこらしか保たねぇんでなかったか？」

障壁の外側で連続する大量の爆発を眺めながら、スキンクは素朴な疑問を口にした。

小型軽量化と高性能化の代償として、シールドの継続時間はかなり短く設定されている。しかも一度使用すると再起動まで１０分以上の充電時間を必要とする。防毒面の下から漏れる彼の声は、その重要な事実を深刻さの欠けた調子で皆へ送った。

「マジ？」

「ウソ――」

知らなかった情報を伝えられ、愕然としたのはレリオとエレーナ。二人はスキンクを振り返り、捨てられた子犬のような目で顔色を失くしていた。

「『其の力、我が声に応え王陣の護りを敷け。天の五芒に従いて大いなる担い手たらん。銀糸の囲いに碧き輩（ともがら）を添らし、荒ぶる霊光に立ち向かう猛き勇心の護法となれ』」

戦慄する二人が危機感を絶頂へ運ぼうという時、ノイウェルの幼いが凛とした声が通る。

少年の詠唱が終了して光の守護膜が一同を包むのと、電磁シール

ドがエネルギー残量を使いきり消失するのはギリギリの差だった。
「ふぅ。危ないとこだったね」
恙無く防護陣の交代を終え、アウロは一息吐く。
元より高電磁シールドのみで全ての攻撃を防げるとは思っていない。確かに防御能力は無敵に近いものがあるものの、連続使用が出来なくては戦略の中核を成すなど難しい。シールド展開はあくまで本命の魔術防壁構築まで、皆を護るのが目的であった。この中で一番若いノイウェルの双肩に、全員の命を預けるのは彼女としても心苦しい。けれど状況からして他に手段がないのも事実。極限状況に於いては利用出来るものを徹底的に利用する、それが長生きと困難打破の秘訣である。
「頑張っておくれよ、艦長さん」
「任せるがいい。皆は余が護ってみせる」
アウロの激励に、ノイウェルは生真面目な顔で顎を引いた。
先に二度とも魔法を破られているため、精神的な余裕は感じられない。それでも弱音を吐かず、及び腰にならないのは、ひとえに彼の持つ責任感と誇り高さ、気概の強さに縁る。
「……もう一手」
緊張した防御内の空気を、ラグナの愛想ない声が掻き混ぜた。彼女は白衣のポケットに手を入れ、中から透明な球体を取り出す。
「魔法石ですね」
セルシアが確認すると、ラグナは無表情に頷く。
彼女が今冒険に持参したそれは、組み上げられた魔力の連なりによって更新される超自然現象「魔法」を封じ、任意に発動させられるマジックアイテムだ。
ラグナは魔法石を掲げ、掴んでいる指先に意識を集中した。
「……発動」
所持者の意思とキーワードを鍵として、魔法石は内包していた術式を外界へと送り出す。力の流動を全員が感じると、光の守護膜の上へ新たに青い半球状のドームが形成された。

ノイウェルの作った防御魔法を更に覆い、外部からの攻撃を請け負う第二陣。大海を思わせる青い防壁は、人間に作れないレベルの高位結界魔法である。ノイウェルと魔法石の二重構造になった防御魔法は相乗効果で強度を倍化させ、より堅固に魔獣からの爆裂弾斉射を泰然と受け止めた。

「この魔法、誰より授かったのですか？」

光に透ける青を見詰めてリリナが問う。

「……先輩」

ラグナの返答は素っ気無く、極めて簡潔だった。リリナも相当愛想はないが、ラグナも負けず劣らずである。

「リーナさん、こんな魔法も使えたんだ」

頭上を見上げ、禾槻は素直に感心した。それと共に救護班へ所属する女性の顔を思い浮かべる。

同班勤務でラグナの先輩になるリーナ・シュペルスワンは、魔法の扱いに長けた妖魔族の中でも、特に水や冷気と親和性の高い水魔である。人間以上に長命で強力な魔法を自在に使う一族の例へ漏れず、彼女は卓越した魔術の使い手として秘めたる実力を持つ。そんなリーナが可愛がっているラグナのために魔法石へ封じたものこそ、水魔伝来の強固な防御魔法であった。

極限まで練り上げられた魔力を高水圧の剛壁へと変換し、外部から及ぶ衝撃へ対する鉄壁の護りとする。重い圧力の掛けられた水質は全ての動きを間断なく遮り、魔力庇護の下で熱と電荷の無力化を促して、冷気さえも寄せ付けない。

ノイウェルには未だ真似出来ない最上位の護りが、巨獣から放たれる猛撃を耐えて凌ぐ。水膜に衝突して爆散する光弾は、高次の破壊力と衝撃波のみならず火の粉一欠けらまで完全に防がれている。一切の弊害を断ち切る強靭な盾は、その中に収めた9人を動じずに護り続けた。

「さっき魔物に触れて、分かったことがあります」

多重結界の防衛力が当面の安全を確保したため、作戦会議の様相

でエレーナが口を開く。
「是非、聞きたいもんだ」
全員を見回して取得した情報の開示を企図する彼女へ、スキンクは腕を組んで興味深げな視線を送った。防毒面の下に素顔は隠れているので、マスクの眼部が向けられるだけではあるが。
「あの魔物を構成しているのは、生体金属でした」
「生体金属？　なんだろ、それは」
聞き慣れない言葉に禾槻が首を捻る。隣のレリオへ顔を向けて目で問うが、彼も掌を上向け降参のポーズで応じた。
「昔、聞いたことがあるね。古代の科学と魔術が融合して生まれたっていう、生きている金属のことだよ」
年長者のアウロは顎に手を当て、掘り起こした過去の記憶を口にする。老女の言葉にエレーナは首肯した。
「はい、その通りです。３０００年前の大戦時代に作られた無機生命体、それが生体金属です。あの魔物は毛の一本に到るまでが細胞サイズの生体金属群体なんです」
「元々が金属であるのだから、どれほどダメージを受けても痛みは感じないわけですか」
自分達の攻撃に対してまったく怯む気配のない魔獣を思い、セルシアは苦々しい顔をする。まるで水や風といった実体ない存在を相手取るような徒労感が、彼女の四肢にはこびり付いていた。
「頭を撃ち抜いても、あの通りピンピンしてるってのはどういうことなんだ？」
「構成物質の一つ一つに直接、複合形成情報と活動目的、戦闘システムの全てがプログラムされています。ですからあの魔物は、体全てが脳と同じ作用をしているようです」
サイコメトリで獲得した情報を教えられ、疑問の晴れたレリオは「どうりで」と舌打ちを零した。
知らなかった知識を得られる喜びより、状況打開の方策が思い描きないことに落胆を覚える。何時までも窮地に甘んじていられない

戦士としての心理が、目に見えて焦燥を募らせていく。
「私達、炭素（カーボン）ベースの有機化合物から発生した炭素生命とは異なり、珪素（シリコン）を主体として多様な鉱物結晶を取り込み形成された生体金属は、大気中の魔素をエネルギー源としてほぼ無尽蔵に自己増殖を繰り返します。細胞レベルの生体金属全てに自動修復機能が備わっているので、残念ながらどんな損傷も短時間で復元してしまう」
「やはり個々人の攻撃では有効打にはなりませんか。あれではこちらが消耗するばかりです」
障壁越しに魔獣を見遣り、リリナは冷めた麗貌へ厳しさを含めた。
爆裂する魔力を乗せ、即席の弾頭とした外皮を連続射出する巨獣。先ほどから防御陣を削り取ろうと滅鱗の放射に従事する敵勢は、一定距離を保ったまま代わらぬ姿勢で存在している。変化があるとすれば四肢や顔面の傷が跡形もなく修復され、メイドが裂いた首の斬傷も綺麗に消えているということだけ。
「……どんなに万能に見えても、所詮は人が作ったもの。どこかに必ず突破口がある」
「同感だねぇ。あんな化け物を作っちまう昔の連中が神様ばりに優秀だったら、滅んじまうのはオカシナ話だ。どこぞに欠陥や間違いがあったから、瓦解してなくなっちまったのさ。そんな連中のワンちゃんなら完全無欠にゃ程遠いだろうぜ」
ラグナの発言を支持するスキンクは、肩をすくませ軽妙に笑う。
終始一貫して揺らがない軽薄な雰囲気は、追い詰められている自覚が抜け落ちていた。尤も。この場合にあってその余裕は不謹慎というより、皆の緊張を解すある種の清涼剤のように作用する。
「それなのですが、あの魔物を構成する生体金属の各個連動は、統御機関であるコアによって保たれているようなんです」
「コア？　心臓みたいなものかな？」
再度首を捻る禾槻へ、エレーナは頷き返す。
「はい。魔物の体内深奥部に、全ての生体金属の連携を統括する制御コアがあります。それを破壊すれば、魔物は今の形を維持出来な

くなり崩壊する筈なんです。ただ問題が……」
「重要な装置なら他の部分以上に強力な護りがあるだろうね。おそらく再生力も高いだろうさ。生半可な攻撃じゃ、どうしようもないようなレベルで」
暗く翳るエレーナの表情が、アウロの告げた危惧の正しさを物語る。歴戦の猛者は目を細め、攻撃の手を緩めない魔獣の威容を眺め見た。
アウロの言葉は、魔法壁内の空気を重くさせた。セルシアの直接攻撃も、禾槻の炎も、レリオとアウロの銃撃も、リリナの剣戟も、スキンクの小細工も、どれ一つとして魔獣に致命傷は負わせられない。一時的なダメージとはなるが、即時修復され無意味に終わっている。外部の構成物ですらそうであるのに、更に大きな再生機構を備えた中心核を突破出来るのか。冒険者達の不安は切り崩せない現実の前に、暗雲の如く胸中を曇らせた。自然と皆が口を噤(つぐ)み、乗り越え難い困難を前に複雑な顔となる。
絶望感がじわじわと敗戦色の根を伸ばし、一同の心に侵食を始めた時。
「なにも恐れる必要などない」
会話の絶えた空間へ、力強く真っ直ぐな声が走った。希望の明かりを手放さない前向きな声に、表情へ影を落とす面々が顔を上げる。そのまま声の主へ、全員の視線が集められた。
冒険者の艦アストライアに乗船するメンバーが見たのは、彼等のリーダーである若き艦長。ノイウェル・フォン・アルハルトの何者にも屈すまいという強健な意志が表れた、堂々たる姿だった。
「一人一人の力で足りぬならば、皆が力を束ね立ち向かえばいいのだ。簡単な話ではないか」
ノイウェルは全員の顔を順番に見遣り、自信に満ちた笑みを浮かべる。
自分達ならばこの危機を脱し、立ち塞がる強大な敵を退けられる。そう確信して疑わない、強い輝きが双眸へ宿っていた。まだ若く幼

く弱々しい少年であるが、ノイウェルには誰よりも清く誠実な覚悟と、仲間達への絶対的な信心がある。それは一つのカリスマ性として彼を照らし、同志一同に再起の光明を分け与えた。
「ノイウェル様の仰るとおりですね。私達にはまだ、やれる事が残っています」
最も早く賛意を示したのは、ノイウェルの忠実な従者であるリリナだった。
彼女は主君の揺るがぬ姿勢へ眩しそうに目を細め、成長の喜びに微笑を刷く。自分の主は彼しかいないのだと改めて確認し、その結果へ満足気でもある。
「行動を起こす前に、気持ちの面で負けてしまうところでした」
「艦長さんに気付かされるとは、私もまだまだだね」
「俺も半分諦めてたが、目が覚めた気分だ」
「そうだよね。まだ勝負はついてない。これからだよ」
「……まぁ、正論」
「何が出来るか分かりませんが、私も皆さんと一緒に頑張ります」
「そうそう。早いとこ終わらせて帰んねぇと、昆虫料理教室を見逃しちゃうからね～」
少年の抱く信念と精悍な意識は、戦士達の闘志を相次いで奮い立たせた。一度は萎えかけた各自の戦意だったが、ここにきて活力を取り戻し全員が前へと向き直る。
にじり寄っていた濃厚な敗色の気配は何時しか払拭され、誰もが敢然たる勝利を見て気持ちを一心していた。
「それで実際にはどうするんだ？　目標は体の奥にあるんだろ」
「強引に穴を開けるより、元から繋がってるものを使えばいいんじゃないかな」
投げた問いに思案顔で返す禾槻へ、レリオは具体案を視線で求める。
これへ応じたのはラグナだった。
「……口がある」

「名案だね。それなら体内へ直接通じてるでしょう」
アウロの同意で作戦の方向性が固まり、他の面子も計画を詰めていく。
「では皆様が攻撃を仕掛ける間、魔物の動きは私が止めましょう。セルシア様」
「なんですか？」
「私が足止めをしますので、貴女は奴の口を抉じ開けてください。貴女の力ならば可能な筈です」
「分かりました。なんとしても成功させてみせます」
早速名乗りを上げたリリナと、彼女に指名されたセルシアは、互いに役割を取り決めて頷き合った。
前衛戦闘の最先鋒は後の流れを決定する重要な役割である。失敗は許されない。語らずともそれを理解している二人は、致命的なミスを起こさぬよう注意深く、それでいて素早く準備を開始した。
右手の五指を握り、また開き、セルシアは何度も拳を作っては解いてを繰り返す。先頃、雷撃に打たれた体は普段と大差ないよう見えているが、実際にはかなりのダメージを蓄積していた。稼働率は完調時と比べて六割程度にまで減衰し、とても万全とは言い難い。しかし最後の決戦へ挑むにあたり、限界まで力を引き出す必要がある。今の状態で無理をすれば、本当に躯体が壊れてしまうかもしれない。賭けとしてはリスキーに過ぎる。
「例えそうだとしても」
誰にも聞こえぬ声で、セルシアは己に呟いた。静かに前を見詰める彼女の顔は、覚悟の色こそあれ迷いがなかった。
自身の総てで似って仲間の活路を拓く。我が身を顧みぬその意志は悩むべくもなくとうに決まり、不動の戦意と結び付いて胸郭奥にて脈動へ等しい駆音を奏でる。
アストライアの仲間達は、生身を捨て機械となった自分に他者と変わらない態度で接し、受け入れ、対等の人として付き合ってくれてきた。そのさりげない優しさがどれほど嬉しく、どれほど心強か

ったか。血の通わない体になってからの、堪え難く無情な孤独。これを埋めて満たしてくれた彼等には、言葉では表しきれない感謝がある。

そんな彼等の為に働くことへ躊躇いなどあろう筈もない。自分の力が求められるというのなら、喜び勇んで応じよう。大切な仲間達の誰一人としてこんな所で命を散らせなどさせまいと、揺るぎない決意の下でセルシアは両の拳を固く握った。

「こうして皆さんの力になれることを考えれば、戦闘に耐えられるよう体を調整してくれた彼に、感謝しないといけないわね」

厚顔無恥且つ唯我独尊を地でいく研究者、ハウエンツァの姿を脳裏に浮かべてセルシアは苦笑する。

自分勝手で人の話を聞かない横柄な男だが、持ち前の技術力だけは超一流。彼のメンテナンスがあるからこそ、セルシアはこうして戦っていられるのだ。水と油のように反発しあう性格から嫌悪感を抱かないではいられないが、自称天才科学者の実績は確かなもの。その裏方的活躍を素直に認め、少々癪だが帰還の暁には謝意を送ろうとも思い始めていた。

「余はこれから指向性を排し、威力のみに特化する魔法を紡ぐ。禾槻は余の魔法に出来る限り強力な炎を合わせてくれ」

「魔術と超能力を融合させるんだね。考えてもみなかったよ」

ノイウェルの提案に微笑みかけ、禾槻は了承の形へ顎を引く。眼前に居座る巨大な障害を打破し、誰一人欠けることなく冒険を成功させようという、言外の気概が両瞳に漲っていた。

「レリオはロストアームを持っておったな」

「ああ、此処にあるぜ」

ノイウェルに聞かれ、レリオは懐から掌に収まる程度の球体を取り出した。鉄に似た光沢を見せる、黄土色をした球体だ。表面には微細な紋様が隙間なく彫り込まれ、独特の存在感を湛える。

「それを使い、余達が設けた術式を敵に放ってくれ」

「こいつを起動させて魔法だか超能力だかをぶっ飛ばせばいいんだ

な？　面白いぜ。やったことはないが、任せとけ」
少年の要求に異を唱えるでなく、レリオは親指を立てて快諾した。かつてない試みに臆さぬ頼もしさへ、ノイウェルも信頼の笑みを返す。
「アウロにエレーナ、ラグナとスキンクはサポートを頼む」
「了解したよ」
「はい、頑張ります」
「……分かった」
「それはいいとしてだ。どうやってゴールデンハッスルメンの攻撃を掻い潜るつもりかね？」
スキンクの指摘に全員が結界外部へと目を向けた。
青い光の防護膜には延々と爆破皮鱗が激突を続け、衝撃と熱波を多段的に積み重ねられている。守りの一歩外、無防備な空間へ巨大な破壊の圧力が渦を巻き、あらゆる被造物を灰塵に帰すべく暴れ回る。
僅かな隙間もなく連鎖を解かない滅びの意志が蠢動する中、担い手たる金の王獣は四肢を張って巨体を低め、９人の獲物を見据えて動かない。堅牢な守護の防陣を突破すべく大火力の集射を止めない魔獣の紅眼は、当初から委細変わることのない徹底した敵意と殺意に爛々と輝いていた。疲労や諦観は絶無であり、執拗で狂猛な闘争心に翳りはない。冒険者達の護りを完全破壊するまで、同じ攻撃を間断なく継続させる腹積もりなのだと、容易に知ることが出来る。
「確かに、このままでは近付く事が出来ませんね」
冷めた顔に口惜しげな気配を僅かに乗せ、リリナは唇を引き結ぶ。
仮に我が身の負傷を厭わず立ち向かっても、一歩と進む前に肉体が消えてしまうだろう。それほどの攻勢が、容赦なく繰り返されている。
「あの魔物は、僕達をこの場に縫い付けておくつもりみたいだね」
「結界が切れた瞬間に、俺達は木っ端微塵の大合唱てなわけだ。唯一の救いは、葬儀屋が死に化粧を施す手間が省けるってとこか」

覆し難い状況に頬を掻いて息吐く禾槻の傍、スキンクは憤懣(ふんまん)やるかたない様子で鼻を鳴らした。ただ防毒面に遮られ、鼻息は誰の耳にも届かないが。

「この防御魔法は、あとどのくらい保つんだい？」

「……もう少しはいける筈。でも、あまり余裕はない」

「絶体絶命ってことか」

アウロとラグナの問答に、レリオが表情を強張らせる。

戦う意思を呼び起こしても、実際問題として身動きが取れない。進むも退くもならない膠着した状況は有限で、何時までも燻っていては敗北必至。勝利の為の一手を誰もが模索し、焦燥ばかりが悪戯に募っていく。

「鬣さえ破壊することが出来れば」

「あやつの鬣がどうかしたのか？」

エレーナの呟きを聞き拾い、ノイウェルは爆煙の先を指差した。厚い炎と黒煙が立ち込める奥に、こちらを狙う魔獣が佇立している。

「はい。あの魔物の鬣が、魔力の制御と魔法の構築を行う機関なんです。だから鬣さえ壊せれば、一時的であれ魔法を封じられるのですが」

「そいつはイイことを聞いた」

突然、スキンクが大声を上げた。何事かと全員が防毒面へ視線を集中させる。

当人は気にせず自分の背中へ手を回し、襟首の中に手首までを突っ込んだ。そしてすぐに引っ張り出す。手にはしっかりと柄を握り、それへ繋がる長剣が軍服と体の狭間から滑らかに現れた。

誰も予想しない場所から予想しない代物を平然と抜き出すスキンクへ、驚愕の眼差しが四方より刺さる。一同が注視するのは、防毒面が手に持つ一振りの剣だった。何の意匠も施されていない無味乾燥な握りと鍔、銀色の光を鈍く返す両刃の直剣。何の変哲もない、どこの武器屋でも売っていそうな大量生産品。無銘のブロードソードにしか見えない。それを彼は鞘でなく、自分の背中から抜き放っ

た。全員が驚くのも無理ないだろう。
「ど、どこから出すんだ」
「なんだか手品みたいだね」
「……やっぱり変人」
若干引き気味のレリオと、暢気に感心している禾槻、考えるだけ無駄だと思考を放棄したラグナ。他の面子も似たような反応を見せている。
「ほれよ、メイドさん」
各自の疑念と好奇は意に介さず、スキンクは自前の刃をリリナに差し出した。
得体も意図も知れない勧めに、ノイウェル付きの武闘派メイドは怪訝な顔をする。
「なんですか、これは」
「見てのとおり、少々常識の通用しないヤバイ得物だ。投げても捨ててもも気付いたら手元にあるんで、なんか呪われてるのかもしれん。が、業物だぜ。先陣きって特攻掛けるなら、ちっとはタシになるんじゃないかと思ってね」
今は少しでも多くの戦力が欲しいところ。スキンクの申し出へ逡巡もなく、リリナは一度だけ頷いた。
速やかに手を伸ばし、見た目は普通でしかない剣を受け取る。その直後だった。指を、掌を通じ、奇妙な感覚がリリナへ伝わる。皮膚を透過し、筋肉を伝播して、神経へ直接感じるもの。小さくも強(したた)かで、確固たる不気味な鼓動だ。その長剣は密かに脈打っている。
眉を顰めたリリナを見て、スキンクはマスクの下で唇を吊り上げた。
「命吸われそうだし、危険な臭いがプンプンするから俺は使いたくねぇんだよな。正面きって戦うタイプでなし、後は任せた」
厄介な代物を押し付けられた感に目を細め、リリナは剣と防毒面を順に見た。しかし固まる闘志は萎える兆しもなく、続く言葉とてないまま長剣を構える。

その後姿を見送って、スキンクは懐からボールペン程の円柱体を取り出した。
「さぁて皆様、お立会い。奴さんの攻撃に隙を作るぐらいは任せてもらおう。どうやってとは聞きなさるな、見てりゃぁ分かる。各々方は好機を逃さず、奴の喉笛に喰らい付いてくだされよ」
歌う様に口上を述べた矢先、スキンクは円柱体の先端を親指で押し込んだ。それと同時に魔獣の鬣へ絡まっていた不発手榴弾が反応し、収めていた炸裂機構を発動させる。
装填火薬が瞬間的に起爆して、凶々とした爆熱を外周目掛けて発散させた。炎は波状の衝撃と連動して一気に拡散し、赤熱の魔手で黄金の剛毛を焼き尽くす。爆発点では紅蓮の球泡が急激に膨張しながら、周辺の大気を道連れにして獅子の硬皮も深々と抉り取った。
「策ってのは、二重三重に用意しとくもんだぜ。不肖、この私スキンクの抗議を静聴有難う御座いますです」
手榴弾を遠隔爆破させた円柱型のリモコンはそのままに、貴公子然としたわざとらしい御辞儀を決める。
そんなスキンクの前方では、張られた結界への集中攻撃が停止していた。魔力の循環変成と詠唱構築を成す主要機関の欠損から、爆裂散弾の掃射が不可能になったのだ。それまで続いていた皮鱗の襲撃は完全に止み、9人と魔獣を遮る物は何も無い。
変転した状況に即座対応したのは、自らの宣言通りにリリナである。彼女はスキンクから譲渡された長剣を下段に構え、前傾姿勢で一気に駆け出す。二重の防護膜が自然消滅する中を抜け、弾幕の残滓に煙る空間を全力で走った。巨躯の獅子を真正面に据えて、ただ只管(ひたすら)直進する。
「古代の遺物よ。ノイウェル様の為に、私の力となりなさい」
走りながら、リリナはメイド服の袖口から黄土色の球体を手へ落とした。レリオが持ち込んできたのと同じ、携行型万能兵器ロストアームである。
彼女の戦意に呼応して精神パルスを読み取り、太古の戦闘遺物は

光り輝いて瞬間的に原型を失う。質量の全てを光の帯へ変換し、それは緩やかにうねりながらリリナの握る剣へと纏わり付いた。光はすぐに長剣全体を覆い尽くし、消えない光で形を埋める。

時間としては一秒にも満たない。リリナが次の一歩を踏むより早く、光は失せて剣の姿を外気へと解放した。そうして露となったのは、直前までは似ても似つかない巨大な刃。柄だけでも持ち主の半身程もある。幅広の鍔は左右へ大きく張り出し、翼のように視覚出切る特異な形状へ変化していた。刃根元（リカッソ）は前後に膨れ、内部に蒼い結晶体が確認出来る。刀身に至っては最初期の数倍へ及び、恐ろしく長く肉厚の刃が精悍な迫力を茫漠と投射した。全長にして３ｍ近くはあろうか。刃先から柄頭までが白亜で統一された姿は、彼女達が活動拠点とする高機動魔導飛翔艦アストライアに酷似している。

使用者の意識に反応して自在に形を変え、個人専用の唯一兵器へと再構成される古代遺産ロストアーム。それがスキンクから手渡された長剣と結合し、人間が扱う物とは思えない常軌を逸した特大の巨剣へと、著しくも非常識な成長変化を遂げた。

もはや自身を倍する程に巨大化した白剣を、だがリリナは軽々と持ち、重さなど感じさせない足取りで進み続ける。彼女の筋力が人並み外れて発達しているわけではない。使い手だけの武装となったロストアームの変換形態は、使用者に一切の負担をかけないのだ。まるで一片の羽が如く重さを失くし、使役する存在へ最大限の加護を与える。太古に設計された最優兵器が持つ有能性は、三千年の時を経て尚正常に働き、確実にリリナの助けとなった。

見た目の大きさとは裏腹に、まったく重さを感じさせない剛剣を携えて、リリナは自らの定めた行路を直走る。剣のみならず自身の体重さえ忘れたように軽快な走行で、敷かれた鋼板を踏み越えていく。遮蔽物のない平らな世界を直進すれば、然程も時間など要さずに目標へと辿り着く。眼前にはもう、金の巨獅子が仰げる程に迫っていた。

敵勢の接近に対し、魔獣も迅速な対処を開始する。床を踏み締め

ていた右前肢が振り上げられ、次にはリリナ目掛けて豪速で打ち下ろされる。体毛の下で膨れる隆々とした筋肉が風を切り、鋭利な爪が空気を裂いて襲い掛かった。

「私は、負けるわけにいきません」

迫り来る豪肢を瞳に映しながらも、リリナは回避行動を取ろうとしない。変わらぬ直線進路を突き進み、真剣な面差しで冷静に告げる。

零される吐息に興奮はなく、静かに調節された普段通りの起伏のみ。その息遣いは乱さぬまま歩を止めると、肩幅に脚を開いて腰も大きく捻った。両手で強く握る巨剣は上体ごと後方へ絞り、向かい来る魔獣の肢を見詰めて、両肩へ力を注ぐ。

「ハッ！」

呼気は浅く、けれど鋭く。巨大な猛威が頭上から被さるよう落下する最中、リリナは溜め込んだ力を解放した。

全身のバネを活かして打ち振るわれる上半身。固く握られた大刃が獣声さながらに撓(しな)り吼え、体動と共に正面空間へと引き戻る。巨剣は彼女の歩み以上の速度で疾(はし)り、上空から落とされる進撃を斜め上段への斬り上げで迎え撃った。

怪物の太い肢を、リリナの巨大白剣が打ち据える。降下軌道へ側面から割り込み、魔獣の前肢へと激突した。豪快な反発作用が生じるのは半瞬後で、これを押して更に腕を振るったメイドの一閃が、魔性の右肢を弾き飛ばす。

大きさのみならず威力も格段に向上している斬撃へ阻まれ、獅子は獲物を踏み切れない。肢が上方へ押し返され、企図せぬ隙が合間へ生まれた。リリナはこれを逃さず、一度振り抜いた剛剣を再度逆振りする。自ら描いた軌跡を反対になぞり、巨剣は盛大な唸りと脅威の速度で魔獣の肢へ跳び掛かった。

最初とは反対に位置付く側面部へ、白刃が外皮を穿って減り込む。確かな手応えと肉裂く感触、そして抵抗がリリナへと伝わった時、躊躇なく込められた力は一息に障害を断つ。巨獣の内を白い剛剣は

疾走し、足首から下を綺麗に切断した。切り離された部位からは黒い体液が噴き、空中へ放り出される肢裏は五指を含んで落下していく。

「視界を奪わせてもらいます」

見事に切り飛ばした魔獣の肢へは既に興味も示さず、怯まぬ敵を睨んでリリナは冷たく言い放った。

一歩進んで両手に掴む白亜の柄を再び振り、今度は真横へ新生巨剣を薙ぎ払う。先撃から硬直なく続けられた連動は、白い刃先で魔力も空気も境界なく蹴り散らした。回避を許さぬ速さと間合いで肉薄し、剛剣は獅子の目尻へ刃を埋める。そこから更に暴力的な軌道で走り、厚い外皮を潰し裂いて紅眼まで切り払った。

巨大な刃は感情なく二つの眼球を真横から撫で斬り、透明な眼膜と紅い瞳孔を横断する。ギラついた凶眼は突然の襲撃に恐れの類を浮かべなかったが、抗う事も出来ぬまま分厚い刃に中心を抉られていく。異物の侵入に冒された柔らかな眼球は、水分を有し潤んだ部位から掻き裂かれ、微細な飛沫を噴出させて砕け散った。すぐに機能どころか形状そのものが欠損していき、無惨な肉塊の片々と化す。壊された残骸の一部が蕩け出すと、目玉の名残の固形物を滴らせて床へ弾ける。

容赦せず駆けた巨剣に顔面の上半分が削り取られ、亀裂状の裂傷が双眸へ変わり生み出された。リリナは宣告を忠実に守り、魔獣の視力を眼部一帯ごと消し去ったのだ。

右前肢と目を潰された金の獅子は、痛みに呻くことはない。無機物を基礎とする体は一切の痛覚を宿さず、故に平然と反撃行動へ移る。後肢と左前肢で巧みにバランスを取りながら、十五の指と体動で巨躯を回転させた。独楽回しのように。

体の中心点を主軸として、怪物は視認に難い高速度で大回転を実行する。金の体毛が一斉に同一方向へと揺れ靡き、金色の大円を描き出す。それによって太くしなやかな巨尾が地上を走り、周囲に立つあらゆるものを吹き飛ばした。主に散らされたのは爆煙の濃い噴

幕。長い強尾に打ち払われ、全てが事も無げに掻き消える。その中に、リリナの姿はない。

的確な攻撃を決めた彼女は、大振りの横薙ぎをやり終えた足で床を蹴った。前に行く為ではなく、上へ跳ぶ為に。メイドの狙った次撃と、魔獣の放った回転尾撃が重なったのは偶然に非ず。数々の死線を潜り抜け、実地で危機感知能力を研ぎ澄ましてきたリリナは、培ってきた感覚から敵が大掛かりな攻勢へ来ると読んだ。そもそも魔力を用いた攻撃の封じられている状態で、獅子が選択する行動など限られてくる。そこから当たりをつけ、彼女は高らかに跳躍した。

空中へ跳び上がった一瞬の後、それまでリリナの立っていた場所を巨獣の大尾が駆け抜ける。行動が僅かでも遅れていれば直撃を受け、彼方まで吹き飛ばされていただろう。それどころか低くもない確率で、絶命していたかもしれない。

「この一太刀を勝利に繋げる」

静かに口ずさみ、リリナは足場無い虚空の只中で前傾した。腰を曲げ、上半身へ重心を置く。跳躍時に働いた重力へ逆らう浮力を纏い、高度を落とす事無く体が回る。ぶつかる物がない空中ではメイドの肢体が軽やかに前のめり、スカートを閃かせて一気に前転運動を開始した。

上空で素早く一回転するリリナは、無論、巨剣を手放してなどいない。握った白刃は豪快に一転し、メイドの動きそのままに猛牙を振るう。前から入り、下へ行き、後ろへ回って、上へと昇る。巨大過ぎる両刃が轟音を伴い車輪型へ激走し、間合い内の全てを寸断した。

回転運動で破壊力が増大している巨剣は、床上での回転を止めた魔獣の左前肢へと食い込む。胴体と肢を繋ぐ肩口へ刃は沈み、下方へ掘り進んで肉と皮を半分以上こそぎ取った。ついでに血管類を断ち切り、黒液の循環を妨げ、骨格も裂いて巨躯の支えへ弊害を誘発させる。白亜の大剣が黒液を散らせて肩肉から抜け出すのと、右肢の首下及び左肩の繋がりを奪われた魔獣が、雄々しい体躯を右方へ

傾けるのは殆ど同じタイミングだった。
流石に両前肢を連続して破損させられては、正常な体勢を維持出来なくなったらしい。獅子は床へ半身を近付けて斜めに沈む。それによって左肩が前方へと突出し、リリナにとって丁度良い足場を提供した。
「フンッ！」
空中回転を経て体向が跳躍時のそれへ戻ったメイドは、勢い良く突き出てきた異形の肩口に、巨剣を上段打ちで叩き込む。分厚い刃が外皮を削り深く減り込み、強く安定性を確保する。
肉と骨の狭間に打ち込まれ、揺るがない係留索となった巨剣。その柄を支えにリリナは再度一転し、鉄棒回りの要領で勢いをつけ、軽々と魔獣の肩上へ飛び移った。新たな足場に乗ると腕を引き、深く刺さった剣を獅子の身から引き剥がす。
「これからが本番です」
誰にともなく呟いて、リリナは魔獣の背上を走り始めた。
握る巨大剣を斜めに下げて、厚い切っ先を金毛へと埋める。そこから刃を下方へ押し込み、力任せに外皮を擦り、削り、抉り、裂いて、長胴を下半身目掛けて疾走していく。
硬い鋼板の変わりに堅固な筋肉の上を踏み拉き、鋭く太い刃先が進行に応じて皮肉を食い刺す。刻み破れた肉体の狭間から黒い体液を溢れさせ、飛び散る肉片が方々へと付着する。その間にも白刃は淀みなく斬り進み、外皮の守膜を打ち砕いた。
生い茂る金毛掻き分け背肉を傷付け、リリナは巨獣の上を南下する。狭まらぬ歩幅は全力による快走であり、沈下した刃を率いて突撃と呼べる勢いで邁進した。足裏に魔獣の脈動を感じつつ、失速せぬまま辿り着くのは下半身域。腹部の真上に相当する。
何者の妨害もなく順調に道程を踏破して、目的地に一歩を乗せてメイドは止まった。走りながら傾斜に自身を導いて、怪物の右脇腹上部へと位置付く。そこへ到達すると巨剣を両腕で高く振り被った。刃先を足元に向けた形で、弓なりに背中を反らし、腰を目一杯伸ば

して、限界まで腕を振り上げ、リリナは身長以上ある白亜の剛剣を掲げる。
「全ては、ノイウェル様の勝利が為に！」
声高に謳い、リリナは脚力を解放した。外皮を蹴り、真上へと跳び上がる。後腰と腹部の間となる背面部に双眸を固定し、その一点を正確に狙う。
体が重力に掴まり跳躍力が奪われると、落下する途上で手にする刃を下向けた。振り上げた腕を一息で振り下ろし、自重を上乗せ高所から標的部分へ衝突する。接触と同時に巨大な剣は魔獣の身へと切っ先を突き、驚くほどスムーズに埋没していく。外皮は勿論のこと、犇く筋肉にも通行を乱されず、進路にある組織を次々と切り裂き押し潰した。
生物に酷似した構築様式を巨大な異物は躊躇なく破壊して、線維の一つ一つまで余さず力尽くで突破する。侵入体に抗おうとする内部活動もあったが、リリナの強靭な精神力を糧として形成された刃を止めるには至らない。分厚い両刃は獅子の脇腹を一直線に降下して、柄へ届く根元までを飲み込ませた。これによって反対方面、魔獣の腹部端を突き破って刃先が現れる。
巨剣は更に推し進み、逃れ難い圧力で怪物を床面へと平伏させた。元々前肢の支えを失くして安定の欠いた巨体に、反動を生む余裕はない。下腹を鋼板に密着させると、腹部を貫通した白亜の刀身は、古代材質をも貫いて床へ沈む。人の身を数倍した剛剣の刃は、魔獣の体と床とに全てを沈埋（ちんまい）し、外観の一切が見えなくなった。金獅子は身動きが出来ないよう、標本箱の昆虫同様に串刺しとされたのだ。
「セルシア様、今です！」
「はい！」
リリナの叫びへ、既に駆け出していたセルシアが応じる。彼女は行動を抑制された魔獣へ突進し、床面に接する巨大な顔へと正面から躍り掛かった。
かつて出したことのない速力を発揮し、一気に距離を詰める。眼

部の裂けた王獣の顔前に全身からぶつかり、速度と体重、慣性、腕力、全て注いで両腕を大口の中へ叩き込む。頑健なガントレットに覆われた左右の腕は、渾身の力で鋭い犬歯を上下共に粉砕した。

砕けた牙が飛び散り向かい来る事にも構わず、セルシアは右腕を上顎、左腕を下顎へと即座に宛がう。それぞれに獅子の両顎を掴むと、上下別々の方向へ腕を動かしていく。

小細工は必要ない。ただ持てる力を限界まで引き出し、無理矢理にでも口を抉じ開ける。技巧も才覚も用いず、単純にして純粋な力によって障害を取り除くのだ。自分に与えられた役割を全力でこなす。セルシアが今考えるのは、それだけだった。

ここにきて過度の使用に耐えかねたように、両腕は悲鳴めいた軋みを上げる。脚の踏ん張りも、当初に比べれば随分と弱い。一瞬でも気を抜けば、立っている事さえ出来なくなるだろう。セルシアは漠然とだが、絶望的な自分の状態を把握していた。

ここで倒れればもう、自力で動く事など望めはしまい。紛い物の身は眼前の魔獣と違い、再生機能などついていないのだから。今膝を折ってしまったら、かけがえのない仲間達の期待に応えることは永遠に不可能となる。自分が再起不能に陥るだけでなく、彼等全員がこの途方も無い怪物に蹂躙されよう。

「絶対に、やらせはしないッ！」

セルシアは両目を見開き、怒号を発し、全身から更なる力を汲み上げる。

四肢が極限を訴え、体の内部では幾つかの配線がショートを始めた。そこかしこから小さな火花が散り、ギシギシと無機的で鮮やかさの欠片もない、不快な騒音が零れ出る。

気付けば視界が赤く染まり、聴覚にはノイズは混じって正常さを失っていた。今まで自在に動かしていた体が、急激に意識から遠ざかっていく。本当の終わりがすぐ傍にまで迫ってきた。このまま無理を押し通せば、どうなるのかもう彼女自身にも分からない。だというのに。

「知るかァッ！」
絶叫しながら、セルシアの腕が動く。右腕は上へ、左腕は下へ。それぞれが魔獣の大顎を上下に押し開き始めた。
唸る腕動に従い、固く閉ざされていた口腔が僅かずつ動いていく。機械の腕は閉口力を上回る働きで、上下の顎を筋肉骨格総じて引き剥がす。力任せに開かされる大口では粘度の高い唾液が糸を引き、口角から濁った流液が滴り落ちた。零れる唾液をまともに受けてしとどに着衣を汚しながら、それでもセルシアは力を緩めず挑み続ける。

決戦、破壊の君主と冒険者（後）（前書き）

執筆者：ういいち

決戦、破壊の君主と冒険者（後）

けして弛まない渾身の強制力は、逆方向へ逃げようとする抵抗を許さない。重い口部に暴力的な叛意を以って、ジリジリと境目を大きく変える。そのまま進行が全体の三分の一程へ達した時、突如セルシアが咆哮を放った。

「オオオオォォッ！」

限度を超えた体が、遂に脳へも影響を与え出す。

大量のスパークが唯一の生体部分を圧し、自我と呼べるものを掻き乱す。その影響で頭の中には何も無い。あらゆる思考は彼方へ失せ、記憶も感情も薄れて果てた。人間性が急速に喪失し、自分が何者であるかさえも分からない程に。

それでも胸の奥では仲間の事が消えずに残る。体の芯に、心の果てに、焼き付いて離れない強固な意志が、その一念が、原動力でもあるかのように機械体を稼動させた。両腕はまだまだ動き続け、あろうことかより一層出力を高めていく。

最大限のエネルギーが発揮されたセルシアの躯体は、彼女の覚悟と決意によって巨獣の顎を天地へ分かった。最後の抗いを打ち砕き、口の端が裂けるまで強く、烈しく、巨大な口を開放する。

「『暁の天翼よ、永年の狭間より我が身代（みしろ）に降り、那由他（なゆた）の彼方へ忘我と舞え。現るる原罪に固き契りを交わし、三顧の極彩へ違（たが）わぬ盟約を賭す。麗宮に這いし理の担い手よ、沈黙と雄牙とを並べ奉さんが、煉凱（れんがい）の扉を開け放ち給え。御手に拡げやう邑塵（ゆうじん）へ誓いの礎と以て。輝ける星光を今、解き放たん』」

両腕を掲げたノイウェルが、瞼を閉じて厳かに唱う。

声へ含まれる音韻に反応するのは不可視の力。魔導の制御法たる文言が内在魔力を導いて、少年の面前に蒼白い明光を浮かばせた。蒼の光は意思持つように空中を滑り出し、規則的な動きで一つの大きな円を描く。上方位の基点から巡って一周すると、始まりの同所

である終点へ辿り着き一度は消える。それと同時に円の内側と外周に新たな蒼光が現れ、直線と鋭角の動きで内部に六芒星を、外縁には難解な魔導言語をそれぞれに刻みつけた。
双方の光が始点へ帰り図形と術式を完成させた後、今度は六芒星の頂点と四つの先端部へ蒼光が生まれる。六つの光は時計回りに同規模の小円を作り、続いて各円から内外二面へ及ぶ湾曲線が伸び出してきた。六芒星を囲む二重円が描かれると、その狭間へとまた別の魔導言語が蒼い光によって記し上げられる。
「これが僕の全力全開！」
ノイウェルの敷いた魔法陣完成と相まって、禾槻も自らが有す超能を解放した。
極度の集中から精神を赤熱化させ、燃える大炎に転じて生み昇らす。熱く滾る業焔は深紅の舌で外気を舐め、周囲に肌焙る狂暴な熱気を撒き放った。誕生から一拍も置かず巨大な火柱へ成長した灼熱が、望まれるまま苛烈な燃体を撓めて雄走していく。空間上に存在する魔法陣目掛けて猛進し、蒼白い術式へ獲物を認めた蛇の如く飛び込んだ。
燃え盛る熱火が激突してくると、法陣はこれを末尾まで余さず吸い込み尽くす。向かい来た炎の全てを取り込むと、全容が目に見えて変質を始めた。外周に位置取る大円の蒼が炎の赤へと色を変え、光で組まれた構築線は紅蓮の焔に取って変わる。微細な魔導文字も赤熱色へと反転し、外周円は極熱の車輪然とした様相を呈していった。
内部に収まる六芒星が赤々と燃え立ち、煉獄の魔陣から幽彩の輝きを放つ。六つの頂点へ止まる小円も相次いで灼色に変じ、連なる湾線と魔韻が瞬間で炎へと包まれる。全ての構成が蒼から朱に変わった魔法陣は、双方の力が拒絶なく融け合い単一時ではありえないエネルギーを留めていた。
「レリオさん！」
「……チャンス」

エレーナとラグナの呼び声が重なる。
「よし、任せろ」
二人に頷き返し、レリオは愛銃を手放す。使い慣れた大型狙撃銃が床面に落ちる横で、彼は右手を真っ直ぐに突き出した。手中にはロストアームが握られている。
「いくぜ相棒。戦闘形態だ！」
持ち主から戦意の昂ぶりを感じとり、眠れる古代遺物が起動した。
球体の内外は眩く輝き、全体が無数の粒子へ変換される。数えきれない光の粒は素早く宙を掻き走り、拡散しながらレリオの前面へと展開した。
散らばった輝光は伸ばされた青年の手に再集結し、先端方から高速で物質化を遂げていく。黒く硬質な実体が形作られ、徐々に巨大な偉容を出現させる。通常空間に復帰した質量は明確な連続性を以って統合していき、これにより認識可能となる姿は異質であった。
全ての光を取り込んで離さない漆黒で構成され、全長は４ｍへ達そうかという巨砲。リリナが獲得した剛剣より更に大きく、物々しい迫力がある。形状そのものはシンプルで、際立った意匠もなくただ長い。見た目には長方型の鉄塊であり、外周は人が二人揃って抱え込んでもカバーしきれない程だ。
怪物へと向けられた先端面には大口径の射出口がある。底の見えない深い穴は、奈落への入り口かと思えるほどに黒く暗い。砲体の後方部に六つの穴を持つ回転式（シリンダー）弾倉が具わり、闇色の輪胴が静かな存在感を放射しいた。
使役者の身の丈を数倍する超大な武装からは三対の無機的な脚が伸び、床面へ降りて巨体を支える。安定性を得た砲に接するレリオは、中程へ設けられるトリガー部に肩を掛け、手そのもので握り込んだ。その上部横腹から突出した変則的なスコープを覗き、床へ釘付けられ、強制的に口腔を押し開かれた魔獣と、射線上へ配置された真紅の魔法陣を視認した。
「狙いはバッチリだ。よぉし、決着（ケリ）をつけてやる」

スコープ越しに目を眇め、レリオは浅い深呼吸を数度行う。照準に集中し、魔法陣の中心と巨獣の口内を重ね合わせた。
動かない標的を射抜くなど、朝飯前にも程がある。しかも対象はとてつもなく巨大だ。外せという方が難しい。尤もレリオが決め手とする超砲身の攻撃は移動が利かないため、定位置から固定された標的を狙う仕様であるのだが。
既に必中の段であり、確実なる勝利への一手は彼が握り有す。今まで散々やってくれた返礼も込め、引き金を掴む腕に一層力は入っていた。
「風が妙だね。キナ臭い。レリオさん、気を付けなよ」
後方からアウロの注言が挟まれる。持ち前の優れた感覚機能で何かを感じ取り、老齢の戦士は若き狙撃手へ警戒を促した。
「心配は無用だぜ。なにせコイツは戦艦さえブチ抜く威力だ。この絶好のポイントなら、どんな障害も力尽くで押し通す！」
レリオが高らかに宣言すると、黒き巨砲の内部機関から駆動音が上がり始める。
モーターの回転する高速音と、忙しないピストン機構の稼動音が重なった。微細な部品が各々に動き、それらが噛み合って連動する様は外部から確認出来ないが、周辺の空気が一斉に痺れ出した事で状況が知れる。
眠っていた機器が相次いで目覚め、次第に唸り響かせていく最中、超砲身の中心部から稲光に似た電光が生まれた。漆黒の外面を躍り回る電子の線は幾重にも分かれ、全体を駆け巡りながらシリンダーへと集っていく。生まれ出た雷光は夥しい量となり、明滅を繰り返しながら弾倉で凝縮。輪胴内で大きなエネルギーを育み、淡い燐光を兵器側面へと広げる。
「よっしゃァ！　いっけぇぇぇッ！」
スコープ越しに魔獣を狙い、レリオは気勢を乗せて叫び上げる。それと同時に引き金を絞った。
シリンダーに構築された破壊の力が、強烈な閃光を迸らす。回転

弾倉が右回りに一つ進み、澄明な輝きが砲搭の内部を一直線に駆ける。次の瞬間、射出口から碧緑の光弾が発射された。兵器先端口より撃ち出された碧光は荒々しい尾を引いて、目にも留まらぬ速度で空中を疾る。

光弾が解き放たれると地響きに似た鳴動が轟き、とてつもない反動に砲身自体が前後へ揺れた。衝撃波もまたレリオを中心として円形に走り、大気を一瞬にして張り詰めさせ叩き付ける。傍近くに居たアウロやラグナ、エレーナやスキンクの髪と着衣を盛大にはためかせ、鋼板から伝わり空間全体を激しく震動させた。

射出後の碧光は秒を数えぬ間に魔法陣へ激突し、その中央、六芒星の只中を貫く。両勢が接触すると法陣は紅と蒼二つの光に分離して球状となり、飛来弾を核に螺旋を描いて回りだす。三つの輝きは揃い踏んで速度を落とさず、目では容易に追えぬ勢いで魔獣へと突っ込んでいった。

セルシアによって開かれた大顎を、真ん中から通過する最高のコースである。合間には遮蔽物もなく、敵はリリナによって自由を奪われている。これで命中しない筈がない。三色の煌びやかな尾が軌跡に光の残滓を置いて、膨大な出力の備わる一閃は迷う事無く目標への進路を蹴った。

だが金の大獅子はみすみすの直撃を許さない。床面へ押さえ付けられまま、喉の奥に光脈を宿す。その鮮照を皆が確認した時、光源は迫り上がり滂沱の奔流となって溢れ出した。怪物の大顎を通り現出したのは黄金の大光条、巨大な殲滅魔法の柱である。

「魔導砲だったのかい」

違和感の正体を今更ながらに理解して、アウロは暴力的な危惧に苦い顔で吐き捨てた。

魔力制御機関である鬣を損失している現状で、強引に行使された魔獣の大砲撃。一番最初に見せたそれよりも幾分太さや輝きは劣るが、それでも内包する滅砕力は充分すぎるほど強い。

獅子の上顎を力任せに開いて支えていたセルシアの右腕は丁度通

過点にあり、口腔から放たれた魔導砲を正面から受ける事となった。圧倒的な火力は既存の物質を労わる余地など一切なく、光膨の驚異的放出へ飲み込まれた彼女の腕が、肩口まで一瞬にして消滅する。骨子も欠片も塵一つ残さず、右腕を構成していた全存在が永遠に地上から消え去った。

円筒形の強光砲から派生する激烈な余波に打たれたセルシアは、右腕の完全消失に気付くよりも早く吹き飛ばされる。襤褸雑巾のように軽やかに舞い、獅子から然程も離れていない鋼板の上へ叩き付けられた。元から限界を迎えて暴走状態にあった躯は、これが止めになったのだろう、うつ伏せに倒れたまま動かない。

「セルシア様！」

眼下の惨状に切迫した声音で同志を呼ぶが、リリナの声に相手は反応しなかった。

その間にも放出方向へ直進する黄金の大幕は虚空を焼き払い、揺ぎ無い澎湃さで進路を喰らう。レリオの放った一撃は道程を違えず渦中へと飛び、正対する魔力の超越的激流に蒼紅碧光(そうくへきこう)揃って挑んだ。魔力、超能力、古代遺物、三人分の意志と力が結合した必殺の光弾と、三千年を生きた闘争の化身が放つ渾身の魔導砲。互いに退く事をしない意地と覚悟の衝突が、相反する壊滅力の削り合いという状況を作る。

黄金の極大級砲撃に中心から叩き付ける三大光弾は、等しい力関係から拮抗を見せた。双方共に押し進もうとするも、同程度の出力が片方の突破を為させない。どちらからも等分の距離を置いた広域空間の中程で、ぶつかり合うエネルギーが甲高い異音を吼え立てる。耳を圧する炸裂音が何重にも木霊反響し、肌を突く衝撃と強風が縦横無尽に多方へ散った。

大気は重く圧され、ともすれば際限なく弾き返され、常に流動しながら多彩に状態を変容させて暴れ回る。次第に譲らない裂破の溝は罅割れにも似た反発作用を強め、それが視覚及び体感可能レベルにまで顕在化していく。結果として現れたのは、冒険者の攻手であ

る三光弾に抗いきれず破裂した魔導砲側が、極明光の先頭部分を細分化して打ち振るうというものだった。
　出力係数で同位を示しても、安定感の上では劣る魔獣の無理な砲撃では、凝連結向上を遂げ強襲弾となったレリオの一撃には勝れない。不安定だったエネルギー塊は、より高次の結成力で固められる光弾に衝突部分を破壊されていき、砲撃という形態で照射されていた何割かを強制的に分離、無制御状態に陥れたのだ。湛えた魔力の総量は絶えず獅子本体から供給されていることから消滅もせず、指向性の束縛から放たれた分散出力は弱体化しながらも威力を保持したまま。それは目にも明らかな変質であり、強大な一条の光柱頭部分より根元を同に分け隔てられた幾筋もの光が、それぞれに鞭か、或いは触手の如く無軌道に蠢き撓(しな)る奇異な状態として認められた。
　三色の明光と黄金の破光が凌ぎを削る最中にあって、黄金から分かたれた光の帯が秩序なくのたうち回る。輝かしくありながら、それ故に不気味なうねりは空を裂き、床を叩き、躍り跳ねて猛威を揮った。魔力の触手は伸縮すら自在であり軌道予測も出来ない。短く分離空間周囲を回遊するものもあれば、何処までも伸びてアストライアメンバーを襲うものもある。
　激しい動きには、相対者の身を竦ませる速度と迫力があった。嫌悪感と根源的恐怖を誘発する蠢動ぶりも手伝って、正に怪異なる魔性そのもの。それらが一斉に戦(おのの)き、見上げる敵対者を襲い出す。
「うわっ！」
　狙うように注がれる光鞭の一打から、ノイウェルは悲鳴を上げて転げ逃れる。
　床面を打った帯は更に振れて、少年の頭上を刈り取るような動きで抜けていった。
「おいおい、男を狙った淫獣ショーじゃ客は取れねーって」
　軽口を叩きながらも必死に逃げ惑うスキンクを、数本の帯が多角的に襲う。
　軽快なステップと性格さながらにトリッキーな動きで攻撃を避け

てはいるが、軍服の端々は掠っただけで焼け散っている。一発でも直撃されたなら、セルシアの右腕とまではいかなくも、再起不能の末路は疑うべくもない。
「これは厄介だね」
舌打ち混じりにコンバットナイフを抜き放ち、アウロは迎撃に努める。
が、研ぎ澄まされたナイフの強靭な刃も、魔導砲の流れを組む触手は抑える事が出来なかった。切り裂くか、そうでなければ受けきろうとした矢先、光へ接触した数度目で白刃は融解してしまう。刃の持つ耐熱焦点温度を、無数の帯は凌駕しているのだ。
「うおぉ！？　やめろやめろ！」
武器の巨大さと重量が仇となり持って逃げられないレリオは、方々から迫る触手の群を巨砲の耐久力で堪えていた。
襲撃する光打があれば砲身を盾として回り込み、自身へのダメージをなんとか抑える。しかしロストアームも無敵ではない。次々叩き付けられる破壊鞭の応酬に随所が傷付き、着実に損傷は増加していった。とかく大きいだけに攻撃を受ける範囲も多く、レリオが身の守りに使えたとして所詮は時間稼ぎでしかないのは明白。氷の上で焚き火をしているようなものだろう。
各自が無遠慮な猛襲に晒され、反撃も出来ないまま回避行動へ終始する中で、エレーナとラグナにも当然と言わず攻撃は向いた。
「……邪魔くさい」
冷静に動きを見極め、最小限の行動で致命打を避けるのはラグナ。白衣の裾を翻し、柔軟な光鞭を紙一重で躱していく。
彼女の最大の武器は、威力の高い得物でも、魔法や超能力の類でもない。常人とは比べ物にならない膨大且つ圧倒的な経験である。ラグナは三千年の昔、彼の魔獣と同じ時代を生き、屍山血河を踏み越えてきた戦乱の申し子。戦う為の教育と数限りない実戦を経て、もはや現象の域にまで昇華された闘争の業は常軌を逸し、ある種完成された芸術と化している。伝説に歌われる終末戦争を駆け抜けて

きた彼女は、戦う術に於いて他の追随を許さない。過ごしてきた時間と積み重ねた経験は、どんな兵器にも勝る最強の武器として、ラグナの真髄へ染み付いていた。それほどでなければ、生き残ることなど出来無かったのだから。

そんな彼女にとって、凡百の戦徒が認識し難い魔力のうねりを見定めるなど造作もない。それが目に見えるほど強く実体化しているのなら尚更である。

「きゃぁぁぁっ！」

一方でエレーナは避ける事さえままならなかった。

優しく慎ましい性格から戦闘向きではなく、身体能力とて普通の女性と大差ない。独自の超能力（サイコメトリ）は持っているが、直接的な戦力へ還元へされるものでなく、あくまでサポートの域を出ない。例え芯が強くとも仲間が腹痛やらで倒れた段に慌てふためき、適切な処置を見誤る程度である。実質的な死の感触を傍に感じ、それ自体へ襲われたなら身が竦むのも当然といえた。

脚が震え、全身が硬直し、顔は強張る。周囲で不遜に蠢く触手の群へ囲まれて、エレーナは逃げるだけの気力すら失ってしまう。

「う、あぁ……」

半ば開かれた唇から零れるのは、恐怖と怯えから掠れた呻き。

満足に身動きの出来ない彼女を見下ろし、魔力鞭の一つがしなやかに動く。そのまま勢いをつけ、動けぬ獲物へと差し迫った。他の面子は皆、自分が逃げ惑うので精一杯だ。彼女に気を向けている余裕はない。エレーナとしても自分本位に救済を望む愚は犯さないが、避けねばという思考に反し、脚が固まって動かないという現実。彼女の動揺と畏怖など知る由もない触手は、凶暴な撓りで弾みをつけ、鋭い風きり音を響かせて打ち下ろされる。

（ルイさん……）

逃れ難い死の洗礼を目前として、エレーナは固く目を閉じた。

それと共に胸中へ浮かぶのは、遥か遠い昔に別れた幼馴染の姿。最期の瞬間に縋った初恋の相手は、記憶がおぼろげになりすぎて顔

も判然としない。代わり別の誰かが、霞がかった記憶の表層へ浮かんでくる。
それは――
「……？」
妙なことにどれだけ待っても体に痛みは走らなかった。激痛を期待している訳ではない。それでも来ると予想し、曲げようのない事実として認識していた衝撃は、不思議とまったく感じていない。
不審に思って恐る恐る目を開ける。瞼の裏の闇から色のある世界へと解放された瞳は、そこで意外なものを映し込んだ。
「霧川、さん？」
眼前にあったのは見慣れた顔。今し方、末期の記憶と浮かんだ相手のもの。褐色の肌と女性的な顔立ちをした、良く知る仲間のそれである。
エレーナはすぐに状況が理解出来ず、不思議そうに目を瞬いた。だが、それも一瞬。すぐに彼が身を呈して自分を護ってくれたのだと思い至る。
彼女の理解と殆ど同時に、禾槻の口から大量の血が吐き出された。赤黒い流液は滝の様に連なり、重力へ引かれて一直線に落下していく。少なくない吐血量から、エレーナを庇って肩代わりしたダメージの大きさが知れた。
「霧川さん！」
禾槻の体は急激に力を失い傾いた後、前倒しにエレーナへと寄り掛かってくる。細身の青年を咄嗟に抱き止めて叫ぶも、彼女の呼び声に反応はなかった。
二人分の体重を支えきれないエレーナは、禾槻を受け止めたまま床へと沈む。脚と臀部が揃って冷たい鋼板へ接したところで、彼女は青年の背中を見た。暴走する魔力の触手に容赦なく打たれたそこは、羽織が燃え落ち肌が露出している。皮膚は激しく爛れて半ば溶けており、黒く焦げて変色した筋肉には幾つもの醜い気泡が浮かぶ。蛋白質の焼ける強烈な臭いを発し、薄氷が熱湯に侵されるさながら

に今尚内肉の燃焼は進んでいた。
直撃の瞬間に炎を生み出し相殺を企図した為か、幸いにして脊髄までは傷付けていないようだ。それでも背面一帯は生々しく焼け崩れ、目を背けたくなる凄惨な有様である。いったいどれほどの痛みだったか。安易に想像すら出来ない。
「あ……霧川さん、しっかりしてください！　霧川さん！」
露となった損傷部に目を瞠りながらも、エレーナは必死になって呼びかける。
彼女の様子に気付いたラグナが、素早く二人の元へと駆け寄ってきた。禾槻の傷を見ても眉一つ動かさず、冷静な目で観察しつつ傍らへ跪く。傷は大きい。予断を許さない状況だ。速やかに設備の整った場所で手術を行う必要を感じるが、そんな場所も余裕もないのは周知の事実。ならばすべきは応急処置か。現状で取れる手など一つしかない。
救護班らしく診察と対処法の考案を的確に済ませ、ラグナはエレーナのポケットから小さなカプセルをさっさと取り出す。それと並行して禾槻の前髪を掴み、顔を上向けさせると、口の中にナノリペアを捻り込んだ。
「……霧川、飲め」
懇願とも命令ともつかない言葉少なの訴えは、しかし意識の消失によって応じられる気配がない。
眉間に僅かばかり皺を寄せると、ラグナは片手で拳を作った。それを禾槻の胸へ手加減なく打ち付ける。小声で「霧川のくせに生意気だ」と零していたのは、誰にも聞こえていない。
「がはっ！」
見舞われた一撃に咳き込んで、意識の戻った禾槻は口内のカプセルを吐き出そうとする。血の塊が少し飛んだが、ラグナは構うことなく即座に口内へ指を突っ込み、ナノリペアを押し込んだ。反射的に喉を震わせ、禾槻は自分の血液と治癒アイテムを一緒くたに飲み下す。

「……よし」
禾槻が回復剤を嚥下すると、ラグナは相手の口から指を引っこ抜いた。
人差し指と中指は、血の混じった唾液で濡れている。それを一瞥してから宙で払い、次はエレーナへと視線を向けた。
「霧川さん……うぅ……どうして……私は、こんな……ひどい……みんなが、また……」
「……落ち着く。霧川は死んでない」
ラグナが話しかけても、エレーナはまともな応対をしなかった。
何事かをうわ言の呟いて、さめざめと泣いている。どうも禾槻が目の前で倒れたことで、心的外傷（トラウマ）のようなものが精神深奥から溢れ出してしまったらしい。こういうものは幼少時の体験や記憶が根底にあるようだが、彼女の場合は果たしてなにか。
エレーナの過去など知らないラグナは、彼女がかつて父母含む一族全てを何も出来ないまま失い、己の無力に嘆き悲しんだことなど思いもよらない。そもそも興味とて然してないので、今はすべき事を行動へ移すのみだ。
考え付いたら早い。ラグナは俯いているエレーナの頬を、躊躇なく平手で打った。乾いた音が響き、彼女の端整な顔が横を向く。
「……呆けてる暇はない。君がしっかりする」
じわじわと熱を帯びてきた頬を押さえ、エレーナはゆっくりと正面へ向き直った。
ぶたれたことも理解出来ず、何が起こったのか分からないという顔でラグナを見る。呆然とする彼女へ、ラグナは表情を変えず淡々と指示を出した。
「……この白衣を破いて、包帯代わりに」
言いながら白衣を脱ぎ、ラグナはそれをエレーナへ渡した。加えてポケットから取り出した魔法石を、空いている右手に乗せて握らせる。
「……随分弱くなっているけど、まだ少しなら保つ。これで霧川と

自分を護ること」
未だに茫洋とした面差しのエレーナへ言い聞かせ、ラグナは腰を浮かせようとした。だがその手を不意に掴まれ、動きが止まる。
怪訝な顔で引き止め主を見ると、顔面蒼白になりながらも禾槻が腕を伸ばし、弱々しい視線を送っていた。
「っ、ラグナ」
「……なに」
「まだ……勝負はついてない、だろ？」
「……言われるまでもない」
掠れた声で問われるのへ、ラグナは平時の素っ気無さで返した。
その無愛想な文言に笑みを浮かべ、禾槻が手を離す。ラグナも早々に視線を切って、半死半生の負傷者から意識を外した。
傍から見たらなんとも味気のない問答である。意味の有無さえ窺えない。しかし二人にとっては充分だった。ラグナは禾槻の言いたい事を理解したし、禾槻はラグナが自分の意思を汲み取ってくれたのだと確信している。だからこその笑顔だ。
両者の間にあるのは、余人に思いも寄らぬ独特な友情の形。普段から軽口混じりに馬鹿をしている二人だが、それ故に絆めいたものを繋いでいた。性別や生き様や人生経験を越えて、双者が結ぶのは奇妙な信用と信頼である。
だからこそ、というべきなのか。ラグナは立ち去り際、エレーナの肩に手を置いて、彼女の耳元へ囁きかけた。
「……霧川を任せた」
何時ものそれと比べてほんの少しだけ優しいような、そうでもないような。微妙なニュアンスを含ませて、ラグナは言い残したあと離れていく。
「ラグナさん？」
その一言が決め手となったというわけでもないだろうが、我に返ったエレーナは急ぎ振り返った。
見るともうラグナは駆け出し、触手の群雨を掻い潜って巨大な銃

砲へと進んでいる。残された彼女は手中の魔法石を握り込み、禾槻へと視線を戻した。また意識を失ったのか、青年は瞼を閉じて動かない。浅い呼吸だけを繰り返し沈黙する顔は、苦痛と満足さが半々である。

それこそ死んだように眠る禾槻を見詰めつつ、渡された白衣を裾側から破り始めた。布を裂く鋭い音が響く中、エレーナの頬を大粒の涙が伝う。透明な雫は白皙の肌を滑り、顎先に溜まって一つ滴る。涙の粒は禾槻の額へ落ちて、音もなく弾けた。

「……逃げるな。戦え」

定位置から動かない巨砲へ駆け寄り、ラグナは漆黒の回りを忙しなく動く狙撃手へと命じる。

呼ばれた方は降った声に驚き半分で振り返り、周囲でうねる光の群を指差し叫んだ。

「いや、俺もそうしたいのは山々なんだけどさ。これは無理だって。マジでヤバイって」

言いながらも足元を打った光鞭に怯み、低く喚いて後ろへ跳ぶ。

その醜態を冷たい眼差しで見据えつつ、ラグナは近くへ位置取る仲間達へ相次いで号令を飛ばした。

「……お面、艦長。こっちが体勢を整えるまでなんとか護れ」

「生憎とネタ切れなんだがねー。手元に残ってるのは包丁ぐらいなもんだが」

「範囲は狭いが、耐久力の高さで凌いでみるぞ。『千連たる魍魎の檻、角牙（かくが）に嘲る堅鱗（けんりん）を以て。遮る覇猛の並びへ従い、我が意を忠とし傅（かしず）き揃え。相克を穿つ、固き守りを此処に』」

懐から刃渡りの長い包丁を取り出して構えてみるスキンク。それを余所に、ノイウェルは何度目かの詠唱で魔法を紡ぐ。

少年の掌には薄く狭い小さな六角形が生まれ、その淡く光る盾は襲い来る触手を辛うじて受け止めた。

「艦長、四歩右から新手です。次は前へ五歩。ほい、左三歩。右斜め四十五度からも来ますぜ」

「えーい、この！　余は負けぬぞ。皆にもこれ以上はやらせはせん」
直接的に対処する術を持たないスキンクは、向かい来る触手の位置を割り出してノイウェルに教える。これを聞いた少年は自前の魔法盾を使い、自ら襲撃の矢面に立って弾いていった。
「……片翼、手を貸して」
「あいよ」
ラグナは片翼の老兵を呼び寄せて、レリオの作ったロストアームを左方から支えさせる。自身は右側から漆黒の砲身に手を触れさせた。
「もう一度撃つのか」
「……そう。いいから、射撃準備に入って」
ノイウェル達の奮戦によって得られた一時的な安全で、レリオは再度トリガーを掴む位置へ落ち着く。スコープを覗くと、前方では未だに先刻撃った光弾と魔獣の黄金砲が激突したまま争っている。一進一退の膠着状態を維持しており、勝利の目はまだ見られない。
「今撃っても魔法と超能力（サイキック）がない分、威力は落ちるよ。後ろから加えようにも弱弾じゃ、あの触手共に叩き落されたらひとたまりもない」
流石に場数を踏んでいるだけはあり、アウロの判断は混乱した状況にあっても正確である。しかして彼女の訴えは警告の類でなく、これからラグナがしようとする事を予期しての確認という意味合いが強い。この辺りも年の功か。
よってラグナの口頭解説は、いまいち考えが及んでいない態のレリオへ向けた講釈だった。
「……ロストアームの使い方が中途半端。これは精神力で威力が増す。三人分の力で、一気に後押しする」
必要最低限の事だけ述べて、ラグナは意識を切り替える。頭の中で古代遺物の構造を思い描き、触れた手を介して砲身へ意志を注ぎ込む。
エレーナのように特殊能力（サイコメトリ）を用いずとも、ロストアームのことは

熟知している。三千年前、戦っていた相手も自分も同様の装備を用いていたのだから。ラグナはロストアーム全盛の時代にそれを使役した本当の使い手だ。現代人のように完全にメカニズムが分からないまま、使えるから使っているのとは訳が違う。

自分はかつて嫌になるほど戦った。だから今は精々楽をしてやる。そう思って生きてきたが、時には例外だってある。自分独り此処から逃げることはやろうと思えば出来るけれど、それじゃあ折角面白くなってきた人生が、またつまらないのに逆戻りだ。退屈な日々など御免被る。

なによりも、思うことが一つ。

「……こいつらは、こんな所で死ぬには上等すぎる」

ロストアームの中心核へ意識を直結させ、セーフティの強制解除を採択。個人兵器を複数共用システムに書き換える。

「……外部供給連結を起動。主幹コンポーサー出力上昇。対外耐衝撃機構オン。第一、第二、第三安全弁解放。ジェネレーター反応機及び最終安全装置をパージ。リミッター解除。モード選択、オーバーロード発動」

ラグナの言葉一つ一つに応じて、漆黒の巨砲が新たな活動を開始した。三千年間使われることのなかった機能が呼び起こされ、眠り続けた本来の性能が次々と励起する。

闇を飲む外観には赤い光線が網目へ走り、全体では再び雷光が直走った。電子の輝きは稲妻然として湧き起こり、長大な砲身の上で躍り回る。次第に雷線は重なり合い、シリンダーへと集中していく。回転弾倉はすぐに電光の蛇玉となって、先頃以上のエネルギーを蓄え始めた。

甲高い駆動音を奥底から発しつつ、集約される強大な力に外気も揺れる。微細な振動は逆巻く猛風となり、ラグナ達の髪を靡かす。同時に明滅する輝光の先で、組み上げられた破滅の力が碧緑を帯び定まった。

「す、すげぇ。これがロストアームなのか」

先の数倍増しという尋常ならざる出力をまじかに見て、レリオは嬉々とした感嘆を露とする。予想を遥かに超えるパワーの高ぶりに興奮も最高潮へ達していた。
「こりゃ、ちょっと冗談では済まないレベルだよ。こんなのがゴロゴロしてたんなら、古代文明が滅ぶのも道理だね」
レリオとは対照的に、強過ぎる力へアウロは危機感を抱く。
確かに大きく有用かもしれないが、個人が持つには少々度を超している。使い方を熟知している一人を加え、三人掛かりでこれなら大昔はどうだというのか。想像するだに恐ろしい。
「……各々意見はあると思う。でも今は」
「ああ、分かってるよ。アイツを退けるのが目下の仕事さ。レリオさん、一丁決めておくれ」
アウロの激励に、レリオは親指を立てて応じた。
スコープから見る狙いは初弾の直線状。空中で停滞し、魔導砲と対立抵抗する正に争点。トリガーを握る右腕にも、知らず力が込められていく。
「これでぇェェ、終わりだァァァッ！」
高らかな宣言を咆声として、レリオは腕全体で引き金を引いた。
輪胴が回転する。蓄積されたエネルギーが射出機構に乗り、砲身の内部を先端目掛けて突き進む。暗く巨大な穴には瞬時に碧の輝きが灯り、奥から迫る光が周囲を照らして発射された。
轟音。直下型の地震を想起させる大響音が迸り、世界が前後へ撹拌される。衝撃の暴風が三人の体を殴打して、見えない圧力に体勢を崩させた。時を同じく巨砲の末端から斜め上方へ制御棒が突出し、堅牢な構成素材の一部が開閉する。開かれたのは縦に長い通気孔で、横へ五列並びになるそこから内部冷却用の凍風が排出された。
碧光は先の倍は大きく、速度も数段上回っている。先追う形で進軍し、途上に塞がる触手の群をいとも容易く突き破った。光の帯は全てが軽く屠られて、僅かな残り香さえ留めずに霧散霧消。造作もない会心の疾走はけして弱まらず、目的地への到着は瞬きよりも幾

段早い。
黄金と拮抗状態の三光へ背後から迫った碧弾は、これを取り込み一気に速力と威力を増大させる。大きさも後発から一回り向上し、進行力に至っては桁が違った。それまでの苦戦が嘘の様に行軍を再開し、巨大な魔導砲を力任せに叩き壊していく。眩い極光を押し返し、外縁から次々と粉砕して魔力を散らせ、絶対総量など急速に減衰させた。
形成は逆転。輝く魔力の奔流は、より高次の火力に屈して後退し、もはや押し返す余力は見られない。碧弾も手心など加えはせず、ただ己に有す力の限りに目標へと突き進む。あれよと言う間に魔導砲は照射元へと引き戻され、これを圧して迫った碧光は、遂に魔獣の大口内へと飛び込んだ。
けれど完全には通らない。口腔に侵入したまではいいが、そこから先に進まなくなった。鬣の再生に伴う威力の上昇がここにきて起こり、吐き出される魔導砲が冒険者達の一弾と鬩ぎ合う。またしても同等力による抵抗の袋小路に迷い込み、二つの光は動きを止めた。
「ああ、くそ！　後一歩だっていうのに」
悔しげに歯噛みして、レリオは怒声を噴き立てた。今度こそ勝利を確信しただけに、その口惜しさもひとしおである。
「もう一度、撃てぬのか？」
「どうやら砲の方が限界みたいでね。急に大きな力を使わせたから、ちょいと調子が悪いらしい」
ノイウェルの問い掛けに応じながら、アウロは漆黒の巨砲へ顎をしゃくる。
防毒面と少年艦長がつられて顔を向けた先では、渾身の砲撃を終えたロストアームが光の粒子へ変じていた。
無数の粒へ分解された輝きは、そのまま一つ所に集まって小さくまとまり収縮する。二人の目の前で巨大な砲は始まりの球状へ戻ってしまった。
「やれやれだぜ。まるで長蛇の列に並んで買おうとしてた人気映画

の前売り券が、自分の目の前で売り切れたような気分だな」
大仰に肩をすくめたスキンクは、実感のこもった台詞に溜息を併せ吐く。その足で数歩進み出て腰を屈め、すっかり小さくなったロストアームを拾い上げた。片手に収まる携行型万能兵器を二、三度掌で転がすと、持ち主であるレリオへ向かって投げ渡す。
「……全力は尽くした」
ラグナは誰にともなく呟いて、エレーナ達の方を見た。渡した白衣は既に原型を失って、禾槻の背と胸とを覆い巻く包帯となっている。青年は未だ倒れたままだが、エレーナにも別段怪我はないようだ。
禾槻の頭を抱えるようにして寄り添い座るエレーナは、俯いたままで動かない。それは親鳥が雛を護って周囲に牽制するような雰囲気で、ラグナはそんな姿に口の端を若干緩ませる。
出来ることなら助けてやりたいところだが、如何せん万策尽きた。このまま獅子の体が完全に再生すれば、遠からず決死の一撃も破られるだろう。もう各員に戦闘を続ける力は残っていない。敵を倒しきる手段もない現状では、出来て敗走が関の山だ。それとて負傷者を抱えた状態で、どこまで上手く逃げ切れるか。
同じ様な考えに至る面々が揃って表情を曇らせる最中、離れた場所からリリナの声が聞こえた。
「セルシア様」
そろそろ魔獣の体動が復活し、押さえ付けるのも難しくなってきた時である。リリナは巨躯の背上から、緩慢な動作ながら自力で起き上がるセルシアを見た。
右腕を喪失してこそいるが、痛覚がないお陰で呻き悶えることもない。自我や思考能力も復帰している。一度意識が完全に飛んでから、少しでも躯体を休ませられた為だろうか。セルシアが考えていた以上に、ハウエンツァのメンテナンスは行き届いていたらしい。
ゆっくりと立ち上がった彼女は、眼前に聳える巨獣の威容を仰ぎ見た。次いで口内に於いて反発し合う二つの力を確認する。ちらり

と振り返れば、随分と疲弊した仲間達の姿も認められた。行動前の作戦を思い出して考えれば、何が起こったのかを大まかに想像する事は難しくない。

セルシアはもう一度獅子を見上げると、軋む体を引き摺りながら歩き始める。一歩一歩確実に近付きながら、巨大な口の前へと回り込んだ。その間に残った左腕を握り締め、固く拳を作り上げた。

程無く怪物の正面は立ち戻ったセルシアは、左腕を深く引き、腰溜めに構えて正面を睨む。双眸に鬼火めいた闘志を滾らせ、脚を前後に軽く開いた。腰を浅く落とす。全身の体重を掛け、内在する全ての力を左拳へ集中させる。

無骨なガントレットが低く唸った。内部機構が働いて、高電磁シールドに似た性質の攻勢フィールドが拳を包む。やはり実稼動時間が極端に短い弊害を持つも、短期的に対消滅型のエネルギー障壁を局所展開させ、凄まじい破壊力を生み出す近接武装。ハウエンツァ謹製の電磁域発生ガントレットが起動する。

「私達は、負けなどしないッ！！」

セルシアが腹の底から全力で吼えた。同時に全身のバネで上半身を激しく捻り、全ての束縛から解放された剛拳を異形の口へと叩き込む。

繰り出された左腕は碧の光が突き刺さり、最後の後押しをそれへ加えた。篭手ごと光へ飲まれた腕が、荒ぶる魔力と超能力、そして意志と想いの渦中で揉まれ、圧されて爆発する。ガントレットが直接の呼び水であるが、これを備えた機械の腕は粉微塵に砕け散り、生まれた反動でセルシア自身は後ろへ飛んだ。

爆炎が碧弾の中で弾け、組み合わされた火力が最後の融合を実現させた。それ自体が起爆剤となり、新たな火力の統合から碧は更に一回りも強くなる。とうとう敵の魔力を押し切って、口の中へ、喉の先へ、体の奥へ、あらゆる障害を踏破して急進した。

内奥を一気に駆ける。もはや止まる筈もない。全ての体内機関を粉砕し、破滅させ、中心へ潜む制御核を貫いた。再生さえも出来な

いほどに、存在全てを完全に消し去り散らす。碧光は核の残骸一つ余さず飲み込み蒸発させ、高速度のまま背中を食い破る。骨も肉皮も打ち砕き、塞がる一切穿って突破した。

そうして上がったのは、花火を彷彿とさせる盛大な炸裂音。全員の聴覚を劈(つんざ)いて、彼方に天の頂きまでへ轟き渡る。

尾を引いた残響が各自の耳に留まること数秒。峻烈とした強音が次第に治まっていくと、獅子の巨体に変化が現れ始めた。金色の体毛は輝きを失い、色素そのものが薄まり消えてしまう。次第に灰色と化していき、鬣も同様に沈んだ色合いへ変容を遂げた。

それを追うように鋭利な爪が先端から砕けだし、砂作りの楼閣が果てるさながらに崩壊していく。爪が失せると次は前後肢が同じ状態となり、無数の灰へと分解されて降り積もる。あれほど猛威を振るった王獣の肢は見る影もなく、強靭さの窺えない無色灰粉となって元の形を喪失させた。

巨体を支える四肢が失せたことで、魔獣の体躯は大きく傾き側腹から床面へと落ちて沈む。その衝撃が全身へ響くことで、巨獣は一瞬にして膨大な灰へと姿を変え崩れ去った。鬣の一本、牙の一欠けら、黒い体液の雫すら残さず、一切合切全てが等しく灰となって山を築く。

生体金属を統括制御していたコアが破壊されたことで、魔獣を構成していた全ての要素が機能停止に陥った結果だった。長らく稼動していた装置は自らを維持出来なくなり、何の力も持たないただの灰となってしまう。獅子の巨体に見合う大量の灰だけを残し、数秒前までの面影は完全に消えている。

崩壊する一方の灰山から跳んで離れたのは、その上に立って最後まで魔獣を抑えていたリリナだ。不安定を通り越し踏む事さえ困難となった足場でも、抜群の運動神経で軽やかな後方跳躍を決め、鋼板の上へと華麗に降り立つ。メイドというよりも猫科の猛獣に似た、しなやかで洗練された動きだった。

彼女が地に足をつけて真っ先に捜したのは、当然ながら主君ノイ

ウェルである。素早く視線を動かすと目当ての蒼髪は仰向けに倒れたセルシアの傍らに来ていた。握る巨剣が光の粒子に立ち返り、元々の小球と貸し与えられた長剣とに戻る最中、リリナは二人の元へと足早に向かう。
「ノイウェル様、お怪我は御座いませんか？」
「おお、リリナ。余は無事だ。そなたも良くやってくれた。見事な働きであったぞ」
「勿体無い御言葉です」
自分を見上げる少年のはにかむ笑顔に、リリナは恭しく頭を垂れた。まずはノイウェルが無事で、内心胸を撫で下ろす。
続いてセルシアへと視線を移した。彼女は両腕を失った痛ましい姿ながら、意識は明瞭としているようだ。やってきたリリナへも顔を向け、ぎこちない微笑みを浮かべる。
「セルシア様、随分と手酷くやられましたね」
「いえ、半分は自分でやったようなものなので」
「痛くはないのか？　大丈夫か？」
心配そうに顔を覗き込んでくるノイウェルへ、セルシアは緩やかな首肯で応じた。
「腕がないという感覚はありますが、痛覚はありませんから。自分自身、あまりに何ともないので拍子抜けしているぐらいです」
「そうか。それなら少しはマシであるな」
安堵の息を吐くノイウェルを見て、セルシアも自然と顔を綻ばせる。だがすぐに真面目な顔となり、主従関係の二人を交互に見た。
「私は、皆さんのお役に立てましたか？」
真剣な口調で問う。自分の心を、人間性を救ってくれた仲間達に、自身は少しでも貢献出来たのか。常に胸の内の奥底について離れない疑念が、言葉となって解を求める。
これを聞いたノイウェルとリリナは互いに顔を見合わせ、同時に頷いた。
「無論です。充分すぎると言っても過言ではありません」

「役立つどころか、決め手になってくれたではないか。そなたに限らず、この場に居る者、今艦に残っている者、誰一人欠けても余達の勝利はなかったであろう。余達は互いに助け、助けられる仲間なのだ。何も気負う必要などないぞ」
ノイウェルとリリナの声を聞いて、セルシアは暫し目を丸くした。
彼女に与えられたのは最大級の賞賛であり、そこまでの評価が与えられるとは正直思っていなかったからだ。特にノイウェルの言葉は、自分の中にある一線を見透かされたようでもあり、驚きは尚強い。
けれどそれを超えて起こる喜びは、これまた思った以上に大きかった。改めて認められた気がして、どこかにあった自分自身の引け目が取り払われるのを感じる。
「そうですか。良かった」
胸中の喜びは面上にも伝播して、何年ぶりになるか、意識せず自然な笑顔が浮かんでいた。

「いよぉぉぉし！　勝ったぁぁぁッ！」
大歓声と共に拳を天に突き上げ、レリオは全身で喜びを表している。達成感と爽快感の合わさる明朗な顔は子供のように無邪気で、心底からの嬉しさに満ち満ちていた。
苦戦を強いられた分だけ反動として起こる勝利の喜びは、生半可なものではない。ロストアームに精神力を吸い尽くされていなければ、飛び上がって快哉を上げていたところだろう。
すぐ近くではスキンクがブブゼラを吹いている。何処から取り出したのかは、相変わらず判然としない。防毒面を僅かにずらし、覗いた口先へと楽器を突っ込み騒ぎ通す。不快さと紙一重の景気いい音色が、小躍りと共に上下へ揺れた。
「ここまでの強敵と戦ったのは随分と久しぶりだよ。一個中隊を相手するより骨が折れる」
レリオ達の馬鹿騒ぎを見ながら苦笑して、アウロは床へと腰を下

ろした。昔の記憶を引っ張りながら、懐よりアルミ製の酒瓶を取り出す。激戦内でも奇跡的に壊れずすんだようだ。
その栓を捻って外し、祝杯よろしく一気に呷った。非常に強いアルコールが喉を滑り、五臓六腑へ染み渡る。勝利という華が添えられ殊更に美酒となった一杯へ、老兵は満足そうに破顔した。

「まだ、目を覚まさないようです」
近付いたラグナを見上げて、エレーナは力なく微笑んだ。不安と自責が根幹にある心労が、平時に比べて酷い状態の顔から見て取れる。
ラグナはそれへ頓着せず、エレーナの膝に頭を乗せられ、眠り続ける禾槻を一瞥した。
「……ナノリペアは効いてる。傷が深いから、回復には少し時間が掛かるだけ」
何時もどおり表情もなく、感情の起伏が薄い言葉は単なる状況説明に聞こえる。特別な意図があるようにも思えないが。
「……霧川は存外にしぶとい。往生際も悪い。簡単に死ぬほど軟弱じゃない」
あまりに言葉足らずと思ったのか、ラグナは変わらぬ声調でもう一言を加えた。分かり難いが、彼女なりにエレーナを元気付けるつもりだったようだ。
一方のエレーナは相手の気遣いをそつなく汲んで、仄かな笑みを返す。消え入りそうなその儚さは、ともすれば彼女の方が致命傷を負っているかのよう。
「どうして、私を庇ったりしたんでしょうね。戦力にもならないのに付いてきて、足手まといでしかないのに」
俯いて零される言葉は、果たして誰に向けたものなのか。自嘲を含んだ声音には、後悔と自己への糾弾が等分に感じられる。
ラグナは慰めなどしない。彼女の言葉を遮ることも、撤回を求めることもしない。纏う雰囲気に擁護の色とて皆無。心中の知れぬ冷

めた目でエレーナを眺め、次に禾槻へと視線を向ける。
「……考えるほど複雑な奴じゃない。行動原理は単純。大事なものは失くしたくない、どうせそれだけ」
温かみもなければ素っ気もなく、思いの丈など微塵も覗かない簡素な言葉。何も考えていないのか、或いは深く考えているのか。それは最初からエレーナに分からない。
ただ彼女は与えられた意見を自分の中に飲み込んで、ゆっくりと咀嚼する。穿った見方はせず、ただ言葉通りに受け取って理解へ回した。
「禾槻さん……」
膝の上に置かれた顔を真上から見下ろして、エレーナはそっと呟く。褐色の頬に優しく触れ、掌全体で柔らかく撫で擦る。
「う、ぅ〜ん……むにゃむにゃ……ラグナ、駄目だよ。百歩譲って仮にも女の子に分類されるのに、鼻から饂飩なんて食べちゃ。その顔は酷すぎるよ。えぇ？　そんなんで公衆の面前に出るの？　それはマズイんじゃないかな。本気だったら僕、友達辞めるからね。あ、でも絵づら的には凄く面白いよね。折角だから、写真取っておこうか……むにゃむにゃ……」
どうやら気を失って夢を見ているらしい禾槻が、何事か寝言を口にしている。割と鮮明なので、近くの二人は余さず聞くことが出来たのだが。
エレーナは恐る恐るラグナの方へ顔を向けた。確認してみた彼女の顔は無表情である。普段と同じ。いや、普段以上に。
対面から注がれる仲間の視線など知らぬかのよう、ラグナは右手に拳を作った。それをすかさず、禾槻の脇腹へ深々と突き刺し捻る。
「ぐはっ！　そこはかとなく片腹痛し！」
突然の痛撃に目を見開き、禾槻の意識が悲鳴と共に覚醒した。反射か衝撃か、体は『く』の字に曲がっている。
「……お前は一度、大霊界に逝ってこい」

探査、『謎の設計図』と『神々の華』について（前書き）

作者：蠱毒成長中

探査、『謎の設計図』と『神々の華』について

―前回より・遺跡内部―

ふざけた性能を誇り破壊の限りを尽くした巨獣を塵に返した我等がアストライア一行は、探査を兼ねての休憩時間に入っていた。

疲弊したレリオは岩壁に背を持たれて休み、深手を負った禾槻はナノリペアによる回復に依存する為一応エレーナとラグナを付き添いに休憩中。

両の腕を失ったセルシアは、元より片翼のアウロと互いの戦績を称え有ったり、決死の献身を決行した禾槻は実に男前だとか、スキンクはやっぱり無駄が多いだとかと語らい有っている。

一方のノイウェルは、側近リリナと司書スキンクを連れて遺跡の調査に向かっていた。

―遺跡深奥―

『単刀直入に言う。この施設は終末戦争末期頃に稼働してた魔力帰還研究所だ』

モバイルパソコンの通信機能で画面越しに喋るのは、研究班のハウエンツァ・パルパト。

『襲ってきたバケモンは防衛システムで間違い無ェ。

多分「部外者は見付け次第殺せ」とかそんなバカ丸出しの命令で動いてやがったんだろうぜ。

全く……まさに戦時中の人間共が考えそうな事だぜ。クサレ脳ミソなりにも学者だった奴らがよォ…。

俺様ならもっと高度な作戦を組み込んでやるぜ』

等と言う雄エルフに、透かさずスキンクが口を挟む。

「茶を出すとか？」

『はァ！？オメー何バカな事――「ガソリンの。更にそこへ放電機構を仕組んだ茶菓子を食わせて焼き殺すんでしょう？」――……そこ、せめて毒とかじゃね？』

スキンクが言いだした何とも言えない作戦に、研究者はかなり退き気味だった。

『まぁ兎に角、戦時中ともなりゃ相当なお宝が眠ってる筈だ。見付けた分は絶対ェ全部持ち帰れ。良いか？これは命令だ。もししくじりやがったら――「剥かれて出鱈目に縛られ宙吊りの挙げ句全身に冒涜的な落書きされて〇〇に待ち針でも刺されたりします？」――んな趣味ねぇわ！じゃなくてな――「〇の中辺りに生きたヤツメウナギか束ねた木乃伊の手足でもブチ込まれるんですか？」――テメェん中で俺はどんなキャラになってんだよ！』

（※〇の中には剣戟音が入るものとして頂きたい）

スキンクの妄言で加速度的にペースを崩されていくハウエンツァ。一方それを見届けるノイウェルとリリナはというと、

「スキンクめ、なんかすごいのう。余は兎も角リリナさえもあれだけ扱いに苦戦するハウエンツァをああも自分のペースに乗せておる。というかリリナ、余の両耳から手を離してくれぬか？スキンクの声がよう聞き取れぬ」

「もう暫くお待ち下さいませ、ノイウェル様」

「うむ。リリナがそう言うのなら待つのは構わぬが、何故にこの様

な事を？」
「激戦を超えて尚、私が今もこうしてノイウェル様にお仕え出来ているという幸せを感じていたいのです」
その後、スキンクのペースに飲まれて疲弊したハウエンツァは通信を強制切断。
探査は二手に分かれて続行された。

―ルート：艦長とメイド―

遺跡深奥を進むノイウェルとリリナ。
一応脅威となる存在は粗方排除してあるが、それでもまだ何が居るか判ったものではない。

「ノイウェル様、お気を付け下さい。この上怪我でもされたら私の生存価値が急落します」
「リリナよ、そう案ずるでない。余とて腕っ節はそう強くもないが、これでもアストライアの艦長なのだ。
そう簡単に死んで堪るものか」

適当に語らいながら調査を進める二人が調べているのは、嘗て資料室として用いられていたと推測できる部屋だった。
金属製の棚には赤錆が広がり、紙の資料はその大部分をシミやシバンムシに食害されており、どれも原型を留めていない。
ふとノイウェルが足下を見れば、名も知らぬ蟲達が乾いた床面を這い回る。
「（こんなにも冷たい空気の中で、よくも生きて居るものだな…）」

見上げれば、棚は高い天井まで続いているのが判る。
ボタン一つで望む資料を手に取れるような機械的な設備らしいが、エネルギー源の無い今となってはそれも単なる棚でしかない。
しかもその棚の中身もほぼ全てボロボロとあっては、何とも言えない気分になってしまうのが人情というものである。

「（当時この建物を使っておった者達は、どんな事を思い、願っていたのであろうな……）」

ノイウェルが感慨に浸っていると、リリナが声をかけてきた。
「ノイウェル様、此方へ」
「うむ。どうしたのだ？」
リリナに呼ばれたノイウェルは彼女の元へ小走りで駆け寄る。
「これをご覧下さい」

リリナが指し示したのは、樹脂と思しき透明の板材に刻まれたレーザー加工の線と、その板材に挟まれるようにして封入された書類であった。
レーザー加工の線は複雑怪奇な直線と曲線、そして数字や様々な単位・製図器号を描いており、それは一見設計図に見えた。
板材は金属の壁面に埋め込まれ、更に１２本の太いリベットで堅く打ち付けられているらしく、簡単には取り外せない。

「これは…何だ？」
「この設計図のようなものに関しては皆目検討も尽きませんが、此方の書類が戦時中の公用語と思しき言語で綴られた研究報告書と思われます」
「そうか……では、ハウエンツァへの土産にこれを持ち帰るとしよう」
「えぇ。それが妥当でしょうね」

「しかし困った……どうやって取り外せば良いのだ？」

ノイウェルとリリナは頭を抱えた。

―ルート：トカゲ―

「研究室だってのは判ってんだ。判ってんだよ。
問題があるとすりゃあ、ネタの見当が今一つかねぇって事だが…」

スキンクは再び調査の結果獲得した書類（特殊な金庫に保存されていた為食害を受けなかったもの）に目を通した。

「この頃に使われてた文字の解読ならある程度は出来る。母さんが教えてくれたからな」
スキンクは懐から小さくも分厚い本を取り出し、そのページを捲る。
これこそは彼が母・楠木雅子から少年時代に貰い受けてからというもの、もう２０年近く愛用している古語辞典だった。

「っとー何々…神……植物…いや、これは寧ろ華か？
で、この神が複数形として、タイトルは差詰め『神々の華』ってか」

スキンクは改めて周囲を見渡すが、並んでいるのは古びた硝子の円筒や様々な機械、そしてメスや注射器、鉗子等の医療器具ばかり。
植物学の研究にしてはどうも不自然である。

「こりゃどう見ても医学か動物学の研究だよなぁ…あの円筒も人間押し込むぐれぇなら不自由はしねぇだろうし……」

スキンクは再び翻訳に取りかかる。
頑張って訳してみればその文面は確かに、医学や動物学を思わせる

内容のものだった。

「解剖…遺伝子操作…移植……成る程、医療技術かクローニングの研究でもしてたのか？」

軽い休憩を挟みながら尚も翻訳を進めるスキンクだったが、思わぬ壁にぶち当たってしまう。

独特な綴りをしているが為に読もうにも読めず、また辞書にも一切載っていないのである。

「…こいつぁ参ったな。

どれ、ちィとばかし本部にメールで送るか」

スキンクはモバイルパソコンのメール機能で謎の古代単語についての情報を本部のハウエンツァに送りつけ、解読を依頼した。

無論あのハウエンツァ相手に普通の依頼など通るはずがない事を知っているスキンクは、独自の文体で彼の精神を巧みに操る事を思い付き、実行に移す。

そしてその結果、ハウエンツァからの返信には、謎めいた単語の意味が記されていた。

「成る程な……この謎めいた単語は全部固有名詞だったのか。

しかもどれも、３０００年以上前の神話で語られたロクでもねぇ神と来てる。

『神々の華』って計画は、コイツ等を地球上に呼び込む計画だったのか？」

謎を解きながら、スキンクは更に翻訳を進めていく。

「神々……12…表……体現？
……魔術……科学……共に、立てる…いや、此処は『両立』か？
つまり、『魔術と科学の両立』で……『12神々を体現する』と。
あ、ここのコレは『為に』か？」

スキンクが翻訳を続けた結果、以下の情報が得られた。

・この資料は『神々の華』という計画について記録したものである。
・計画は極秘裏に行われており、部署そのものの認知度が無いに等しい程だった。
・その概要とは、高等魔術と最新鋭の科学技術を駆使し12柱の『旧支配者』の力を引き継ぐ者を人造するという事である。
・『旧支配者』の力は、古代魔術を昇華させた技術により高純度の魔力結晶体―『素体』―に封じ込められる。
・素体は自我を持ち自らの意志で動き回り、自らの力を行使すべき生命体を模索・選別する。
・素体に選ばれるにはそれぞれ異なる性質・資質が必要であり、これを持たない者は素体に選ばれず、拒絶される。
・この計画ではその難点を完璧にクリアする為、素体に選ばれる者をも人為的に創り出す事で解決しようとしたらしい。
・しかし、計画は失敗に終わった。
・計画の要となる人造生命体は時期こそバラバラだったが最終的に全て死滅。その上、素体も一つを残して保有容器から姿を消した。

「…そうか…人造有機生命体か……遺伝子操作で人為的に創り出した生命体と高純度の魔力結晶体を同化させ、神の力を持つ兵士を創り出そうって算段だった訳だな…？」

手に入れた資料を抱えたスキンクは、改めて壁面にそそり断つ硝子の円柱の観察を始める。

「資料にはそれぞれエンブレムがあった。神一柱につき、一つのエンブレム。
この紫色した小さな円の集合体みてぇのが、丁度１２番目のヨグ＝ソトース。
その右隣にある白い戯画的なヒトガタが１１番目のイタクァ。
どっちも素体を入れておく機械がぶっ壊れてやがる。中は……当然の如く空だな。

次は黄緑の蜘蛛。こりゃアトラック・ナチャで間違い無ぇ。
その次が黒い蛇で、コイツはイグのエンブレムだろうな。
そん次にあるこの黄色い何とも言えねぇ生き物らしいヤツは…順番からしてガタソノアで良いよな？
隣は灰色いしたサルの乾燥標本みてぇなヤツか。これは……クァチル・ウタヌスって訳だ。
オレンジ色したヒキガエルはツァトゥグァ、更にその次の青い魚っぽいのがダゴン、緑色の触手みたいなヤツはナイアルラトホテップだろうな。
赤い火の玉はクトゥグァで、深い青色をした蛸のエンブレムはクルウルウ、そんでもって…」

スキンクは最後の円筒の前に立つ。

「ＣＤの裏麺みてぇな虹色で手足の生えたダルマは、イゴールナクのエンブレムだ。
ここだけ足下の機械が無事な所を見ると、中身も残ってそうだよなァ…」

スキンクは懐から長剣を取り出し、慣れた手つきで機械のフタの接合部を破壊しフタをこじ開ける。
小細工中心の戦闘スタイルを取るスキンクだが、接近戦をこなすために腕力もかなり高い。
というか、古藤にそう設計されていたりするのである。

スキンクが機械の中を覗き込めば、其処には大きな岩石に似た物体が安置されていた。
スキンクは機械の中へ手を入れ、それを手にとってみる。
スキンクの大手でもかなり余る程の大きさをしたそれは、肥大化した緑鉛鉱の結晶のような見た目をしていたが、スキンクが知る限りでは緑鉛鉱の結晶はここまで軽くは無かった筈だった。

「……こう言うのは普通持ち帰って調べるモンだが、割って中身を確かめてみるか」

スキンクは玄翁とタガネを取り出し、結晶にタガネを突き立てて其処へ玄翁を叩き込んでみた。

ゴッ

軽い一発のつもりだったが、結晶は何と一瞬にして粉々に砕け散ってしまった。

「っあッレぁ！？何だェオイ！脆いってレヴェルじゃねーぞ！？今の威力じゃダイヤモンドでも砕けねーって！」
驚き慌てふためくスキンクだったが、砕け散った結晶の異変はまだ終わらない。
今度はその結晶から、油のような液体が流れ出ている。というか、

石が液体に変わっている。
更に液体は空中で集結し、掌大をした球状の半固体（ゲル）となった。

「……！？」

更にそれがゆっくりと床面に降下し重力により楕円形となると、その表面には点のみの目と思しきものが二つ、そして波線のみの口に見えなくもないようなものが一つ形成された。

「……フ〇バー？」

スキンクは、嘗て母から聞いたことのある古代のマイナーな神話のタイトルを口にした。
と、その時。

『プルー！！』

楕円形の半固体はそんな間の抜けたような甲高い鳴き声を上げると、何かを覚ったように身体を振るわせる、凄まじい速度で遺跡内を跳ね回り忽ち姿を消してしまった。

「……心亡くし忙の字、心荒れて慌の字とは言い得て妙だな。
奴は心を持ってるかどうかも不鮮明なもんだから、発作的に忙しなく慌てちまうわけだぜ。
まぁ良い。ゆっくり追い掛けるか」

―同時刻・ルート：メイドと艦長―

「ううむ。それにしてもどうしたものか」

「樹脂板、リベット共に対魔術素材です。ノイウェル様の魔法でも取り外すのは不可能です」
「そうか…ではリリナよ、そなたのナイフではどうだ？」
「残念ながら不可能かと。刃の厚さや長さが足りません。かと言って、この金属板の壁ごと切り抜くには刃が薄すぎます。もっと大きく強靭な刃物でもあれば話は別ですが、私のナイフは暗殺や投擲を目的として設計されております故。二本あったコンバットナイフでも、この金属に穴を空ける事さえ叶わないでしょう」
「そうか…それは無念……ではどのようにして持ち帰れば――『プルー！』――ん？何だこの妙に間の抜けたような甲高い声は？」
「さて、私にもさっぱり見当が付きません。戦闘準備を整えますか？」
「うむ。この声の雰囲気からしてそれ程危険な存在とは思えぬが、一応ナイフの五、六本は用意しておいて損はあるまい？」
「畏まりました」

リリナがナイフを構えるのと時を同じくして、『妙に間の抜けたような甲高い声の主』こと、『緑色をした楕円形の半固体』が、飛び跳ねながらノイウェルに向かっていった。
リリナは咄嗟にナイフを投げようとするが、中々狙いが定まらない。
そうこうしている内に、緑色をした楕円形の半固体はノイウェル目掛けて高く跳び上がった。

「ッ！！」
思わず身構えるノイウェル。
リリナもまた、ナイフを構える。

が、しかし。

ぽふっ

「「！？」」

緑色をした楕円形の半固体は、あろう事かノイウェルの頭に着地すると、そのまま幸せそうな顔つきでくつろぎ始めた。

「「……」」

暫し黙り込む二人。

「…のう、リリナよ」

沈黙の後、先に口を開いたのはノイウェルだった。

「…何でしょう、ノイウェル様」

「此奴は一体、何なのだ？」

「しがない低学歴暗殺メイドの私では皆目見当も付きません」

「そうか……」

抱える筈だった頭の上で、緑色をした楕円形の半固体がくつろいでいるため仕方なく腕組みをするしかないノイウェルの元へ、大きな紙束を小脇に抱えたスキンクが現れた。

「艦長ー。侍女さーん」

「おお、スキンク。丁度良い所に来てくれた。

…ところで、その手元の紙は何だ？此方では紙など殆どが虫に食わ

れておって読むどころか持ち上げることさえままならなかったぞ？」
「蟲もカビも湿気も通さねぇ金庫らしき代物に入ってましてね、鍵をブチ壊してこじ開けました」
スキンクは更にその後、資料を解読した結果得られた情報と、そのスライムの正体についてを報告した。

「ふむ。即ちこのスライムのような存在は、自我を持った高度な魔力結晶体であると？」
「そういう事ですね。更に言うとそいつにゃ、イゴールナクとかいう神の力を引き継いでるとかで。
何でも、そいつは自我に従って動き回り、自分が選んだ奴に独自の力を与えるんだそうです」
「選んだ者に……力を？」
「えぇ。そいつ自体が高純度の魔力の塊ですが、それと同時に選んだ相手に対し独自の力を貸すそうです」
「ではその、独自の力とは何なのだ？」
「その辺の記述は複雑な文体が多いのでまだ完全には翻訳してませんが、『命令』を意味する単語があったので、それに関するものかと」
「命令…？まぁ良い。ひとまずはこのまま頭に乗せておくとしよう。別段害を為す訳でもあるまいしな」
「それもそうですね。
それで、良いところに来たとか何とか言ってましたが、何の事で？」
「おぉ、そうであった。
いや実を言うとだな、この壁面に埋め込まれておる透明な板、これをそなたに周囲の壁ごと切り出して欲しいのだ」
「そういう事でしたか。それならばお任せを。

コイツでもって、何とかやってみます」
そう言ってスキンクは金属の壁から樹脂板を切り出し、更に器用な手つきで樹脂板にまとわりつく金属の板を剥がした。
「このリベットは持ち帰ってから抜けば良いでしょ」
「それもそうだの。では、帰るとするか。余等のアストライアへと」
「えぇ。そうしましょう」

こうして遺跡調査を終えた一行は、来た道を戻るようにしてアストライアへの道を急ぐ。
休憩を終えたレリオはまた何時も通りに回復していたし、禾槻の容態も無事治癒に向かっているようだった。
幸いなことに行きで襲ってきた魔物とも落ち合うことはなく、誰もが無事に帰還できるものだと思い込んでいた。

しかし、現実とは非情であり実にサディスティックである。
まぁ、マゾヒスティックな現実とはどんなものだと聞かれたら答えることは出来ないわけだが。

それは兎も角として、帰還しようと遺跡内部を進む一行を、影から付け狙う者達が居た。
それらは人間等からすれば実に小柄であったが、一行を遙かに上回る総数で彼らを見張っていた。
そしてまた、それらは見張りながらにして、動いてもいた。

何処の誰が何時言った言葉か、「帰宅までが旅である」という言葉がある。
これは「楽しい旅だったからと言って、帰り道に気を抜いていてはならない」という意味の言葉であり、これは無論現在の一行にも該当していた。

しかしそんな事に気付かない面々は、他愛もない雑談に華を咲かせながら帰路を急いでいた。

状況によっては魔物をも上回る脅威が、背後に迫って居るとも知らずに。

脱出、『走り回る強者達』と『恐ろしくも儚い者』について（前書き）

執筆：蠱毒成長中

脱出、『走り回る強者達』と『恐ろしくも儚い者』について

―前回より・遺跡内部―

一行は背後から追尾してくる無数の生物から逃げるのに必死だった。

「クソッ！何なんだよアレは！？」

全力で群れから逃げる事しか出来ないレリオは、ただ大声で苛立ったように叫ぶ。

「……虫」

それに淡々と答えるのは、同じく逃げる事しか出来ないラグナ。

「虫だってのは判ってる！アレを見て猫だと思う奴が居るか！？兎だと思う奴が居るか！？

居たら俺はそいつの口に焼夷弾を至近距離でブチ込んでやる！」

「怒るのはお止しよレリオさん。怒ったってあの虫が全滅するわけじゃないだろう？」

「アウロの言うとおりだ。落ち着かんか、レリオ」

「アンタ等は何でそう冷静で居られるんだ！？エレーナなんてもう気を失ってるんだぞ！？」

叫ぶ彼の腕の中には、大量の虫のヴィジュアルを直視した事で気を失ったエレーナが抱かれている。

「それにしてもこの虫は何なのでしょう？」

「……多分ゴキブリ」

「確かに脚も早いですし、一年を通して寒冷な気候のアルコノストでこれほどの数が生き延びている事を考えるとその可能性は否定出来ません」

「でも妙じゃない？ゴキブリは寒さが苦手でカスミガ北部ですら見掛けないって聞いたんだけど。

ねぇレリオさん、どう思う？」

「そこで俺に聞くなよ！虫の話ならスキンクにでもしろ！アイツ確か何時も大体デカイ虫が表紙のわけわからん本とか読んでるから詳しいだろ！
なぁ、詳しいよな！？おい！ガスマスク！」

何とも言えない形で話を振られたスキンクは、淡々と語り出す。

「今背後から俺らを追っ掛けてる一団は『オニアオメハシリアブ／アルコノスト亜種』で間違い無ぇだろう。
動物界節足動物門昆虫網双翅目走脚亜目ハナシアブ下目ハシリアブ上科ハシリアブ科の昆虫だ」
「アブ？ゴキブリではないのか？」
「ゴキブリは多新翅上目でアブは内新翅上目ですから根本から違いますぜ、艦長」
「……御託は良い。そのハシリアブはどんな虫？」
「グッドクエスチョンだラグナ。１０点やる。
コイツ等は戦時中方々でブチ撒かれた魔力の素に汚染された環境で産まれ育ったお陰で突然変異通り越して新たなる血統に目覚めちまった奴らの中でも特別枠に入る奴らでよ。
環境次第じゃ生物学の範疇を超えた急速進化を遂げちまう『四世界生物』の一種でな、そのお陰で本来なら南大陸限定だったのが四大陸全てに亜種が居やがんのよ。
基本陸棲だが、必要に応じて水の中だろうが平然と突き進んで来やがるし、しかも気管と鰓を併せ持ってるお陰で何時間水に潜ってようが溺れねぇんだと。まぁ流石に泳ぎは無理らしく、水底を走ってるがな。
ハナシアブ下目って名前の通り、祖先が空を飛ぶのに使ってた一対の翅は退化してて面影もありゃしねぇ。
アルコノスト亜種は餌不足からくる飢餓に対抗する為に体内でトレハロースっつー特殊な糖分を生成できる。こういう訳だから絶食に

も強い。
その上寒対策の為に外骨格には防寒に最適な構造の体毛が生え揃い、しかも体内には脂肪層まである。こういう理由で吸熱系魔術は効力が薄い。
走る速度は平均で時速３０ｋｍぐらいとされてるが、マーサレスの記録じゃ時速６０ｋｍ出して乗用車襲った雄が居るらしい。
しかも持久力も高ぇから、ヘバんのを待つってのは得策じゃ無ぇだろうな。
アブってのは本来他の動物の体液やら花の蜜なんかを啜るんだが、コイツ等は口吻からある種の消化酵素を分泌出来てよ、コイツで溶かした血肉を直啜りするんだそうだ」
「軽くホラーだねぇ…」
「ホラーつかスプラッタだぜ姉御ォ。この消化酵素ってのは蚊の唾液みてぇな麻酔成分が一切無ぇもんだから、針の太さも相俟ってエライ勢いで痛み出すんだそうだ。
著名な男優で武道家、かつテレビタレントでもある探検家の富士岡邦宏ってオッサン知ってるか？
あのオッサンが一度刺されたそうなんだが、余りの激痛で性懲りもなく涙流して大泣きしたらしいぜ？」

スキンクの解説を聞いた一同が一斉に青ざめる。
富士岡邦宏と言えば、カスミガ出身の男優であり武道家であり探検家、そして近頃はメディア出演もこなす著名人である。
その鍛え上げられた強靭な身体と勇猛で気高き精神を以て数多くの修羅場をくぐり抜けてきた、まさカスミガの強豪男児が代表格な訳だが、その富士岡が大泣きとは相当痛いのだろう。
青ざめた表情を知ってか知らずか、スキンクは更に解説を続ける。
「まぁ幸い口吻は出っ張り一つ無ぇ純粋な針型だそうだからよ、引き抜こうと思えば案外簡単にいくらしい。

殆どが数十匹単位の群れで活動、総数三桁ともなりゃ竜だろうが殺す勢いだそうだぜ」

竜をも殺すという発現が、一同の不安を更に煽る。

「まぁ安心しな。そんなんでも無敵じゃねぇんだ。
実は連中浸透圧調整が出来ないらしくってよ、塩水に入ると溺れ死ぬんだとよ。
まぁここでそんな事言っても無駄だって事は承知の内だからよ、俺としては――「逃げ回っていたって仕方がない！ここは僕が食い止める！」――（´・ω・`）」

スキンクの発現を遮るようにして叫んだ禾槻は、立ち止まって己の体内に内包する超能力を発動させようと構えを取る。

ふと禾槻の能力―発火―から、ある逸話を思い出したスキンクは、必死で彼を止めにかかる。
「霧川ァァァァ！止せ！止めろ！そこへ火を放つんじゃねぇぇぇぇぇぇッ！」
しかし当の禾槻はそんな言葉で止まる筈も無く、特大級の火炎でハシリアブの群れを包み込む。
「幾ら寒さに強い虫でも、これくらいの炎で焼けば一溜まりも無いでしょ…」

掠れるような声を絞り出した禾槻は、そのまま地面に倒れ込む。
大規模な炎に包まれるハシリアブの群れを目の前に、スキンク以外は勝利を確信していた。
だが、現実とは実にサディスティックなものである。

「……群れが……動いてる……？」

ラグナの推察は実に的確なものだった。

高温の火炎に包まれその身を焼かれ、臓器を煮詰められている筈のハシリアブの群れは、尚もその勢いを止めることなく動き続けていたのである。

走る速度は焼かれる前の三分の一程度だが、それでも早い事に変わりはない。

即ち、巨大な火達磨となった蟲の群れが、軽乗用車レベルのスピードで突っ込んで来ている。

簡単に言い表せば、そんな所だった。

「スキンクよ、この件の事情説明は可能か？」

ノイウェルの問に、スキンクはあくまで淡々と答える。

「似たような事例があります。無数の飢えた蝗が飛ぶ群れ―俗に飛蝗などと呼ばれる現象に対抗しようと火炎魔術を蝗の群れに放った所、燃え盛る蝗が尚も飛ぶことを止めず突っ込んできたとか…」

「成る程……蟲とはかくも我々の常識を超越しておるのだな…」

「話し合ってる場合ですか！早く逃げないと死にますよ！」

「そうだぜ！アンタ等、消し炭になりてェのか！？」

セルシアとレリオの言葉で我に返った二人は、ひとまず精神力を使

い果たして休憩前以上に疲弊しきって倒れ込む禾槻を抱え上げると、一目散に走り出した。
しかし、一時的に逃亡を止めた事が仇となり、一行は思う以上に力を出す事が出来ない。

一行の走る速度が落ちる中、火達磨となった蟲の群れは尚も等速で進み続ける。
そして遂に、その火炎が一行に襲い掛かろうかという、その時。

火達磨となった蟲の群れが、透き通った緑色の防護壁に衝突。
炎で焼かれボロボロになっていたキチン質の身体が、悉く崩壊した。

『……？』

一瞬死を覚悟した一行は、その状況が飲み込めなかった。
しかし、『透き通った緑色の防護壁』の正体に気付いたノイウェルが、ぽつりと言う。

「……もしや、あのスライムか…？」

ノイウェルはすかさず自らの頭上に手をやるが、確かにあのスライムらしき物体の姿はない。
暫くして、炎に包まれた蟲の群れが完全に消滅すると、壁が収縮。
緑色をした楕円形の物体となり、再びノイウェルの頭上へ飛び乗った。

「……変身……いや、変形能力…」
「そうらしいね…あのスライム、見掛けに寄らず中々やる奴じゃないのさ」

状況が落ち着いたところで、スキンクは入手した資料と辞書に目を通す。
見れば確かに、イゴールナクの項目には『命令』『遂行』『完全』等の単語が見える。

即ち、イゴールナクの力を引き継ぐ魔力結晶体が持つ能力とは、『主たる者の命令を完璧に遂行する事』だったのである。
命令されればなんでもやる。なんでもやるという事は、どんな姿にでもなるという事。
先程はノイウェルが心の中で「この群れから身を守りたい」と、咄嗟に強く思ったのをどういう訳か察知し命令と判断。
実行に移し、壁に化けて一行を守ったのである。

「…この資料、持ち出してきて正解だったぜ…」
我ながら適切な行動だと感心するスキンクだったが、そうゆっくりもして居られないようだった。

「……聞こえる」
ラグナの呟きは、明らかに怪訝な表情によるものだった。
更に彼女はつけ加える。
「……来る…さっきのと同じ奴らが……それも、もっと多い……」
噂をすれば影が差すとばかりに、ラグナの発言はその後一分もせずに真実になってしまう。

遺跡深奥から、再びオニアオメハシリアブの群れが現れたのである。
消耗された体力では逃げることも叶わない。このスライムの能力が必ず言うことを聞くとはいえ、先程のような壁がどれ程持つかも定かではない。

死を覚悟した一向の顔が絶望で陰る。が、しかし、一人冷静な者が居た。

スキンクである。彼にはある奥の手があったのだ。
その奥の手とは、探索開始3週間前程の事。
アストライアの面々が補給等を目的に立ち寄ったヤマタイにて『熊猫堂』の面々と久々に再会した後の事。
飯と雑談を終えて店から出ようとすると、店主から呼び出しを受けたのである。

――三週間前・ヤマタイ・『熊猫堂』裏――

「どうした店長。俺を呼び出しとは、何かあったのかい？」
「えぇ。実を言うと、梅田殿から伝言を預かっておりましてな」
「梅田…？梅田ってェと、アイツか？」

梅田とは、そこそこ多い『熊猫堂』常連の一人であり、店主やアランとも堅い友情で結ばれている人物の一人である。
一人と数えるがしかし、その詳細な情報は不明であり、スキンクは彼を、四大陸に於いて一般的に文明社会で生きる種族―の何れにも属さない存在なのではないかと推測していた。
身長は1．7m程と平均的。人らしい形こそしており言葉も発すれば本を読んだり一応喜怒哀楽の感情もあるらしいが、全身をすっぽ

りと覆うくすんだ白いコートの端々からは節足や触手のような者がかいま見える事があり、運動は得意でないと良いながらも変なところで妙に高く跳んだりする。
そんな、変な男だった。

「えぇ。実は先月、彼から言伝が有りましてな。
貴男が来たら、彼の家へ向かわせよと言われておりまして」
「そうか…有り難うよ店長」
「いえ、スキンク殿もお気を付けて」

―数分後・梅田の自宅―

梅田の自宅は以外にも町中の住宅街にある、何の変哲もないような一軒家である。
スキンクは呼び鈴を鳴らし、声をかける。
「梅田よォ、来させて貰ったぜ？」
『スキンクか…鍵は開いているから中に入ってくれ。居間で茶でも出そうじゃないか』
梅田に言われたとおり、スキンクは中に入っていった。

家の中は相も変わらず散らかり放題で、埃が舞っていた。
居間に到着すると、梅田は一人正座でテレビを見ている最中だった。

「久し振りだな、スキンク。相も変わらずなようで、安心したぞ」
「お前こそ相変わらずだな。で、用件てのは何だ？」
「あァ、そうだった。実はお前さんに渡したい物が有ってね」
そう言って梅田は、テーブルに備わった引き出しから小さな瓶を取り出した。中には白い半透明の粒子が詰まっている。
「こいつだよ」

「……これは、卵か何かか？」
「如何にも。世にも貴重なヒトヤツメダニのシスト卵だよ」
「ヒトヤツメダニ！？まさかまだ生き残りが居たのか！？」
「いや、これはあくまで死骸から得られた遺伝情報を元手に人為的に増やしたものさ。
だが、野生個体とさして違いはない。
あるとすれば、世代交代が上手く行かないことぐらいだろうね。どう頑張ろうとも孫の世代には繁殖力が無いらしくてねー…元々環境の変化に弱い生き物だというのに、弱点が割増では…」
「いやぁ、十分だろ。だが何故、俺にこれを？」
「…感じたんだよ。この力はお前さんにこそ必要だとね。風の噂で聞いたが、近々アストライアは北の遺跡に向かうそうじゃないか」
「あぁ、決行は三週間後さ。無論俺も現場で頑張るつもりだ」
「そうか…なら、やはりそれは君が持っているべきだ。何、心配は要らないさ。貴重と言ったってストックは幾らでもあるんだ。
もし必要とあれば、また来ると良い。ある程度なら拵えてあげよう」
「恩に切るぜ」

――回想終了――
―遺跡内部―

「（まさか本当にコイツを使う事になろうとはな……。
ヒトヤツメダニの卵は高温・低温・真空等、過酷すぎる環境下に置かれるとシスト形態に移行。
産卵に適した温度と湿度で適量の酸素を得た瞬間、一斉に孵化する…。
その癖卵から孵った瞬間環境の変化に弱くなるが、その分奴らには力がある…良し、使うか）」
スキンクは懐から小瓶を取り出し、その中身を迫り来るハシリアブ

の群れの居る方向へ散布した。
瓶の中身を確認するが、幸いなことに中に卵の残りは入っていない。
中途半端に残していても厄介だ。

ハシリアブの群れは尚も走り続ける。
その光景に殆どの面々は絶望していたが、ここで一同は目を疑うこととなる。

炎を受けて尚進むことを止めなかったオニアオメハシリアブの群れが、突然苦しみだしたのである。
そしてその体表面に、白い粒上の物体が発生しては膨らんでいく。

「あれは…一体？」
「……何が起こった？」

一同が次々と狂ったように死んでいくハシリアブの群れに驚きを隠せないで居る所で、スキンクが言う。

「ヒトヤツメダニ…予想を絶するスペックだな……」
「ヒトヤツメダニ……？
スキンク、そなた何をした？」

唖然とした表情で問うノイウェルに対し、スキンクは淡々と言う。

「あの石頭の蟲共を皆殺しにするよう仕組みました」
「それは解っておる。ではなく、あの蟲に吹き出た白い粒は何なのだと聞いておるのだ」
「あァ、あれについては先程言ったとおりですよ。ヒトヤツメダニという極小の吸血蟲です。

それの卵をバラ撒いてやったんですよ」
「極小の…吸血蟲…？」
「えェ、まァ。
ヒトヤツメダニ。動物界節足動物門鋏角亜門クモ綱ダニ目ケダニ亜目ツメダニモドキ下目フクレダニ上科フクレダニ科に属する生物です。
全長０．２~１ｍｍ程。節足動物のみに寄生するダニの一種であり、数千或いは数万匹からなる群れを形成し、高速で動き回り、短時間で莫大な量の体液を吸う事が出来ます。
この為、限界まで体液を吸い尽くすと一抱え程にまで脹れ上がり、自らの脚での移動は不可能となります。
単為生殖で繁殖する為か、全ての個体の腹の中には産まれながらに無数の卵がぎっしりと詰まっておりまして、吸い取った血液の栄養分を得た卵は母体内で孵化。親の腹を突き破り一斉に飛び出た後、直ぐさま吸血対象を探りに走ります。
この様に環境条件さえ最適ならば鼠算式に増え続けますが、環境の変化に大変弱いのが特徴でして。
ただそれを踏まえたとしても、オニアオメハシリアブの群れを壊滅させるには申し分ないレベルかと」

「そうか…ダニか…しかしそなた、そのダニの卵とやらを何処で？」
「カスミガに知人が居ましてね。その知人が、『何れ使う事になる』と言って渡してくれました。
いや全く、俺としても最初は驚きましたぜ。絶滅したはずのヒトヤツメダニをクローニングで培養してやがったってんですからね」
「……絶滅？」
「そう。ヒトヤツメダニは環境の変化に滅法弱くてですね、卵の状態でシスト形態に入れば高熱・低温・真空・放射能にも堪え忍びます。
しかしまぁ、産まれた途端にその耐久性は何処へやら。

住処のの温度が二度変わっただけで群れの２５％が死滅するような軟弱者なんですわ。

知り合いは孫世代には繁殖力が無いって言ってましたから、あの連中も自然と絶滅すると思いますが。

……しかし凄ェ。群れの規模に差違があったと踏んでもこの勢いはおっかねぇや。

もう動いてるアブが居ねぇもんな」

「……何はともあれ御苦労であった。さて皆の者、早急にアストライアへと戻るぞ。

虫の群れ云々以前に、負傷した者を休ませねば艦長失格というものだ」

こうして、予想外のトラブルこそあったものの、一行は何とか無事にアストライアへ帰還した。

帰還、『探査の結果得られた物』と『その恐るべき実態』について（前書き）

担当：蠱毒成長中

帰還、『探査の結果得られた物』と『その恐るべき実態』について

―帰還後・アストライア内部研究室―

コンコン、ココン

「……誰だ？」

部屋の主・ハウエンツァは散らかり放題の部屋に寝転がりながら気怠そうな声で言った。

「スキンクで御座ェます。件の収穫物を持って参りました。解析をお願いしたい」

「解析だァ？テメェ、俺様が今物凄ェ重要な課題を遂行中だって事を知らねェでそう言ってるのか？」

「残念ながら存じ上げませんなァ。一体どういった案件で？」

「テメェ如きにゃ話すまでも無ェ。…用が済んだんならとっとと失せろ」

「そう言われましてもなァ、用が済んどらんので失せようにもねェ～？」

「……」

ハウエンツァ・パルパトは、この全身黒尽くめの細長い男を大変忌まわしく思っていた。

自称人間と言う割に人間を逸した体つきで感性も人間離れしているし、度々奇行に走っては不快感だけを残していく。

外出時以外は殆ど書庫に籠もっていて何処か怪しく、また時折彼が他のクルーに説教をしている最中唐突に現れてはいきなり揚げ足を取られるという事もザラであった。

更に彼の専門は主に工学系や考古学等であり、生物学や化学についてはあまり詳しくない。

そんな彼の実態を知ってか知らずか、説明中にハウエンツァの苦手分野についての知識を淡々と補っていくなど、自尊心故に天才を自称する彼にとっては実に不愉快極まりない事であった。

「……」

熟考の末、長く関わるだけ無駄だと判断したハウエンツァは自ら引き下がることを選択した。

「…何が要る？」

「大型スキャナと立体映像映写装置、それから３Ｄ系と古代言語翻訳のアプリケーションソフトウェアとＣＡＤの最新型をば。可能であればソフトウェアは共にシノテックス社製で１Ｌ７Ｑ以降の製品をお願いしたい」

ハウエンツァは散らかり放題の部屋から所定の品（ソフトは最新式のもの）を素早く探し出す。

「道具は返さなくて良い。寧ろ返すな。つーか、世界の危機にでもなんねぇ限り俺様の目の前にゃ姿を現すな。判ったら失せろ食糞変温動物が」

そう言うと、ハウエンツァは道具をスキンクに突き付け、ドアを乱暴に閉じて部屋の中へ戻っていく。

道具を受け取ったスキンクも直ぐさま部屋の前から立ち去る。

「精々粋がってろ自惚れ野郎」
随分と部屋から離れた所で、スキンクは吐き捨てた。

―書庫―

スキンクは早速探査を開始した。
先ずはモバイルパソコンの電源を入れ、ソフトウェアのインストールと装置の接続を始める。
まずはスキャナーに、ノイウェルとリリナが入手した設計図を読み込ませる。
透明な樹脂板の内部にレーザー加工で掘られた線は案外あっさりとスキャンされ、ＣＡＤの画面に映し出されていく。
スキンクは更にそのデータを３Ｄソフトのアプリケーションへ送り込み、部品の図面を立体化。
更にそれらを組み上げたデータを立体映像投射装置に送る。

ホログラフィックとして映し出されたのは、変の長さがバラバラの曲がりくねった三角形を繋ぎ合わせたような形状の物体だった。
その形状は一見不可解で大した意味を持たないのようだったが、スキンクはすぐさまその形状を理解した。

「…コイツは……肝臓か？」

その絶妙な形状は、肝臓で間違いなかった。
機械的なチューブやシリンダのようなものこそあるが、その全体的なフォルムは完全に肝臓だった。
図面の詳細が判明したところで、スキンクは続けざまに研究報告書

をスキャナーに通し翻訳ソフトを起動する。
翻訳は瞬時に終了。スキンクは結果として得られた情報を詠み上げていく。

「…『新型魔導機関内蔵人工肝臓』……やっぱ肝臓だったか……『サイズは平均的な人間属の成人男性相当』…まぁ軍艦傾斜っつったら大体成人男だしなぁ。
『肉体に接続されたコードから装着者の魔力を吸収し半永久的に駆動し続ける』……か。
『この性質上、外部からのエネルギー補給は実質不要であるが、高い魔力を内包し続ける事が出来る者に使用は限られる』……まぁそりゃそうだわな。

『更にこの人工肝臓には、肝臓としての役割の他、血液生成、身体能力向上等の役割を持つ』……つまり、入れてるだけで魔法使いも格闘家って訳だ。

んーでェ…っとォあぁ!?何だと!?」

スキンクは次の文を読んだ途端、驚きの余りひっくり返りそうになった。

「おいおいおいおいおいおいおいおいマジかマジなのか?

この報告書、『装着者の意志に反応する起爆システム内蔵』とか書いてあるぞ!?

しかもご丁寧なんだか何なんだか、爆発力はオクタニトロキュバン

の１４３．６％相当って何の冗談だオイ！？」

オクタニトロキュバン。
キュバンのニトロ化合物であり、理論上最強の爆薬とされる。
研究所内で少量生成されたのみである事から性能の詳細は不明であるが、前述の通り理論上は最強の爆薬であるとされる。
ただ、爆薬としては余りにも製造に金が掛かりすぎるらしく、グラム単価が純金並みという法外な価格を誇る。
また、２０１１年現在の実験爆薬で最も高性能とされるヘキサニトロヘキサアザイソウルチタンと比べて特に優れたところも無いため、実用化はされないというのが一般的である。
爆発する際に約１，２００倍の体積膨張を伴い、約８００ｋｃａｌ／ｍｏｌのエネルギーを放出して８モル当量のＣＯ２と４モル当量のＮ２を生成する。こういった理由から、実用性は皆無だが理論上は最強の爆薬であるというのが定説である。
また、オクタニトロキュバンは水素を含まないため爆発すると完全に８ＣＯ２＋４Ｎ２になる。
そのため爆発に際して発生するガスは完全に無色透明になることが予想され、完全な無煙火薬となることが期待されている。が、法外に金が掛かるので実用化には至らないであろう。

問題はそこではない。
この人工肝臓の自爆装置によって発生する爆発が、そんなオクタニトロキュバンを４５．６％も上回るという事である。
これは勿論読者諸君の想像など遙かに絶する威力であり、装着者の意志一つで巨大建造物一つ程度なら軽々吹き飛ばせるという事に他ならない。
もしかすれば、街一つでも行けるかもしれない。人数を集めれば国一つも幻想とは言い切れなくなるだろう。

そんなとんでもない秘宝の設計図と詳細を目の当たりにしたスキンクは、ひとまずアプリケーションソフトを閉じて作業を終了。
翌日ノイウェルにこの一件を報告。シュヴァルトライテに売却すべきかどうかを相談した。
そして相談の結果ノイウェルは『シュヴァルトライテは三度の飯より研究好きの国。自ら進んで戦争を引き起こすような真似はするまい』と判断。
結果この人工肝臓の設計図と研究報告書は、シュヴァルトライテに売却される流れとなったのであった。

その後スキンクは個人的に持ち帰った『神々の華』計画の資料を翻訳。
これからの冒険の足しになればと、メンバー全員に資料を翻訳した冊子を配ったという。

また、スキンクが解放しノイウェルに懐いた、緑色で楕円形をした動き回る半個体状の物体は、その間の抜けたような甲高い鳴き声から『プルル』と名付けられ、アストライアのマスコットとしてノイウェルと共に不動の地位を築くに至る。

白い剣を模した古の航空戦艦アストライア。
その矛先の向かう先にあるのは、希望か絶望か。創造か破壊か。生か死か。
それを確定的に断言できる者は、現時点では幸いなことにこの世に存在していない。

多分。恐らく。辛うじて。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0206r/

アストライア初陣

2011年4月3日22時55分発行